

長野市の埋蔵文化財第32集

ちゅうじょういたき 中条遺跡

—長野県立松代高等学校体育馆建設事業地点—

1989. 2

長野市教育委員会

序

長野市松代町は、昭和41年の2市3町3か村の合併により長野市に編入され現在に至っています。もとは埴科郡松代町であり、真田10万石の城下町として発展して来た史跡の町であります。そしてこの町は、近世ばかりではなく、原始・古代よりその歴史事象を追い求めることができます。できる一歴史空間を有しており、古くより注目されてきた地域であります。特に古墳時代においては東日本で屈指の群集化をほこる大室古墳群があり、皆神山周辺の遺跡・古墳も他地域と趣きを異にする様相が見受けられるなど古代史研究上かかせない数多くの埋蔵文化財包蔵地が周知されております。

このような歴史的背景の中に松代高校体育館建設地があり、分布調査の結果、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であることがわかりました。それは先に記しました古墳の造営やそれ以降の松代地域の開発発展にかかる重要な集落跡の存在を示唆するものでありましたので、体育館建設事業に先立って記録保存のため発掘調査を実施いたしました。

本書は、その成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第32集として報告するものです。この報告が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご指導・ご援助を賜わりました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成元年2月

長野市教育委員会 教育長 奥村 秀雄

例　　言

- 1 本書は、長野市松代町西条地籍中条遺跡における「長野県立松代高等学校体育館建設事業」にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、昭和62年度において実施し、整理・報告書刊行にいたる業務を昭和63年度において行なった。
- 3 本書は、調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 4 住居址等の番号は、遺構確認順に付した。尚、13号住居址は後に16号住居址に含まれるものと考えられるようになり欠番である。
- 5 遺構の測量は、(有)写真測図研究所に委託し、1/20の縮尺で基本図をとり、本書では1/60の縮尺を基本としている。遺物については実測図1/4、拓本1/3で図示した。
- 6 遺物実測図中、断面をつぶしてあるものは須恵器・灰釉陶器、白抜きのものは土師器を表現する。また「糸」は回転糸切痕、「ヘラ」はヘラ切離痕を意味する。
- 7 本文中の調査日誌・遺構図に遺構略号を使用した。S Bは住居址、S Dは溝址、S Kは土壙Pは柱穴をそれぞれ意味する。
- 8 本書作成に至る調査員の分担は次のとおりである。本書の編集は千野浩が行い、()内に執筆分担章を記した。

遺構 矢口忠良(I・II)・千野浩(III・IV)・古岩井久仁・清水隆寿
遺物復元・注記 青木和明・中殿章子・横山かよ子・小松安和・中沢克三・大室昂
遺物実測・整図 千野浩・中殿章子・横山かよ子
- 9 調査にかかわる諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序
例 言

I 調査の経過	1
1 調査に至る経過	2
2 発掘調査の経過	6
3 整理・報告書刊行に至る経過	9
4 調査の体制	10
II 調査地周辺の環境	11
皆神山周辺の遺跡地名表	17
III 調査	22
1 土層序	22
2 遺構と遺物	22
1号住居址	22
2号住居址	25
3号住居址	31
4号住居址	34
5号住居址	35
6号住居址	40
7号住居址	44
8号住居址	45
9号住居址	47
10号住居址	48
11号住居址	53
12号住居址	54
14号住居址	55
15号住居址	56

16号住居址	56
17号住居址	57
18号住居址	57
19号住居址	57
20号住居址	60
21号住居址	63
22号住居址	69
23号住居址	73
24号住居址	75
25号住居址	80
26号住居址	82
1号土壙	86
2号土壙	87
3号土壙・集石遺構	90
4号土壙	92
1号溝址	93
暗渠排水遺構	96
遺構外出土実測土器觀察表	99
遺構外出土弥生時代土器・埴輪拓影	101

挿 図 目 次

- 1	松代高校配置図及び調査	2	- 1 0	3号住居址実測図	32
- 2	分布調査土層模式図	2	- 1 1	3号住居址出土土器実測図	
- 3	分布調査A トレーナー	4			33
- 4	分布調査B トレーナー	4	- 1 2	3号住居址出土土器拓影	34
- 5	A・B トレーナー土層実測	5	- 1 3	4号住居址実測図	35
- 6	表土除去	6	- 1 4	4号住居址出土土器拓影	36
- 7	表土除去	7	- 1 5	4号住居址	36
- 8	残土処理	7	- 1 6	5号住居址	36
- 9	残土処理	7	- 1 7	5号住居址実測図	37
- 1 0	住居址の調査	8	- 1 8	5号住居址出土土器実測図	
- 1 1	住居址の調査	8			38
- 1 2	住居址の調査	8	- 1 9	5号住居址出土土器拓影	39
- 1 3	6号住居址の調査	9	- 2 0	6号住居址実測図	40
- 1 4	24号住居址の調査	9	- 2 1	6号住居址	41
			- 2 2	6号住居址カマド	41
- 1	皆神山周辺の地形	11	- 2 3	6号住居址出土 土器実測図	42
- 2	千曲川より皆神山を臨む	12	- 2 4	6号住居址出土 土器実測図	43
- 3	象山より調査地を臨む	12	- 2 5	7号住居址実測図	44
- 4	調査地周辺の地形図	13	- 2 6	6号7号8号住居址	44
- 5	松代扇状地沖積面の 主要遺跡分布図	14	- 2 7	7号住居址出土土器実測図	
					45
- 1	遺構分布図	23	- 2 8	8号住居址	46
- 2	1号住居址出土土器実測図1	24	- 2 9	8号住居址カマド	46
			- 3 0	8号住居址実測図	47
- 3	2号住居址	25	- 3 1	8号住居址出土土器実測図	
- 4	2号住居址実測図	26			47
- 5	2号住居址出土土器実測図	27	- 3 2	9号住居址実測図	48
			- 3 3	9号住居址出土土器実測図	
- 6	2号住居址出土土器実測図	28			48
- 7	2号住居址出土土器実測図	29	- 3 4	10号住居址	49
- 8	2号住居址出土土器拓影	30	- 3 5	10号住居址実測図	49
- 9	3号24号住居址	32	- 3 6	10号住居址カマド	50
			- 3 7	10号住居址土器出土状況	50

- 3 8	10 号住居址出土土器実測図	51	- 6 8	22 号住居址出土 土器実測図	72
- 3 9	11 号住居址実測図	53	- 6 9	23 号 22 号 11 号住居址	73
- 4 0	11 号住居址出土 土器実測図	53	- 7 0	23 号住居址実測図	74
- 4 1	12 号住居址	54	- 7 1	23 号住居址出土 土器実測図	75
- 4 2	12 号住居址実測図	55	- 7 2	23 号住居址出土土器拓影	75
- 4 3	14 号住居址実測図	55	- 7 3	24 号住居址実測図	77
- 4 4	15 号住居址実測図	56	- 7 4	24 号住居址カマド	78
- 4 5	16 号住居址実測図	56	- 7 5	24 号住居址出土土器状態	78
- 4 6	14 号 15 号 16 号住居址	56	- 7 6	24 号住居址出土 土器実測図	79
- 4 7	17 号住居址実測図	57	- 7 7	25 号住居址	80
- 4 8	18 号住居址実測図	57	- 7 8	25 号住居址実測図	81
- 4 9	17 号住居址暗渠排水遺構	58	- 7 9	25 号住居址出土 土器実測図拓影	82
- 5 0	18 号住居址	58	- 8 0	26 号住居址実測図	83
- 5 1	19 号住居址実測図	59	- 8 1	26 号 12 号 22 号 23 号住居址	84
- 5 2	19 号住居址出土 土器実測図	59	- 8 2	28 号住居址カマド	84
- 5 3	19 号住居址出土土器拓影	60	- 8 3	26 号住居址出土 土器実測図	85
- 5 4	19 号 21 号 4 号住居址	60	- 8 4	1 号土壤実測図	86
- 5 5	20 号住居址暗渠排水遺構	61	- 8 5	1 号土壤	87
- 5 6	20 号住居址実測図	61	- 8 6	2 号土壤実測図	87
- 5 7	20 号住居址出土 土器実測図	62	- 8 7	2 号土壤	88
- 5 8	20 号住居址出土土器拓影	62	- 8 8	2 号土壤土器出土状態	88
- 5 9	21 号住居址	65	- 8 9	2 号土壤出土土器実測図	89
- 6 0	21 号住居址実測図	65	- 9 0	2 号土壤出土土器拓影	89
- 6 1	21 号住居址土器出土状態	66	- 9 1	3 号土壤集石遺構	90
- 6 2	21 号住居址土器出土状態	66	- 9 2	3 号土壤集石遺構実測図	91
- 6 3	21 号住居址出土 土器実測図	67	- 9 3	3 号土壤集石遺構出土 土器実測図	91
- 6 4	21 号住居址出土 土器実測図	68	- 9 4	集石遺構掘り上がり状態	91
- 6 5	22 号住居址実測図	70	- 9 5	4 号土壤実測図	92
- 6 6	22 号 11 号住居址	71	- 9 6	4 号土壤出土土器実測図	92
- 6 7	22 号住居址カマド	71			

- 9 7	4号土壙	92
- 9 8	1号溝址実測図	93
- 9 9	1号溝址出土土器実測図	..	94
- 100	1号溝址出土土器拓影	...	94
- 101	1号溝址、3号土壙集石遺構		
		95
- 102	暗渠排水遺構	95
- 103	暗渠排水遺構	95
- 104	暗渠排水遺構実測図	96
- 105	遺構外出土土器実測図	..	97
- 106	遺構外出土土器実測図	..	98
- 107	遺構外出土埴輪実測図	..	101
- 108	遺構外出土土器拓影		
	(弥生土器)	102
- 109	遺構外出土土器拓影		
	(弥生土器)	103
- 110	遺構外出土土器拓影		
	(埴輪)	104

I 調査の経過

1 調査に至る経過

長野県立松代高等学校（以下松代高校と称する）付近は、蛭川の支流関屋川の左岸に展開する宮崎遺跡の範疇に入るのではないかと考えられていた。しかし校舎の建築や校庭造成時には埋蔵文化財に関する徵候は何もなかったということから包蔵地としての認定を差控えていた。ただ近接する長野県警察学校建設工事に於ては土器の出土があったと伝えられていたので、包蔵地としての可能性は充分に考えられるところであった。

ところで、昭和62年度学校建設事業のうち松代高校においては、音楽室とクラブ練習室の改築、体育館の新設工事が日程にのぼって来た。以下発掘調査に至るまでの経過を日付を追って記載する。

6月3日付 長野県教育委員会高校教育課長より文化財保護法57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」の提出がある。

6月18日付 松代高校体育館等建設地については、「宮崎遺跡の範囲内と思料され、事前に分布調査が必要と考えます。」旨長野県教育委員会文化課長あて通知するとともに松代高校へ連絡する。

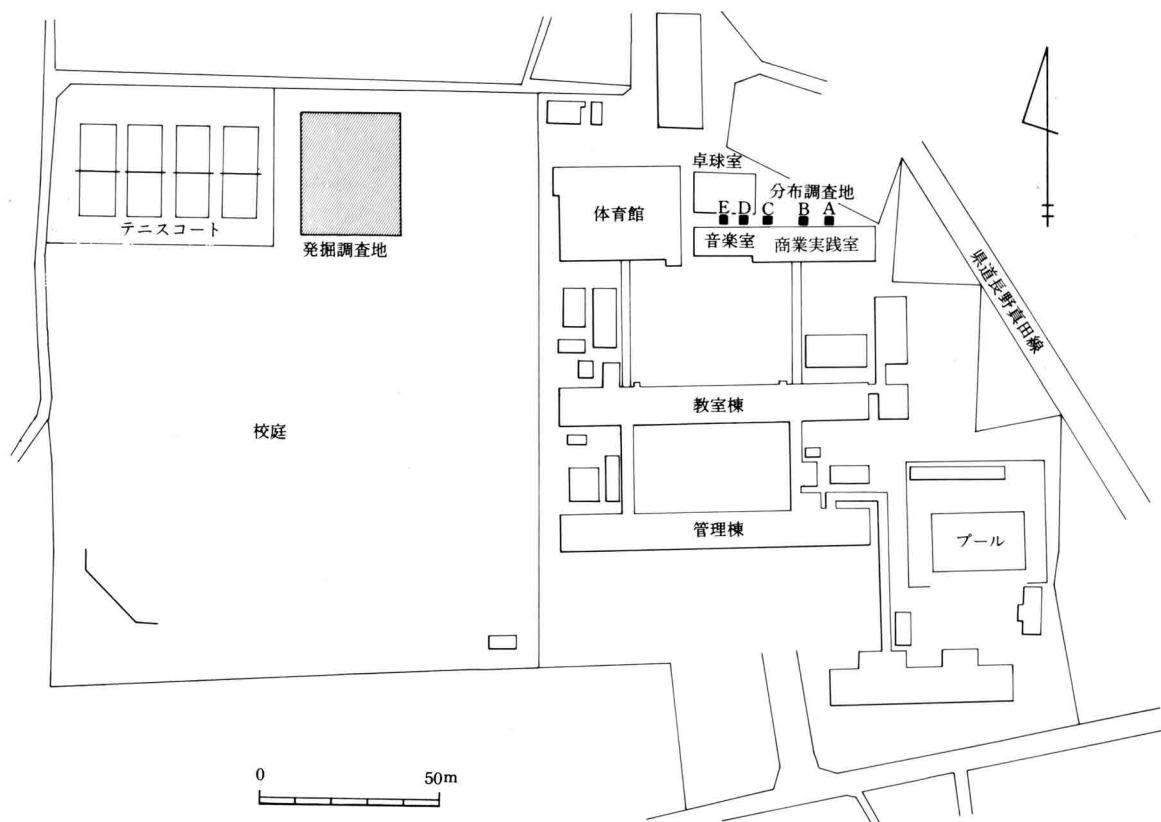
7月14日 分布調査を実施する。この間、分布調査の実施にあたり、調査日・経費・工事工程等々様々な諸問題について松代高校事務長と協議を重ねる。そして事業の緊急性を要する音楽室等改築地内の分布調査を先行し、体育館建設地は秋口に実施することにした。

尚、この分布調査に先立って建設予定地内の遺物等の表面採集をしたところ、体育館建設予定地付近より土師器の小破片を得た。グランド造成時に東側は削平され遺構等は消滅してしまい、逆に西側は盛土のため保護されている可能性がある。

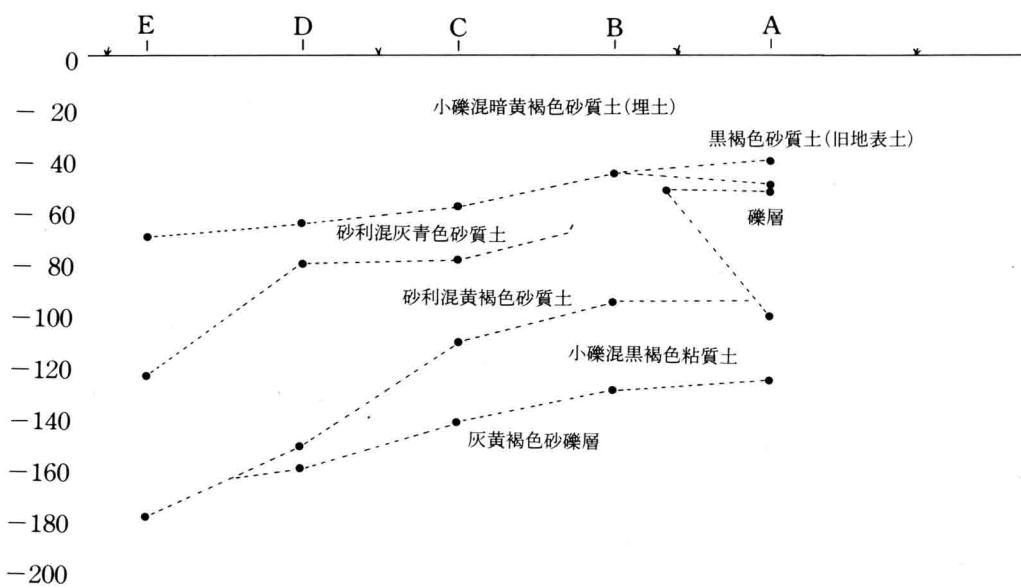
7月17日付 「松代高校音楽室等建設地内における埋蔵文化財の分布調査の結果について」と題し長野県教育委員会教育長及び松代高校校長あてに報告する。その内容は以下のとおりである。

☆

- 1 調査地 松代高校現卓球室と音楽室の間
- 2 調査方法 約8m間隔の巾1m・長さ2mの試掘坑方式による。試掘坑A～Eの5ヶ所（I-1）
- 3 調査日 昭和62年7月14日
- 4 調査者 長野市埋蔵文化財センター所長小木曾敏 調査係長矢口忠良



I - 1 松代高校配置図及び調査地



I - 2 分布調査土層模式図

5 立合者 松代高校事務長久保鉄宣

6 調査所見 (I - 2 土層模式図参照)

A地点 (商業実践室東端より 5 間半付近)

III層に頭大の円礫層。西端は実践室東端より 15m 付近。扇状地形に添って存在。礫中より須恵器出土。

IV層が遺物包含層と思料され、弥生時代土器・土師器小破片 4 点出土。

B地点 (A地点より約 8.5m 西)

II層は砂利混り黄褐色砂質土

III層は遺物包含層で最も厚く、35cm を測る。

C地点

II層に灰青色砂質土が出現し、D地点以降深くなる。この層の生成は、沼又は湿地によるものと思われる。

IV層の遺物包含層は、水分を多く含み漆黒色を呈する。

D地点

III層に黄褐色砂質土の堆積が厚くなり、IV層の遺物包含層がD地点の、実践室東端から 37m 付近で消滅する。

E地点

遺物包含層は全く認められない。

7 所見

(1) 直線的な調査で不明な点も多いが、少なくとも松代高校東側半分は宮崎遺跡の範囲に含まれる。

(2) 体育館にかけ平安時代以降(?)沼又は湿地の可能性がある。

(3) 遺物包含層からの土器は弥生時代土器・土師器の小破片で、それも破片面の摩耗が認められる。

(4) 同上層中に炭化物は若干認められるが近隣に遺構の存在はないものと思料される。

8 保護策等

建設事業中、遺構・遺物等の発見のあった場合は再協議する。

☆

8月29日付 松代高校長より体育館新設地内の試掘による範囲確認分布調査の依頼がある。これは政府の内需拡大政策により事業着工が早くなつたことに起因する。

9月3日 重機の掘削によるトレーナー法で範囲確認分布調査を実施する。調査者は長野市埋蔵文化センター所長以下 5 名の職員で実施し、立合者として松代高校教頭河西節郎・同高事務長久保鉄宣があつた。

9月4日付 「松代高等学校体育館建設予定地内埋蔵文化財範囲確認調査概要書」を長野県教育委員会及び松代高校に提出する。以下にその内容を記載する。

☆

1 調査地

長野県立松代高等学校グランド

2 調査の目的

昭和62年度に予定される体育館建設事業に先立ち、事業用地内を試掘して埋蔵文化財の有無を調査し、その保護対策に備える。

3 調査年月日

昭和62年9月3日

4 調査方法

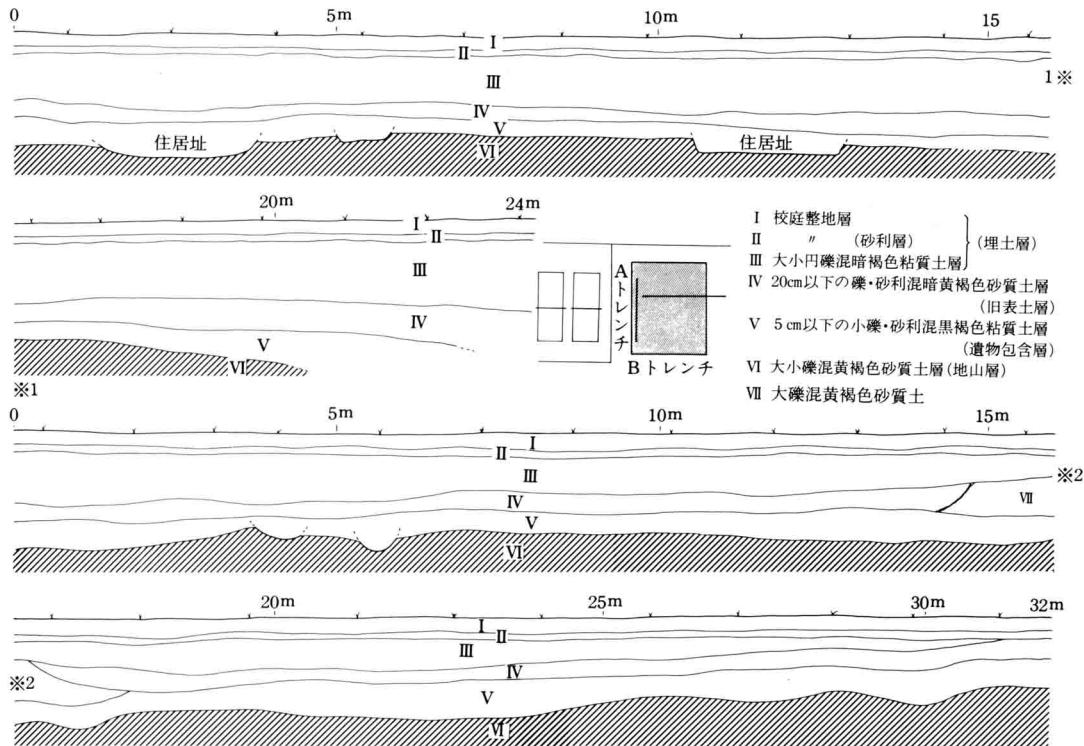
事業予定地内の任意の地点に試掘坑を設定する。試掘坑はバックホーを用いて掘削し坑内断面において土層を観察することにより遺物の包含状況及び遺構存在の有無を確認する。遺物・遺構等の存在が明確になった場合は、記録保存等の保護措置に備えるため掘削を最小限にとどめる。



I - 3 分布調査A トレンチ



I - 4 分布調査B トレンチ



I - 5 A (上 2 列)・B (下 2 列) トレンチ土層実測図

5 調査結果

調査は事業予定地に南北のAトレンチ(試掘坑)、東西方向のBトレンチをT字状に設定して行った。

第Aトレンチ (I - 5)

全体で6層にわたる堆積が確認された。そのうちI～III層はグランド造成時の埋め立てもしくはグランド整地層であり、現地表より平均して1mの深さを測る。IV層は暗黄褐色土層で旧表土と推定される。遺物包含層はV層の黒褐色土層で現地表より上面は1.20m、下面是1.60mの深さを測る。遺構は弥生時代住居址1、平安時代住居址1、時期不明土塙1が確認された。住居址はV層から地山と考えられるVI層へ掘り込まれている。

Bトレンチ

確認された層位はAトレンチと基本的に変わらぬが、VI層はトレンチ西端から7m付近のところより黄褐色砂層となる。Aトレンチで遺物包含層と確認されたV層は東西方面にもほぼ水平に堆積が認められるが遺物は土器片数片が出土したのみでほとんど認められない。トレンチ西端から4mと6m付近に土塙状の落ち込みが認められるが遺物は含んでおらず性格は不明である。この他本トレンチからは遺構と考えられる落ち込みは検出されていない。

6 調査所見

前述の調査結果よりすれば、Aトレンチ付近は遺跡の東北端付近であることが考えられ、

遺跡はAトレントより西方ならびに南方に広がっていることが推定される。ただしBトレント5m付近にも土塙状の落ち込みが認められることを考慮するならば、テニスコートフェンスより東側15~17mまでの範囲は遺跡範囲であると想定される。よってこの範囲に工事が及ぶ場合には発掘調査による記録保存の必要性が認められる。

☆

9月11日付 長野県教育委員会教育長（担当高校教育課）より文化財保護法第57条の3第1項の規定により「埋蔵文化財発掘通知」の再提出がある。

9月25日付 長野県教育委員会教育長（担当文化課）より発掘調査実施の通知及び計画書・予算書の提示がある。事業面積1,900m²のうち調査面積800m²以上を20日間で実施し、発掘調査費を3,992,000円とする。

尚、松代高校・文化課と協議の上、昭和62年度においては発掘調査を実施し、昭和63年度で、整理作業及び報告書を刊行することにし、その予算額は1,757,000円を予定する。調査に要する費用は総額5,749,000円である。

10月1日付 文化財保護法98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」を提出する。

10月2日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。

2 発掘調査の経過

10月2・3日 発掘調査機器の準備調整及び表土除去用の重機等の手配をする。

10月5日~13日 重機により表土を掘削し、ダンプカーにて搬出する。

10月6日 発掘調査機器を搬入する。

10月7日晴 本日より本格的に発掘調査を開始する。調査地北西隅部を深掘りしすぎたため、残土の処理地とするも、まもなく山盛になる。そのため急ぎベルトコンベア等の手配をする。

10月8日晴 昨日からの残土処理中に弥生時代から平安時代の遺物が多く出土しているため注意深く残土処理を進める。特に遺物が集中して出土している箇所は住居址との推定のもとにSB(住居址の略号)1~4の番号を付して取り上げる。



I - 6 表土除去

10月9日晴 残土処理を進める一方、遺構プランの確認をする。S B 1は集石を伴なった土塙になる模様であるがS B3・4のプランはいまだ不明である。本日、S B9までの遺構番号を付し、掘り込み検出面に石灰でプランを表示する。S B9付近より円筒埴輪片が出土しS B1付近から縁釉陶器が発見され注目を引く。

10月12日晴 午前中残土処理を進め、順次遺構プランの検出にかかるも検出面での判定は難かしい。そのため少しづつ掘り下げ終日確認作業を行う。午後4時頃一過性の降雨があったが、乾燥した検出面には焼け石に水といった感じで、遺構プランを浮き出させるには至らなかった。

10月13日晴 午前中に表土除去を終了し、検出面の残土置場等確保のため、掘削土を更に後退させ積み上げ作業を重機により行う。住居址番号の確定した遺構から遺物を取り上げる。S B5・6・8・10・11の調査を開始する。

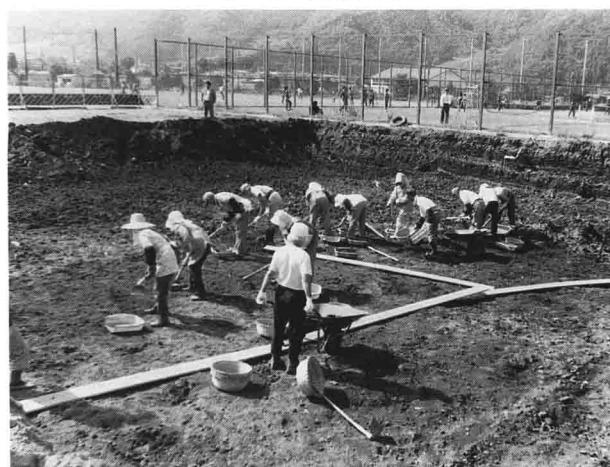
10月14日(晴・曇) S B6・8・10・11の調査を継続し、S B6を完掘する。新たにS B4・14・15・17・19・20の調査を開始し、S B14・15・17を完掘する。調査地西北部に暗渠状の遺構があり、残土処理後検出作業に入る。S B3(後にS B24になる)は更に東側に延びる可能性がでてきたため、急拠ミニバックホーの借用を依頼する。本日までに住居址番号を19まで付す。



I - 7 表土除去



I - 8 残土処理



I - 9 残土処理

10月15日(曇・時々小雨) ミニバックホーによる調査区の拡張と廃土の処理を行う。S B10・20及び暗渠状遺構の調査を継続し、新たにS B7・9の調査を開始する。S B6・8の写真撮影、S B6の実測作業を行う。

10月16日(曇・小雨) S B4・5・10・19の調査を継続する。S B7・9の写真撮影を行う。大型の台風19号が接近中とのこと午後断続的に降雨があり、調査を一時中止し遺物等整理作業を行う。

10月17日(曇・時々晴) 早朝まで激しく雨が降り、天気予報では全県に大雨注意報が出され、朝の降雨確率は90%とのことであったので本日の作業を中止する。

10月19日(曇) S B5・21の調査を進めるとともにS B2・3・18・22の調査を開始する。S B22から埴輪の出土が多い。

10月20日(晴・曇) 昨日の調査を継続する。S B4・19の清掃後S B21とともに写真撮影を行う。S B18・20及び暗渠状遺構の各写真撮影をし、S B10を平板測量する。

10月21日(晴・曇) 北アルプスに冠雪を見る寒い一日。S B2・3・5の調査を継続する。S B3の東側に古墳時代住居址(S B24)が重複している。その結果弥生時代住居址S B3の主軸方向は当初推定より南に振る模様。新たにS B12の調査にかかる。S B11・12を平板測量、S B22カマド・暗渠排水施設の細部測量を行う。



I - 10 住居址の調査



I - 11 住居址の調査



I - 12 住居址の調査

10月22日晴 S B2・3・4・12・21の調査進める。新たにS B23、S K1～3の調査にかかる。S B3の覆土層実測、S K2の写真撮影を行う。

10月23日晴 S B2・3・12・24の精査をし、S B3・24柱穴の検出及びS B21、S K3、暗渠排水遺構の写真撮影をする。調査地西側南北軸の土層実測を行う。

10月26日(晴・曇) S B14・15・20柱穴等の精査検出後写真撮影を行う。新たにS B25・26、S K4の調査にかかり、S B25、S K4の調査を完了し写真撮影をする。S B2の土器を番号を付して取り上げる。

10月27日雨 作業中止。

10月28日晴 S B26の精査後写真撮影を行い遺構検出作業を全て終了する。午後調査機器を整備撤収する。(有写真測図研究所に遺構実測作業を委託し、本日より作業を実施する。調査地西壁東西方向の土層実測を行う。

10月29日～30日晴 遺構実測を進め
る一方、細部についてレベル標記補足測量を実施する。

10月30日～11月2日 埋戻し及び整地作業を行ない、現地における作業を全て終了する。



I-13 6号住居址の調査



I-14 24号住居址の調査

3 整理・報告書刊行に至る経過

昭和63年5月6日付「松代高等学校体育館建設地区埋蔵文化財発掘の整理調査業務」委託契約書を締結する。

5月6日～6月11日 土器洗浄・注記作業を行う。

5月6日～7月30日 遺構実測図の整図及び遺物復元・実測・拓本取り作業を行う。

7月1日～9月9日 報告書用図面の墨入れ作業、図版作製及び遺物写真撮影を行う。

9月4日～10月1日 原稿執筆作業を行う。

10月27日～31日 他遺跡の遺物に混入していた土器の洗浄・注記・復元作業を行う。

昭和63年1月5日～31日 原稿執筆・報告書割付作業、以後資料の収蔵・整理を行う。

平成元年1月25日 印刷製本を発注する。

2月25日 発掘調査報告書刊行。

4. 調査の体制

長野市教育委員会の直営事業として実施し、組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

総括責任者 長野市埋蔵文化財センター所長 小木曾敏(昭和63年3月31日退任)

" 諏訪部和彦(" 4月1日着任)

庶務係 " 所長補佐 小山 正

職 員 倉田佳世子(昭和63年3月31日退職)

" " 青木厚子(" 4月1日採用)

調査係 " 調査係長 矢口忠良

" 主 事 青木和明

" " 千野 浩

" 職 員 中殿章子

" " 横山かよ子

" 専門主事 小松安和(昭和63年4月1日採用)

" " 中沢克三(")

" " 大室 昂(")

調査員 小岩井久仁(信州大学教育学部卒・昭和62年度)

清水 隆寿(立正大学文学部卒・昭和63年度)

調査作業員 宮尾薰・永井権次・小出清美・飯島なみ子・酒井吉男・酒井しづ子・小林久子・

宮沢袈裟男・堀内泰子・宮入信・松本良子・増沢花子・赤塚八千代・親松恒人・

親松とめ子・富沢八千代・堀内たす子・富沢三男・勝沼武・富沢よし子・永井百

合子・宮入つる於・松本輝子・近藤たかと・宮下孝一

整理作業員 徳成奈於子・岡沢治子

以上、直接発掘調査に参加された方々のほかに、長野県教育委員会文化課小林秀夫・笹沢浩両指導主事、松代高等学校長小池和良・同校教頭河西節郎・同校事務長久保鉄宣各先生をはじめ、学校関係者、北信土建㈱中沢喜久雄・木下茂各氏には発掘調査実施に際し多大なご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。

II 調査地周辺の環境

調査地である長野市松代町は、善光寺平（長野盆地）の東端に位置し、真田10万石の城下町として発展した。古くは『和名抄』に記載の「英多郷」、『吾妻鏡』にみる「英多庄」比定地として考えられてきた。

長野市街地から南東方向を臨むと、南より母袋山（977.5m）・高遠山（1,208m）・保基谷岳（1,529.1m）・奇妙山（1,099.3m）の山系に囲繞されたわずかな空間に標高642m程の截頭円錐形をした独立山地がある。これが松代町を象徴する皆神山である。中世から近世にかけ修験道場と



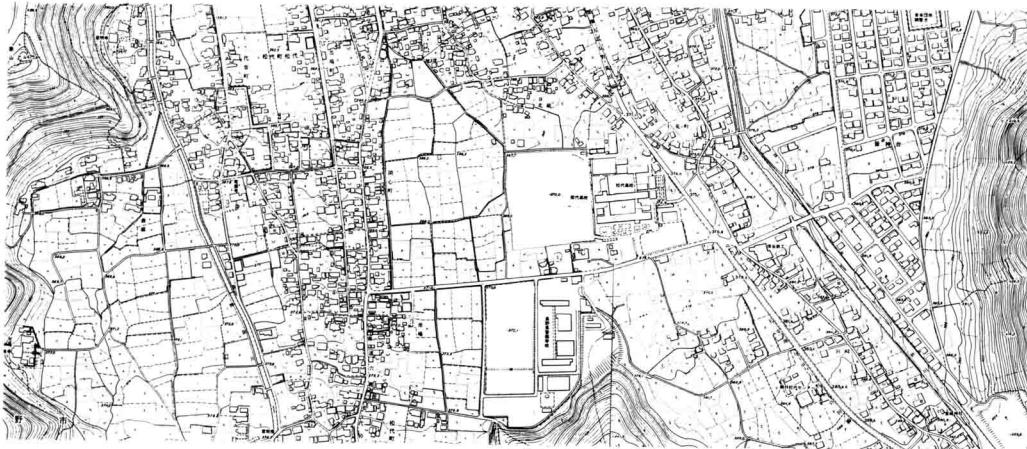
II-1 皆神山周辺の地形（中央上が松代高校、同左長野県警察学校）



II-2 千曲川より皆神山を臨む



II-3 象山より調査地を臨む



II-4 調査地周辺の地形図

しての信仰の山であり、近くでは松代群発地震の震源地として、また某週刊誌で話題を提供したピラミッド伝説もこの山である。

調査地は、この山の西側に位置し、長野市松代町西条字中条にある。この地は母袋山・地蔵峠・保基谷岳山系を水源とした関屋川が開析した崩壊土の崖錐堆積による扇状地上に位置する。その堆積土は小石・砂利を多く含み、調査地周辺では、現在家屋のほかは果樹園・桑園・畑として利用されている。こうしてみると小河川ながら暴れ川としてのイメージが強く浮かぶのであるが、この上流、皆神山南側は、水田となっており調査地近くまで20基からなる虫歌・宮崎古墳群が点在していることから考慮すれば、人々が住み、生活が営なまれるようになってからは比較的安定した河川ではなかったかと推定する。ただ分布調査及び本調査の所見からみると円礫を含む大小の砂利だけの堆積が標高線を縦断する様相が認められ、少なくとも平安時代以降2度にわたる大きな鉄砲水様の洪水があったことをうかがわせる。

このような数次の洪水がもたらしたものか、この扇状地形上における微変化はほとんど見受けられない。それ故に遺跡の範囲、特に関屋川流路に添った上流・下流の区域を限定することは困難であり、今もって確定するに至っていない。そのため本調査開始段階では、「宮崎遺跡」と称していたのであるが、松代高校の地籍が、「松代町大字西条字中条」ということで、「大字豊栄字宮崎」所在の遺跡を区別するため、そして今後の調査対応等を鑑みて下方の「中条遺跡」範囲内として名称を冠した経緯もここにある。

こうした意味を含め、上流の宮崎遺跡とこの中条遺跡は一線を画すことのできない一連の遺跡であり、また関屋川をはさんで東側の屋地遺跡と密接な関係にあるものと見られ、皆神山西麓の遺跡群として把握することも可能である。

調査地の周辺を見てみよう。現在、松代高校の校庭は削平され、標高370mの数値を示すが、



II-5 松代扇状地・沖積面の主要遺跡分布図

これは東半分が削平され、西側は埋立てられた結果である。旧地形は、県道長野真田線より傾斜を有し、西方水田面に至る微高地を形成したものと思われ、250m間に約6mの比高差を有する。このうち主たる遺跡は、関谷川という荒川を背後に負うもののこの微高地西端西斜面に展開するようで、その一番の成因は、調査地前面に展開する湿地帯（水田面）による所が多かったものと考えられる。

次に考古学的環境をみると、皆神山をとりまく遺跡群は、小空間として完結したあり方を示し注目すべき遺跡・遺構が多い。

縄文時代では、山麓・山腹・山頂に立地するものが多くのもの、底地においても磐若寺遺跡の前期、屋地遺跡・中条遺跡の中期、中村遺跡では後晩期の土器片が出土しており、早い段階から生活が営まれている。しかし今のところ住居址等の遺構が発見されていないのにわかには断定できない。

弥生時代の遺跡の展開は、後期（吉田式・箱清水式期）になってから面として広がりを持つようになる。磐若寺遺跡・海津学舎遺跡・屋地遺跡・中条遺跡・中村遺跡・宮崎遺跡等があり、それぞれの遺跡周辺には水稻栽培が可能な湿地を有することを共通としている。昭和51年に発掘調査が実施された屋地遺跡では、11軒の住居址・2基の甕棺墓・土器焼場・集石遺構等が検出されており安定した生活の場であったことをうかがせる。

古墳時代に入ると前代の遺跡面を拡大踏襲し、周辺に多くの古墳が築造される。調査地西方の生産面を背景に、舞鶴山山頂には径33mに及ぶ円墳と長軸36.5mを測る前方後円墳を構築している。前者には5世紀前半、後者には5世紀後葉から6世紀初頭の年代が与えられ、善光寺南縁の古式古墳の内に含まれる。もとより松代扇状地・沖積面では盟主的な古墳である。この古墳に続き、松代町東条の藤沢川が流下する湿地帯を背景に長礼山山頂には径25m級の竪穴式石室を有する1号及び組合式箱形石棺を主体部とする2号の2基の円墳が造られる。更に皆神山北端山頂部には、横穴式石室をもつ径30mの円墳が築かれ、長礼山古墳群同様眼下に松代町東条の水田面を臨む。そして皆神山の東から北東にあたる西傾斜する斜面には、特異な主体部形態である大型の合掌（屋根）形石室構造を有する積石塚が点在する。即ち菅間王塚古墳（径34m）・竹原笹塚古墳（径26m）・桑根井空塚古墳（径17m）がそれである。これらの古墳を盟主とするかのように周辺に数基の小円墳が存在していて、一つの墓域空間を規定している様相を示している。小円墳を除き、他の大形古墳には5世紀末から6世紀前半の年代を与えることができよう。6世紀後半から7世紀代にかけて更に墓域は拡大し、皆神山周縁に群集化する。調査地と最も近く深い関係にあると思われる虫歌・宮崎古墳群（20基）そして東麓群の鎧塚古墳群（7基）・村北古墳群（5基）川西古墳群（9基）そして終末期の沢古墳群（2基）等がある。これらは皆神山をとりまく松代の小空間内にあり、舞鶴山古墳を初源とし、長礼山古墳・小丸山古墳・天王子山古墳等の山頂古墳の構築と前後して朝鮮半島系の墓制と考えられている積石塚で合掌形石室を有する古墳が

出現するものと考えられる。この時点で小空間の分割支配が開始された結果、このような古墳の点在を認め得られるようになったのではないかと思われる。この傾向は更に強まり、小階層へと分化し、小円墳の群集化へとながったことを物語る。また松代町東条に玉依比売命神社が鎮座しており、この神社の社宝は、子持勾玉を中心とする770余顆に及ぶ「児玉石」である。この中の大部分は勾玉類で、周辺の古墳から出土したものであることは想像にかたくない。この大半は前記した古墳に副葬されていたものであろう。

この他該期の遺構として中村遺跡から祭祀址が発見されている。松代西条小学校改築に伴う発掘調査によるもので、4～5mの不整円形を呈する浅い掘り込みに、三時期にわたる祭祀的遺物が投げ込まれていた。水靈信仰あるいは舞鶴山古墳の墓前祭的な祭祀が営まれた遺構と考えられている。

奈良時代の遺跡・遺構は今のところ不明である。

平安時代に入ると遺跡面積は更に拡大している模様で旧来の遺跡より普偏的に採集される。本章冒頭で記した『和名抄』記載の「英多郷」所在の問題である。この郷名を証するにはまだ資料不足はいなめないが、「英多庄」についての傍証資料を得ている。昭和51年に調査した松代町清野地籍の四ッ屋遺跡（清野小学校地点）から「松井」と刻字された10世紀代の須恵器坏の出土があった。それは戸隠神社所蔵の『妙法蓮華経版木』の末書「英多庄松井住藤原正長元享元年（1321）酉三月十八日」と記されていた「松井」は清野地区に比定される可能性が強くなってきたとともに英多庄（郷）は松代扇状地・沖積面に展開した空間とみてまず間違いかろう。またこの時代で特記すべき遺跡として天王山窯址・滝本窯址・池の平窯址・牧内窯址で須恵器生産が行われていたことである。このことは他の周辺空間では認められていないことで、その生産の背景と供給先には興味ある問題をはらんでいる。

こうした縄文時代から平安時代に至る諸々の事象は、原始・古代史を理解する上で格好の地理的・歴史的空间であることを示しているといえよう。

〔参考文献〕

米山一政・森嶋稔「原始・古代」『更級埴科地方誌(二)』昭53

皆神山周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考 (所蔵者)
6	磐若寺遺跡	松代・豊栄・磐若寺	山麓	(弥)箱清水式 (平)土師器、須恵器 (中)内耳土器 (繩)石鎌		
2	皆神山	" 皆神山	山頂	(弥)箱清水式 (平)土師器、須恵器 (繩)石鎌、打石斧		豊栄小学校
大久保	" 大久保	山腹		(弥)太形蛤刃石斧、石槌、扁平片刃石斧		
地藏峠	" 地藏峠	"		(平)土師器、須恵器 (先)尖頭器 (繩)特殊磨石		
滝本新田	" 滝本新田	"		(平)須恵器		
関屋	" 関屋	段丘		(弥)中期土器		
桑根井原	" 桑根井原	台地		(古)土師器 (平)土師器、須恵器		
打穴沢	" 打穴沢	山腹		(弥)箱清水式 (平)土師器、須恵器		
27	牧内窯跡	" 牧内	"	(平)須恵器		
8	大村遺跡	松代・清野・道島	自然堤防	(弥)後期土器 (平)土師器 (中)内耳土器		
宮村	"	"	"	(平)土師器、須恵器、灰釉陶器		
林正寺	"	"	"	(平)土師器 (中)内耳土器		
3	鹿島	" 西条・鹿島	扇状地	(繩)打石斧、凹石、石皿		
21	中村	" 中村		(繩)後・晚期土器 (弥)箱清水式 (古)土師器、石製模造品、刀子 (平)土師器、須恵器 (昭53年発掘)	※1	長野市教委
1	中条	" 東条・中条	山麓	(繩)加曾利E式、磨石斧、石刃 (弥)箱清水式、太形蛤刃石斧 (平)土師器、須恵器		松代小学校
表組	" "	"	"	(弥)箱清水式		
中川	" "	扇状地		(繩)石鎌 (弥)箱清水式		
(5)	山ノ腰	" "	山麓	(弥)箱清水式 (古)土師器 (平)須恵器		
5	屋地	" 屋地	扇状地	(繩)中期土器、石皿、横刃形石器 (弥)堅穴住居11、甕棺墓2、集石遺構 吉田式、箱清水式、打石斧	※2	日本窯業史研究所

				(古)堅穴住居11 土師器、丸玉、石製模造品 (平)堅穴住居8、井戸2、土壙8 土師器、須恵器、灰釉陶器、硯、紡錘車、刀子、鉈、鉄斧、火打ち金具、砥石、羽口 (中)青磁、珠洲焼 (昭51年発掘)		
24	滝本窯跡	"	山	腹	(平)半地下式窯、須恵器、窯	豊栄小学校
23	天王山	"	天王山	山	麓	(平)須恵器、窯
25	池の平	"	滝本	山	腹	(平)須恵器、窯
(19)	宮崎遺跡	"	豊栄・東条	平	地	(繩)磨石
22	松代城北遺跡	松代・松代		自然堤防	(古)土師器	
	象山口	"	清野		"	(平)土師器、須恵器
7	四ツ屋	"	"		"	(繩)晚期土器 (弥)堅穴住居11、溝3 箱清水式、卜骨、銅鋤、紡錘車 (古)円形周溝 円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器 (奈)土師器、須恵器
						(平)堅穴住居21、小堅穴3、掘立柱建物1 土壙、溝 土師器、須恵器、灰釉陶器、布目瓦、刀子 (中)土壙墓3 五輪塔、人骨2 (昭52.54年発掘)
	道島廃寺跡	"	道島	山	麓	(平)布目瓦、須恵器
9	舞鶴山1号古墳	松代・西条・六工	山	山	頂	(古)円(径33.0、高5.5)、堅(長5.2、巾0.7、高0.4)、割石小口積) 珠文鏡1、(伝)滑石製刀子 (昭51発掘)
	舞鶴山2号"					(古)前方後円(長36.5、後円部径20.0、同高5.0、前方部巾20.0、同高4.0)、堅(長5.0、巾0.7、高0.8) (昭51年発掘)
10	長札山1号"	" 東条・長札山	山	腹	(古)円(径20.0、高3.0)、堅	
	長札山2号"	"	"		(古)積円(径25.0、高4.5)、組合式石棺(長1.97巾0.57) 鉄環、鉄鍔、家形埴輪、円筒埴輪 (昭49年発掘)	※ 5 長野市教委
11	天王山1号"	"	天王山	山	頂	(古)円(径18.0)、横(巾1.6)
	" 2号"	"	"		(古)円(径16.0)	
12	竹原笹塚"	" 東条・竹原	山	麓	(古)積円(径26.0、高3.6)、合掌(長6.9、巾1.4、高1.8) (伝)直刀、鉸具、轡、雲珠	※ 6 市史跡

14	菅間1号古墳	"	菅 間	山 麓	(古)積円、堅(長2.14、巾0.63、高0.58) 直刀、鉄鎌、刀子、切子玉、土師器、人骨	※ 7	県史跡
	" 2号 "	"	"	"	(古)積円(径17.5、高4.0)		
	" 3号 "	"	"	"	(古)積円(径24.0、高6.2)		
	" 4号 "	"	"	"	(古)積円(径19.0、高4.3)円筒埴輪		
	13 菅間王塚 "	"	"	"	(古)積円(径34.0、高6.7)、堅、合掌 円筒埴輪 直刀、馬具、須恵器		
16	下岩沢 "	"	下岩沢	"	(古)積円(径25.0、高6.8)	※ 8	県史跡
	熊の沢 "	"	岩沢・熊の沢	"	(古)積円(径5.0、高1.0)、組合石棺		
	瀬 関 "	"	瀬 関	"	(古)円(径4.5、高3.0)		
	寄 塚 "	"	"	"	(古)円		
	桐 塚 "	"	豊栄・桐塚	扇 状 地	(古)円(径20.0、高2.0)		
	牧内1号 "	"	牧 内	"	(古)積円(径12.9、高3.45)、横(長6.6、巾1.75 高2.2) 鉄鎌、勾玉、金環、雲珠		
	" 2号 "	"	"	"	(古)円(径14.3、高4.2)		
	桑根井空塚 "	"	桑根井	"	(古)積円(径17.0、高3.4)、合掌(長6.1、巾1.8 高2.0) 勾玉、管玉、須恵器		
	" 久保 "	"	"	"	(古)円(径16.0、高2.6)		
	前 山 "	"	久 保	"	(古)円(径14.25、高4.3)		
18	鎧塚1号 "	"	鎧 塚	"	(古)円(径14.9、高1.7) 勾玉、管玉	※ 8	県史跡
	" 2号 "	"	"	"	(古)円(径9.4、高2.1)		
	" 3号 "	"	"	"	(古)円(径6.8、高1.8)		
	" 4号 "	"	"	"	(古)円(径11.35、高3.1)		
	" 5号 "	"	"	"	(古)円(径12.9、高2.3)		
	" 6号 "	"	"	"	(古)円(径11.8、高2.5)		
	" 7号 "	"	"	"	(古)円(径14.0、高1.4)		
	村北1号 "	"	平林・村北	"	(古)円(径17.2、高1.1)		
	" 2号 "	"	"	"	(古)円(径7.8、高1.35)		
	" 3号 "	"	"	"	(古)円、堅 勾玉、管玉、小玉、乳文鏡		
19	" 4号 "	"	"	"	(古)円(径13.0、高1.65)	※ 9	県史跡
	" 5号 "	"	"	"	(古)円(径8.5、高2.5)		
	観音塚 "	"	"	"	(古)円(径18.0)、横 鉄鎌、鍔、甲冑、轡、勾玉、 切子玉、丸玉、ガラス製小玉 金環、銀環、辻金具、雲珠、 六鈴鏡		
	村東1号 "	"	村 東	"	(円)円(径13.5、高1.8)		
	" 2号 "	"	"	"	(円)円(径10.2、高1.1)		
20	村西1号 "	"	村 西	"	(円)円(径13.7、高2.1)堅(長2.4、巾1.14、高 0.8)	※ 10	県史跡
	" 3号 "	"	"	"	(円)円(径13.5、高2.1)堅(長2.4、巾1.14、高 0.8)		

	村西2号古墳	松代・平林・村西	扇 状 地	(古)円(径11.0、高1.4)		
	川西1号〃	〃 〃 関屋・川西	〃	(古)円(径12.7、高2.4)		
	〃 2号〃	〃 〃	〃	(古)円(径11.5、高2.0) 直刀		
	〃 3号〃	〃 〃	〃	(古)円(径13.0、高3.1)		
	〃 4号〃	〃 〃	〃	(古)円(径20.0、高4.4)		
	〃 5号〃	〃 〃	〃	(古)円(径9.0、高2.6)		
	〃 6号〃	〃 〃	〃	(古)円(径16.3、高1.8)		
	〃 7号〃	〃 〃	〃	(古)円(径16.4、高2.5)		
	〃 8号〃	〃 〃	〃	(古)円(径12.8、高1.8)		
	〃 9号〃	〃 〃	〃	(古)円(径10.8、高1.7)		
19	虫歌1号〃	〃 虫 歌	〃	(古)円(径6.8、高2.0)		
	〃 2号〃	〃 〃	〃	(古)円(径16.7、高2.7)		
	〃 3号〃	〃 〃	〃	(古)円(径12.0、高2.4)		
	〃 4号〃	〃 〃	〃	(古)円(径7.8、高2.0)		
	宮崎1号〃	〃 宮 崎	〃	(古)円(径20.2、高1.5)		
	〃 2号〃	〃 〃	〃	(古)円(径15.3、高2.0)、 須恵器		
	〃 3号〃	〃 〃	〃	(古)円(径14.4、高1.6)		
	〃 4号〃	〃 〃	〃	(古)円(径13.5、高1.4)		
	〃 5号〃	〃 〃	〃	(古)円(径7.2、高1.2)		
	〃 6号〃	〃 〃	〃	(古)円(径8.0、高1.3)		
	〃 7号〃	〃 〃	〃	(古)円(径23.5、高2.4)		
	〃 8号〃	〃 〃	〃	(古)円(径7.0、高1.2) 土師器、須恵器		
	〃 9号〃	〃 〃	〃	(古)円(径18.4、高1.7)		
	〃 10号〃	〃 〃	〃	(古)円(径13.0、高2.3) 土師器、須恵器		
	〃 11号〃	〃 〃	〃	(古)円(径26.0、高1.25)		
	〃 12号〃	〃 〃	〃	(古)円(径17.0、高1.8)		
	〃 13号〃	〃 〃	〃	(古)円(径20.0、高1.2)		
	〃 14号〃	〃 〃	〃	(古)円(径14.0、高3.0)		
	〃 15号〃	〃 〃	〃	(古)円(径10.0、高1.8)		
	〃 16号〃	〃 〃	〃	(古)円(径11.8、高1.4)		
	南大平1号〃	〃 南大平	〃	(古)円		
	〃 2号〃	〃 〃	〃	(古)円(径7.0、高2.0)		
	〃 3号〃	〃 〃 山 麓	(古)積円(径18.0、高6.2)、横(長7.7、巾2.02、 高5.0)、円筒埴輪			
	上ノ山1号〃	〃 上ノ山	〃	(古)円(径4.0、高1.2) 土師器、須恵器		
	〃 2号〃	〃 〃	〃	(古)円(径6.0、高1.5)		
20	小丸山〃	〃 柳 山	山 頂	(古)円(径30.0、高4.6)、葺石、周溝、堅		
	石 堂〃	〃 石 堂	扇 状 地	(古)円(径27.0、高2.0)		
	霧下り〃	〃 霧下り	山 頂	(古)円(径20.0、高9.0)		

平 沢古墳	松代・豊栄・平沢	山 頂	(古)円(径3.5、高1.1) 土師器、須恵器	
丸塚1号〃	西条・北組	〃	(古)円(径30.0、高3.1)	
〃 2号〃	〃	〃	(古)円(径20.8、高1.75)	
〃 3号〃	〃	〃	(古)円(径36.8、高2.9)	
〃 4号〃	〃	欠 組	(古)円(径14.6、高4.2)	
〃 5号〃	〃	〃	(古)円(径15.0、高2.0)	
〃 6号〃	〃	〃	山 腹 (古)円(径24.0、高2.5)	
母袋山將軍 山〃	母袋山	山 頂	(古)円	

『長野県史考古資料編遺跡地名表』より一部改変

〔主要遺跡文献〕

III 調査

1. 土層序

調査地における土層の堆積は基本的には以下の6層に分層される（I～5）。

- | | | | |
|------|---------------|--|--------|
| I層 | （現地表～-20cm） | グランド整地層1 | （えぐみ層） |
| II層 | （-20～-30cm） | グランド整地層2 | （砂礫層） |
| III層 | （-30～-100cm） | 埋立て層（大小の円礫を含んだ砂混りの粘土層・部分的に黄褐色の
砂礫層を含む。） | |
| IV層 | （-100～-122cm） | 暗黄褐色土層（2cm以下の小礫及び砂粒を多く含む。旧表土と堆定
定される。） | |
| V層 | （-122～-164cm） | 黒褐色土層（5cm以下の小礫及び砂粒を含む。） | |
| VI層 | （-164cm以下） | 黄褐色砂礫層（大小の礫及び荒砂を含む。） | |

I～III層はグランド造成によって形成された土層である。遺物包含層として把握できるのはV層の黒褐色土層で、検出された遺構もすべてこの層より掘り込まれている。

2. 遺構と遺物

調査により繩文時代から平安時代にわたる遺物を得たが遺構と共に確認できたのは以下のとおりである。弥生時代住居址7軒（うち2軒は形態不明）・土塙1基、古墳時代住居址14軒、平安時代住居址3軒、土壙3基・溝址1ヶ所そして近世遺構に暗渠排水遺構がある。

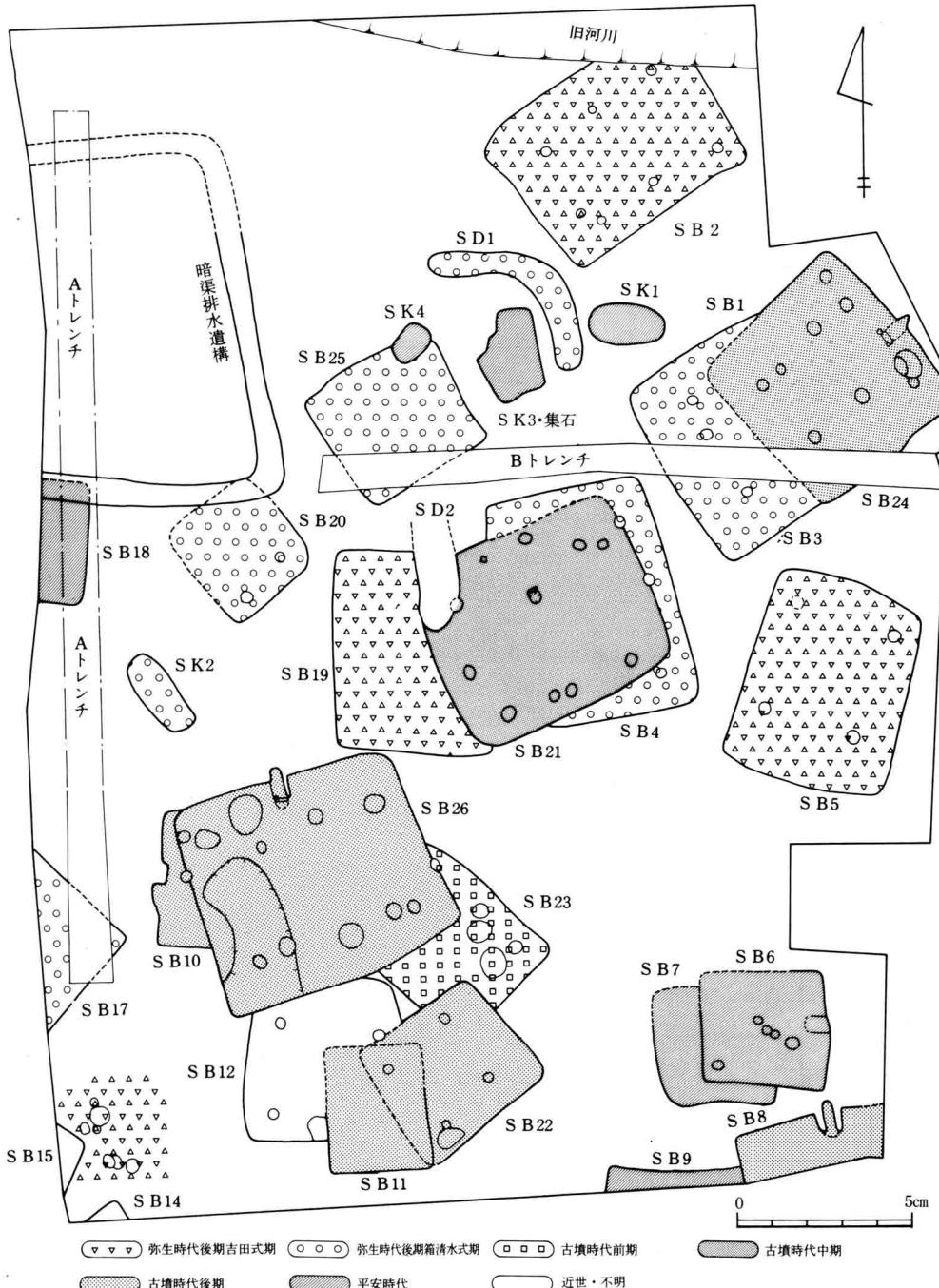
1号住居址

遺構（III-1） 3号住居址・24号住居址の上層より平安期の遺物がかなり集中して出土している。遺構自体は調査時には明確に把握し得なかったが何らかの生活遺構の存在が予想されるため、ここでは仮に1号住居址として扱っておく。

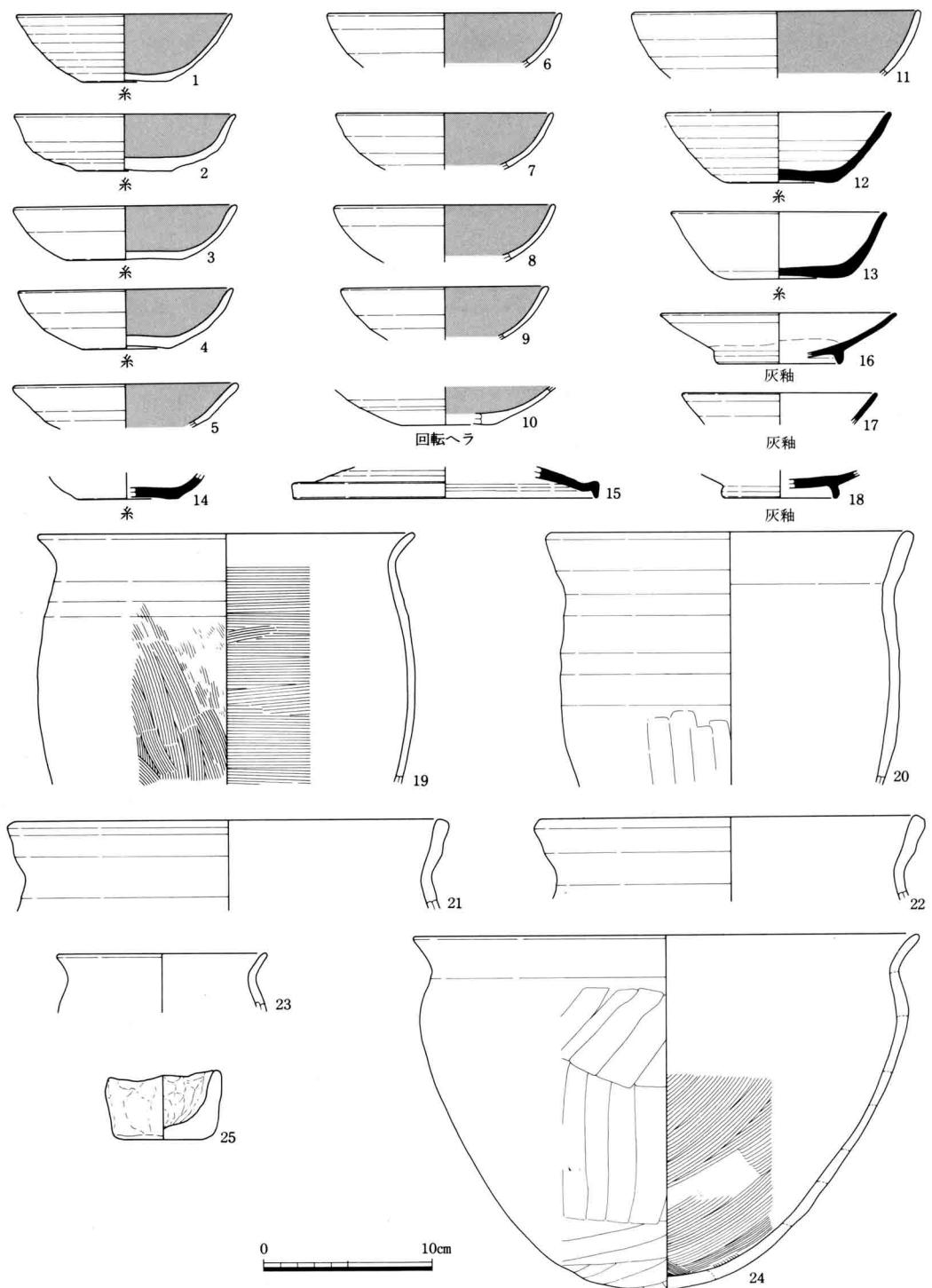
遺物（III-2）

土師器壺（1～11） いずれも内面黒色処理されるもので、底部の切り離しも確認できるものはすべて回転糸切である。

須恵器壺（12～14） (12)は口径13.6cm・底径6.6cm・器高4.3cmで焼成は悪く色調は赤褐色を呈する。(13)は口径13.0cm・底径7.4cm・器高4.0cmで内外面ともいねいなロクロナデによって仕上



III-1 遺構分布図



III-2 1号住居址出土土器実測図

げられる。(12)(13)ともに内外面に火だすきの痕跡を顕著にとどめる。

灰釉陶器 (16~18) (16)は高台付皿、(17)(18)は高台付碗と思われる。(16)は口径14.3cm・底径7.3cm・器高3.0cmで坏部は口縁部にて若干外反する形態を呈する。底面は切り離し後横ナデされ、高台は稜の不明瞭な三ヶ月高台である。釉は漬け掛けである。(17)は口縁部の小破片で口径11.8cm、(18)は底部破片で高台は三ヶ月高台をなし、底部は横ナデ整形される。

甕 (19~23) (19)は口縁部~胴上半にかけての破片で口径22.4cm・胴部最大径22.5cmである。口縁部は短く外反して終り、内外面とも強い横ナデがなされる。胴部外面は斜方向のハケ整形後肩部付近を中心にロクロナデされ、内面は回転を利用したハケ整形がなされる。(20)~(22)はいずれも同じタイプの甕で、口縁部は頸部で緩やかに屈曲して立ち上がり、端部にいくにつれ肥厚する形態をとる。胴中位以下に縦方向のヘラケズリを施した後、口縁部~胴上半にかけて強いロクロナデを行っている。

鉢 (24) 口径30.2cm・器高21.1cmで口縁部は短く外反して終り、底部は丸底をなす。体部外面は全体にヘラケズリによって仕上げられ、内面下半は斜方向のハケ整形がなされる。

手づくね坏 (25) 口径6.8cm・底径5.6cm・器高3.8cm。内外面とも指頭による調整痕を顕著に残すが、外面ならびに底面は部分的にいねいにナデられている。

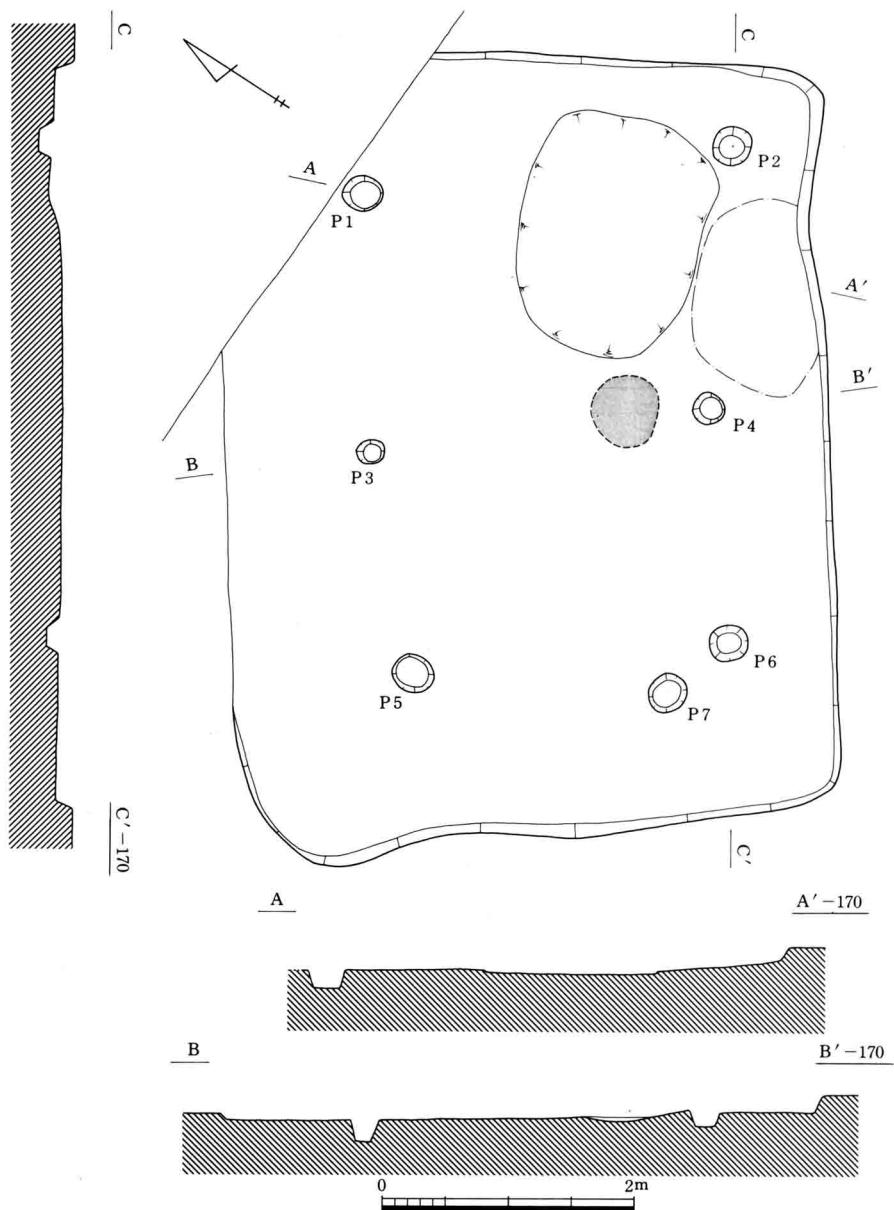
2号住居址

遺構 (III-3・4)

調査区北東隅にて検出された住居址で、北端は調査区外となる。平面プランは $6.20 \times 4.40\text{m}$ ほどのやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸はN-59°-Eにとる。検出面からの掘り込みは12~16cm

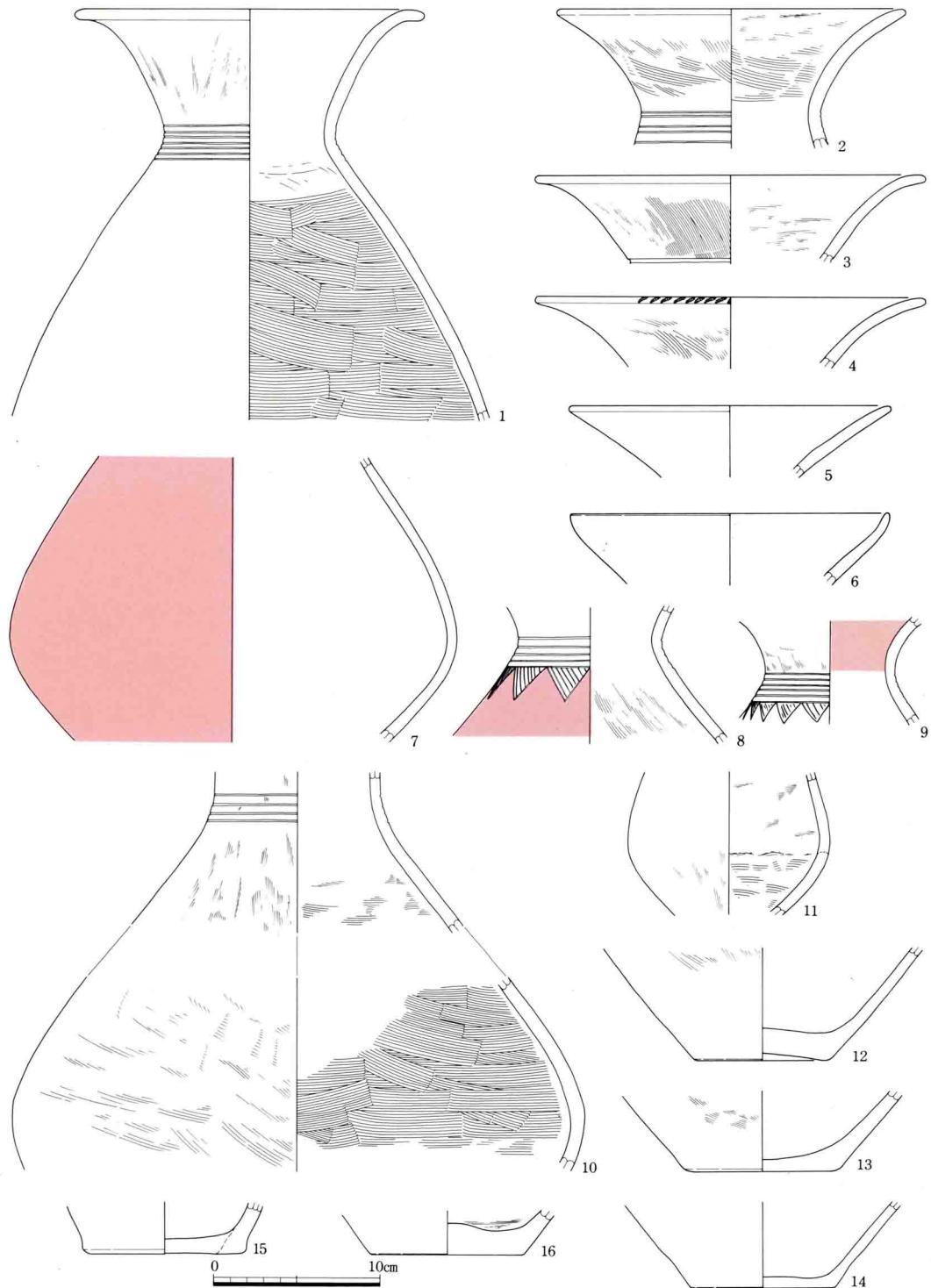


III-3 2号住居址

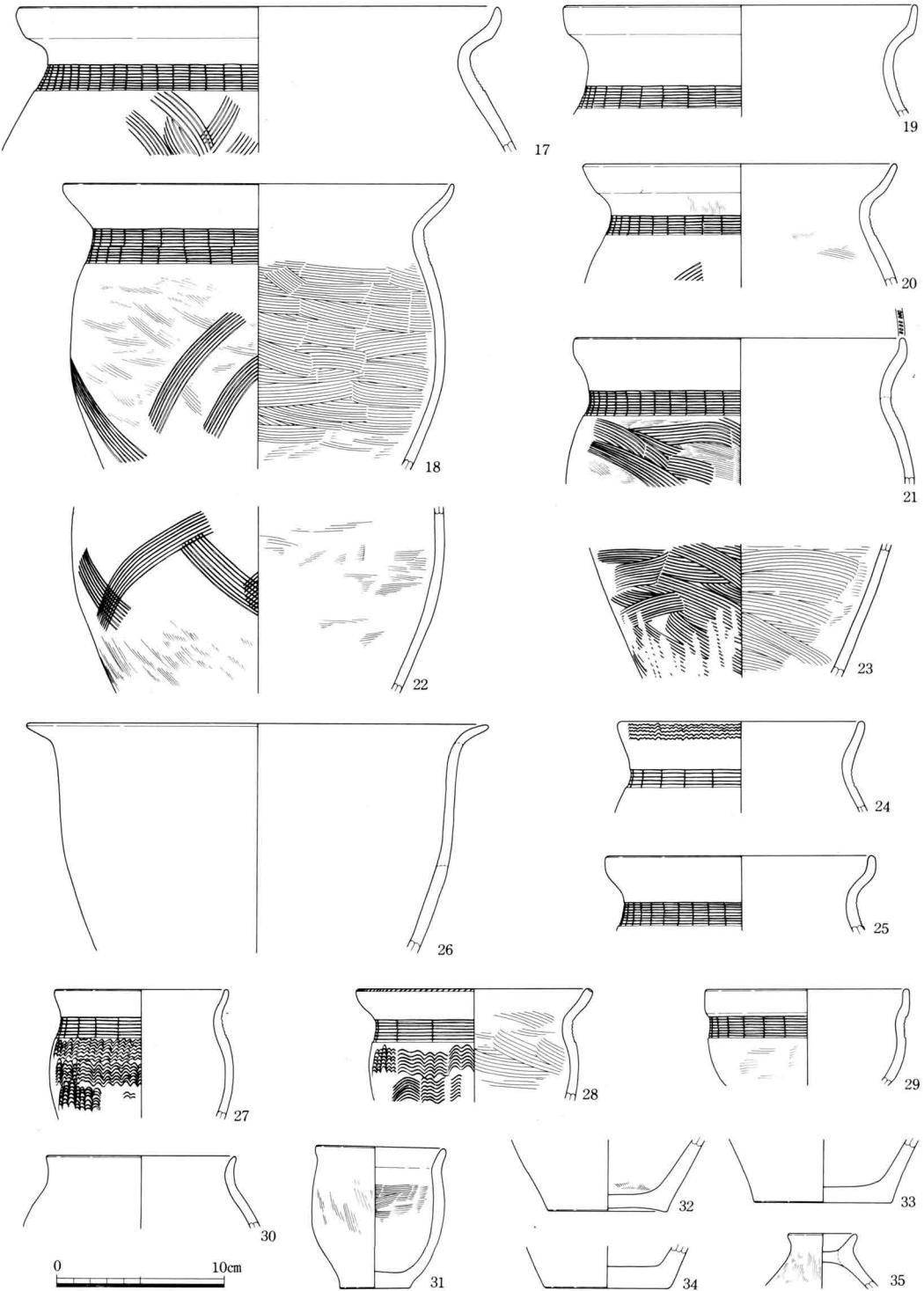


III-4 2号住居址実測図

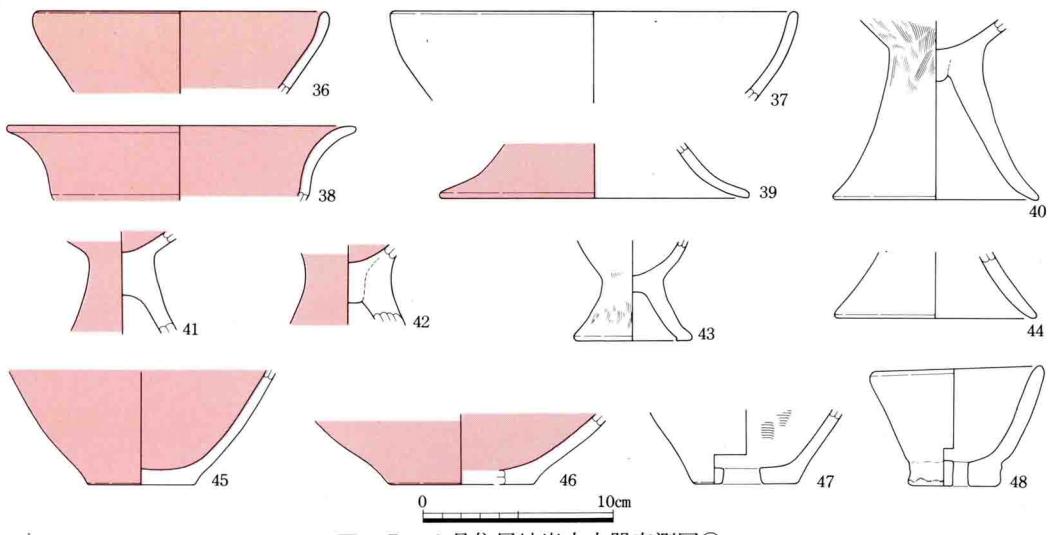
ほどで、特に北西壁は掘り込みも浅く不明瞭である。主柱穴はP1～P6の6本長方形配列をとりP7は支柱と考えられる。柱穴の深さはそれぞれ、P1 14cm・P2 10cm・P3 15cm・P4 13cm・P5 18cm・P6 11cm・P7 5cmである。床面は住居址中央付近にのみ堅緻な貼り床が認められたが、壁際にゆくに従い不明瞭なものとなる。P4の内側に焼土塊と若干の灰層が認められ、複炉的な機能が推定される。P1・P2間の実測図中実線で示した部分は若干の掘り込みが認められ、内部は焼土と炭化物が充満しておりかなりの量の土器破片が底面より若干浮いた状態で出土してい



III-5 2号住居址出土土器実測図①



III - 6 2号住居址出土土器実測図②

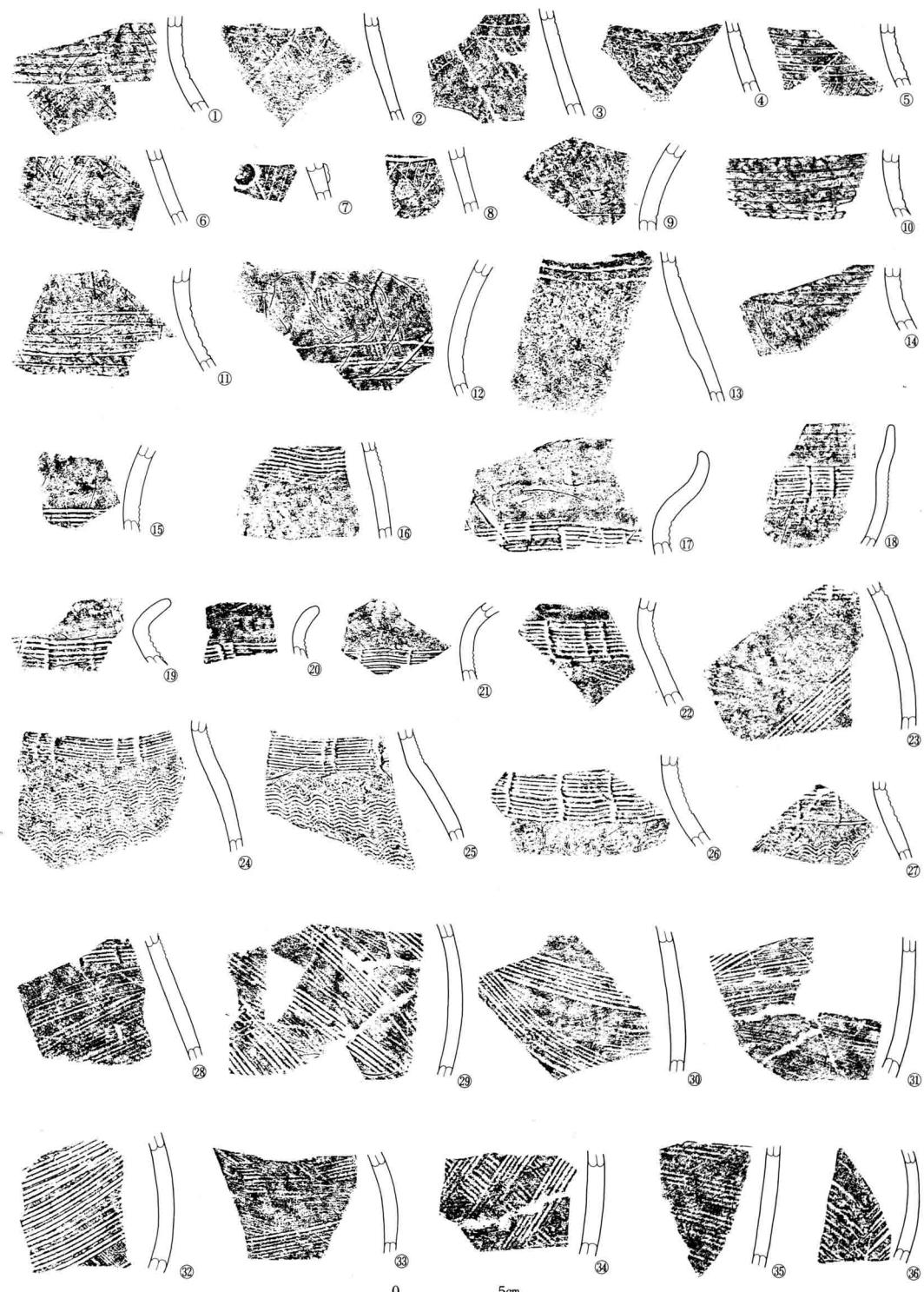


III-7 2号住居址出土土器実測図③

る。またその南側、実測図中破線で示した部分には拳大から人頭大の河原石が集中して検出されているが性格等詳細は不明である。

遺物 (III-5～8)

壺 (1～14) (1)は胴下半を欠くが上半は3/5ほどが残存しており口径21.2cmである。口縁部は頸部より朝顔状に外反し端部はさらに水平に近く屈曲する。頸部には7本の箋描直線文を施し口縁部外面には縦方向のハケ整形後軽いナデ、胴部外面は縦方向の軽いヘラミガキを行っている。内面は口縁部～頸部にかけて軽いヘラミガキを行い、胴部は横方向のハケ整形痕をそのまま残す。(2)は口径21.0cmで2/3ほどが残存する。頸部には箋描直線文が6本まで確認でき、口縁部外面は斜めから横方向のハケ整形後軽く横ナデされ、内面は横ハケ後軽くヘラミガキされる。(3)～(6)はいずれも口縁部1/3ほどの破片である。(3)は(2)と文様・整形とも同じと思われ、(4)は口唇部にL Rの繩文が施文される。(7)は胴部破片で無花果形の胴部形態が予想され、外面はヘラミガキ後赤彩され内面はハケ整形後横ナデされる。(8)(9)は頸部付近の破片でともに頸部には箋描直線文と鋸歯文が施文される。(8)は5本の直線文の下に鋸歯文が施文され胴上半のみが赤彩されており、(9)は6本の直線文の下に比較的小さく雑な鋸歯文が施文され、口縁部内面のみが赤彩されているようである。(10)は頸部から胴中位にかけての破片で、細頸ではあるが胴部がかなり張る器形が予想される。頸部には4本の箋描直線文を施文している。胴部外面は縦から斜方向のハケ整形後雑なヘラミガキを施し、胴部内面は横ハケ整形している。また頸部内面には指頭による調整痕を比較的顕著に残している。(11)は小型品の胴部破片と思われるが胴部の張りはさほど強くない。内面には接合痕を顕著に残すが、接合痕の上下ではハケ整形の原体が異っている。外面はハケ整形後ヘラミガキされる。(12)～(16)はいずれも壺底部破片である。



III - 8 2号住居址出土土器拓影

甕 (17~34) (17)~(23)はやや大型から中型の甕で口縁部形態の確認できる(17)~(21)はいずれも受け口状口縁を呈する。(17)(19)(20)は受け口部が外面に比較的明確な稜をなして立ち上がる形態をとるものである。口縁部外面はいずれも強く横ナデされるのみで、頸部には右回りの等間隔止め簾状文を施文し、胴部には縦位の櫛描羽状文が施文されるものと思われる。(18)は口径23.4cm・胴部最大径22.4cmで口縁部は端部にて内湾ぎみに立ち上がる形態を呈する。口縁部は強い横ナデを施した後内面にのみ軽いヘラミガキがなされ、胴部内面も横から斜方向のハケ整形後軽いヘラミガキがなされる。文様は頸部に右回り等間隔止めの簾状文を2帯上から下の順序に施文し、胴部は縦位の櫛描羽状文を施文する。(21)は口径20.2cmで整形・文様等は(18)と同様であるが、口唇部にはヘラ状工具先端による刻みを施し、また胴部の櫛描羽状文はかなり乱れたものである。(22)(23)は胴下半の破片とともに縦位の櫛描羽状文が施文されるが、(23)は施文以前に櫛によって条痕的に斜方向の整形を行っている。(26)は深鉢型を呈し、口縁部は短く外反して終り胴部は張ることなく直線的に底部へ収約する器形が予想される。口径16cm。口縁部は強く横ナデされ、胴部は内外面とも軽いヘラミガキによって仕上げられる。(24)~(29)は小型の甕である。(24)が口縁部に一帯の波状文をもつが他の口縁部は強く横ナデされるのみで無文である。頸部には等間隔止め簾状文を施文し、胴部には波状文が施文される。(29)は小型の台付甕の可能性が高い。(30)(31)は小型品であるがともに無文で(31)は内外面に難なハケ整形を施した後ナデ整形される。(32)(34)は甕底部、(35)は蓋のつまみ部である。

高坏 (36~44) (36)~(38)は坏部破片で、塊形を呈する(36)(37)と坏部中位に稜をなして口縁部が外反する形態の(38)がある。いずれも内外面ともていねいなヘラミガキで仕上げられるが(37)は赤彩されない。(39)~(44)は脚部である。

鉢 (45・46) ともに内外面とも比較的ていねいなヘラミガキがなされ赤彩される。

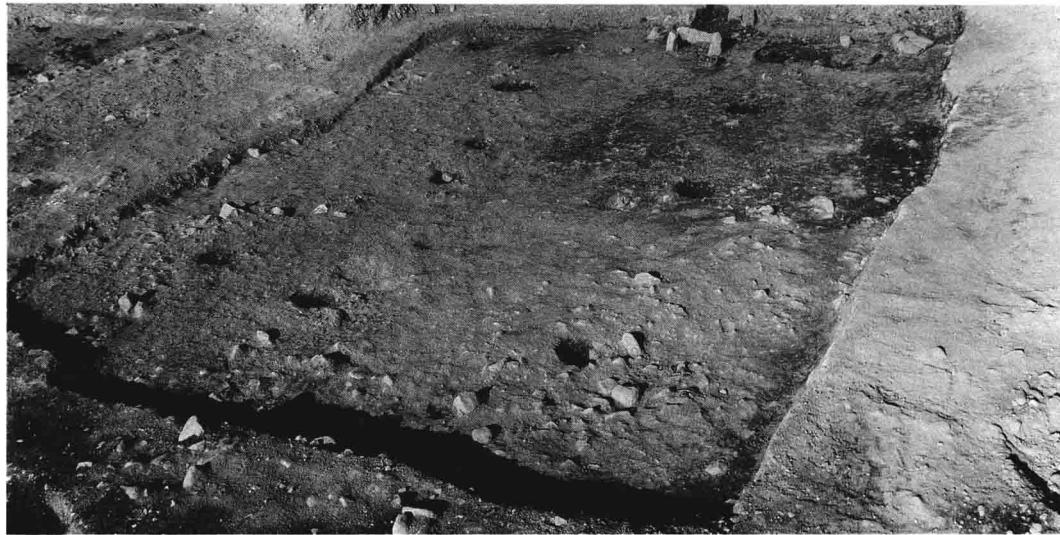
甑 (47・48) ともに底部に焼成前穿孔を一孔有するものである。(48)は小型品で口径9.2cm・底径4.8cm・器高6.2cmで外面は比較的ていねいにナデ整形される。

これらの住居址・遺物は弥生時代後期吉田式の所産である。

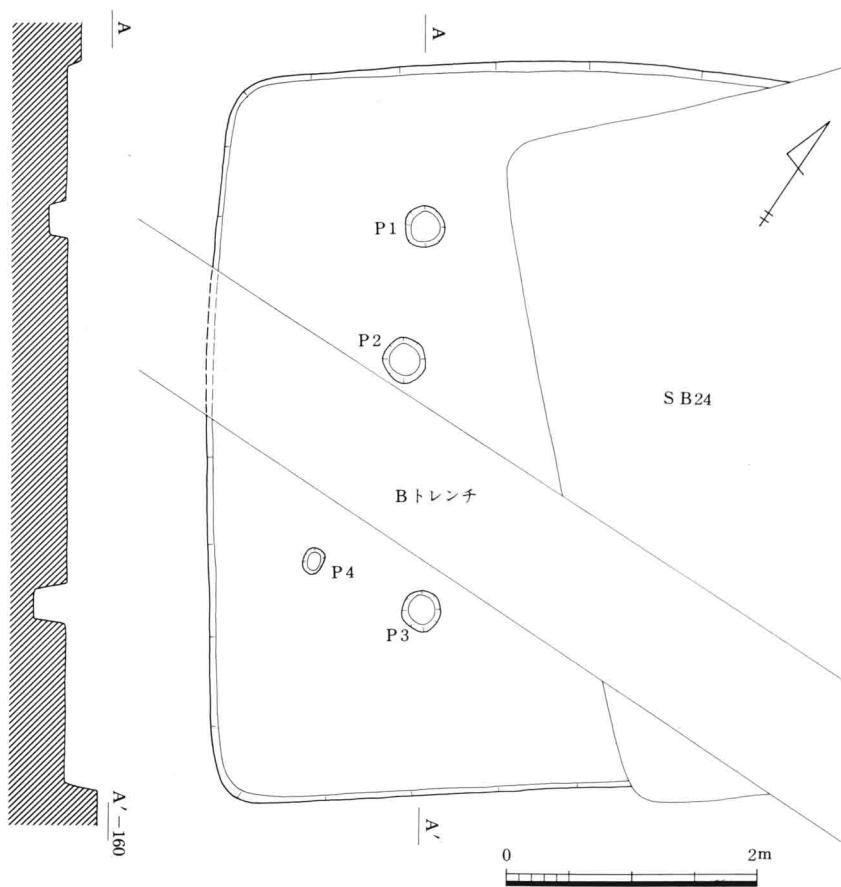
3号住居址

遺構 (III-9・10)

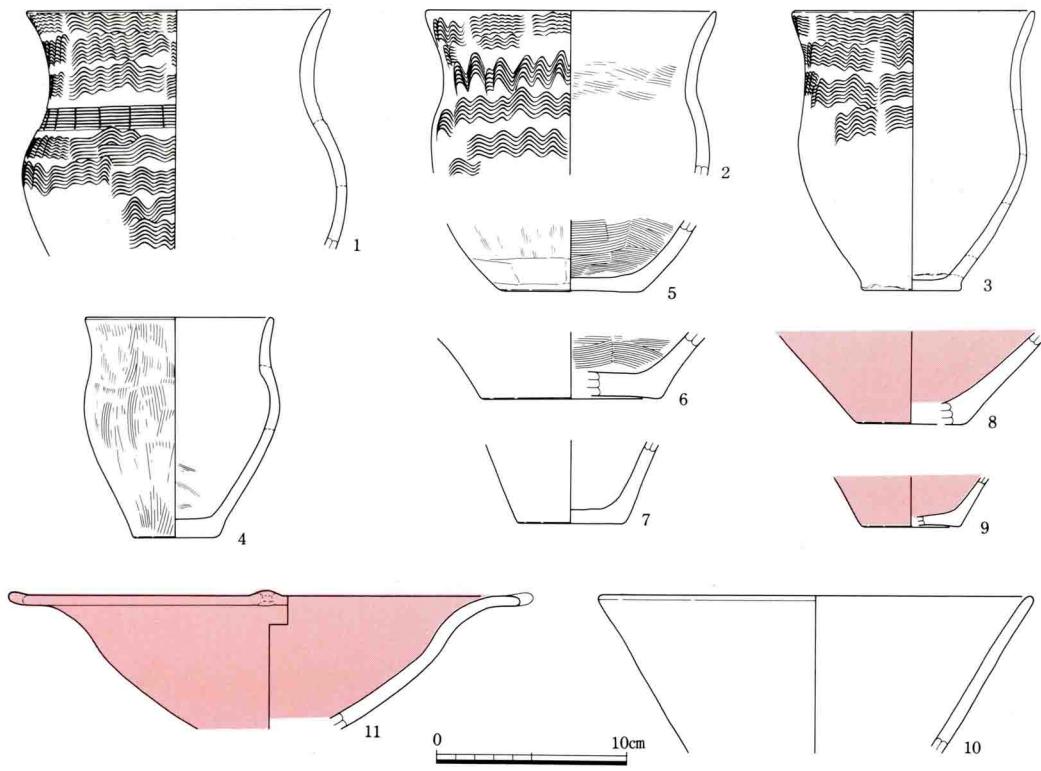
平面プランは長軸約5.80mほどの隅丸長方形を呈すると思われるが、1/3以上が24号住居址に切られまた一部試掘坑による攪乱を受けているため詳細は不明である。主軸はN-31°-Wにとる。壁高は北壁12cm・南壁25cm・西壁27cmであり、北側の掘り込みはやや浅い。主柱穴にはP1~P3が該当すると思われ、6本長方形配列が予想される。柱穴の深さはそれぞれP1 14cm・P2 13cm P3 25cm・P4 7cmである。床面は全体に軟弱で不明瞭であり、炉・貼り床等の施設は検出されていない。



III-9 3号・24号住居址



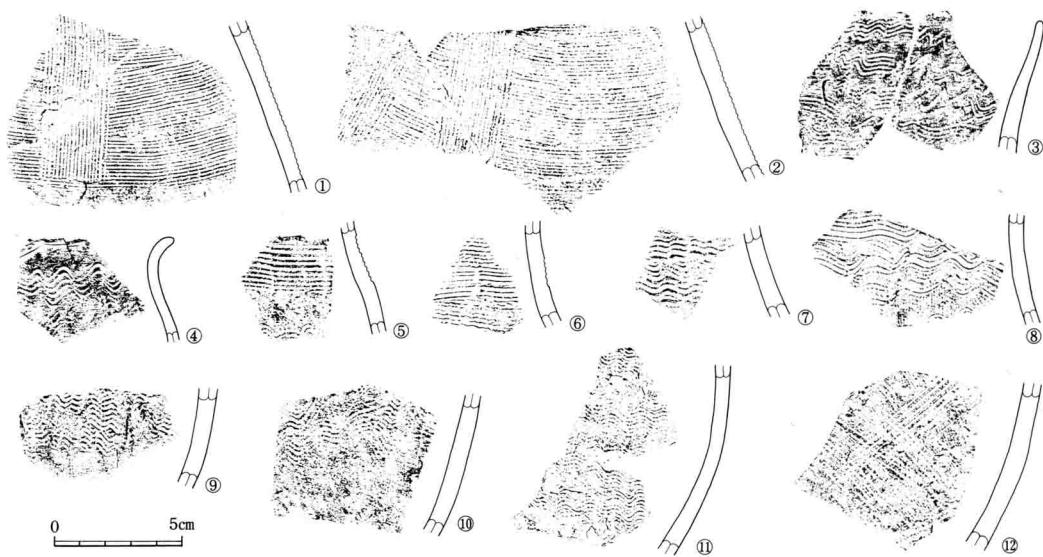
III-10 3号住居址実測図



III-11 3号住居址出土土器実測図

遺物 (III-11・12)

甕 (1～4・7) (1)は口径16.2cm・胴部最大径17.3cmで最大径を胴部に有する。口縁部は頸部より緩やかに直立ぎみに外反し、端部は尖り気味に終る。外面は全体にハケ整形後施文され、文様は頸部に等間隔止めの簾状文を施文した後口縁部と胴部に波状文を施文する。口縁部は3帯の波状文が下から上の順序に施文され、胴部は4帯の波状文が上から下の順序に施文される。また胴下半は文様施文後縦方向のヘラミガキがなされ、内面は全体に横方向のヘラミガキ整形される。(2)は1/4ほどの破片で復原口径15.4cm・胴部最大径14.8cmと口縁部に最大径を有する。文様は頸部簾状文を欠き全体に波状文が施文されるが、最初頸部に一帯施文した後に口縁部と胴部に波状文を施文しているようである。内面は軽いヘラミガキで仕上げられるが、頸部には斜方向のハケ整形痕をとどめている。(3)はやや小型の甕で口径12.8cm・胴部最大径12.1cm・底径5.3cm・器高14.8cmである。頸部でさほどくびれることなく、口縁部は直立ぎみに外反する。外面胴上半から口縁部に4帯の波状文を上から下の順序に施文しており、頸部簾状文を欠く。胴下半は施文後縦方向のていねいなヘラミガキがなされ、底面も軽いミガキで仕上げられる。内面は全体に横ヘラミガキされる。(4)は小型品で口径10.0cm・底径4.4cm・器高11.6cmである。口縁部は頸部内面に緩い稜を形成して短く外反する。外面は全体に縦方向のハケ整形後軽くヘラミガキされ、内面はハケ整形後ナデ整形される。



III-12 3号住居址出土土器拓影

壺（5・6）ともに底部破片で(5)は底径7.5cm、底部側面に一帯のヘラケズリがなされる。(6)は底径9.6cmで外面は底面にいたるまでていねいなヘラミガキがなされ、内面はハケ整形される。

鉢（8～10）(8)(9)はともに底部付近の破片で内外面ともヘラミガキ整形され、赤彩される。(10)はやや大型品で口径23.0cmをはかり、体部は直線的に外開する形態をとる。外面は軽い縦方向の、内面はていねいな横方向のヘラミガキがなされる。

高环(11) 坏部1/4ほどの破片で復原口径27.9cmである。口縁部は坏部中位で緩やかに屈曲して立ち上がったのち、端部付近にて強く外反する形態をとり、内外面ともヘラミガキ整形され赤彩される。また口唇部には山形突起が付される。

出土土器の様相より弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

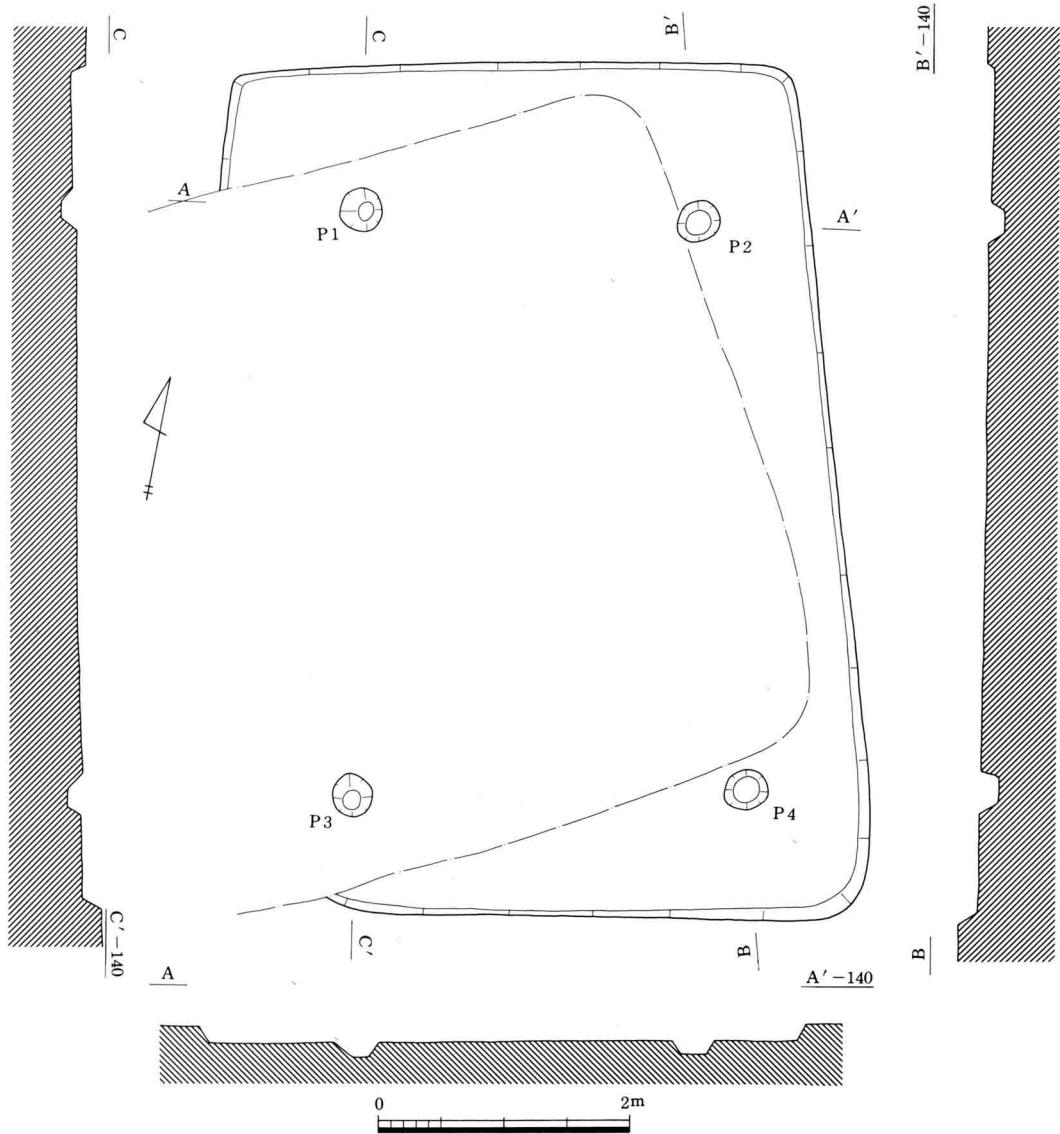
4号住居址

遺構（III-13・15・54）

調査区中央付近にて検出された住居址で大半が21号住居址に切られている。平面プランは6.80×4.70mほどのやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸はN-10°-Wにとる。壁高は北壁6cm・南壁16cm・東壁12cmで、北側にいくにつれ浅くなる。主柱穴はP1～P4の4本長方形配列で、深さはそれぞれP1 16cm・P2 14cm・P3 8cm・P4 16cmである。床面は全体に軟弱で不明瞭であり、炉等の施設も検出されていない。

遺物（III-14）

拓影にて示した小破片のみで実測可能な遺物は出土していない。出土土器よりすれば弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。



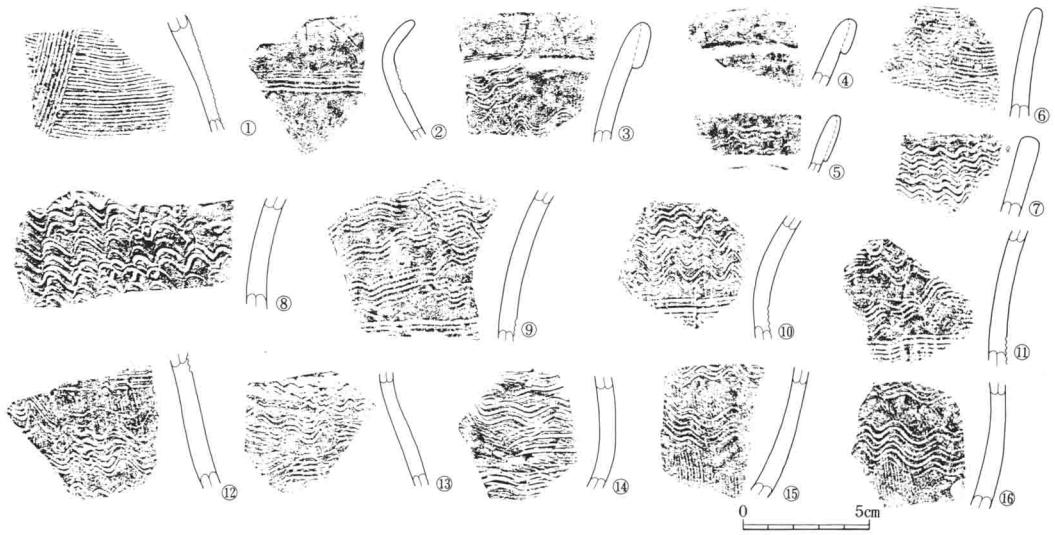
III-13 4号住居址実測図

5号住居址

遺構 (III-16・17)

平面プランは $6.20 \times 4.60\text{m}$ ほどのやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸はN-19°-Eにとる。

壁高は北壁6cm・南壁10cm・東壁18cm・西壁12cmであり、北壁と南壁はやや不明瞭なものとなる。主柱穴はP1～P3が検出されているが、4本長方形配列が予想される。柱穴の深さはそれぞれP1 13cm・P2 17cm・P3 17cmである。床面はP1・P2間中央付近に比較的堅緻な貼り床が認められ、この部分からは床面に接した状態で土器片が出土しているが、他の部分では不明瞭なもの



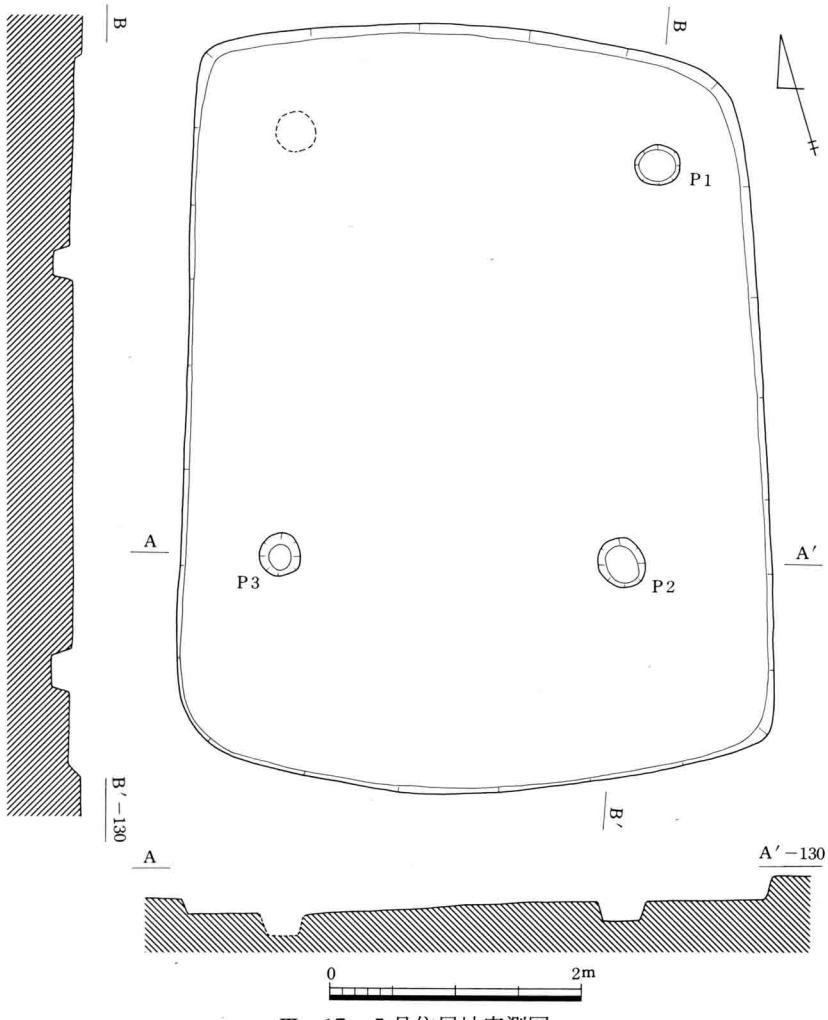
III-14 4号住居址出土土器拓影



III-15 4号住居址



III-16 5号住居址

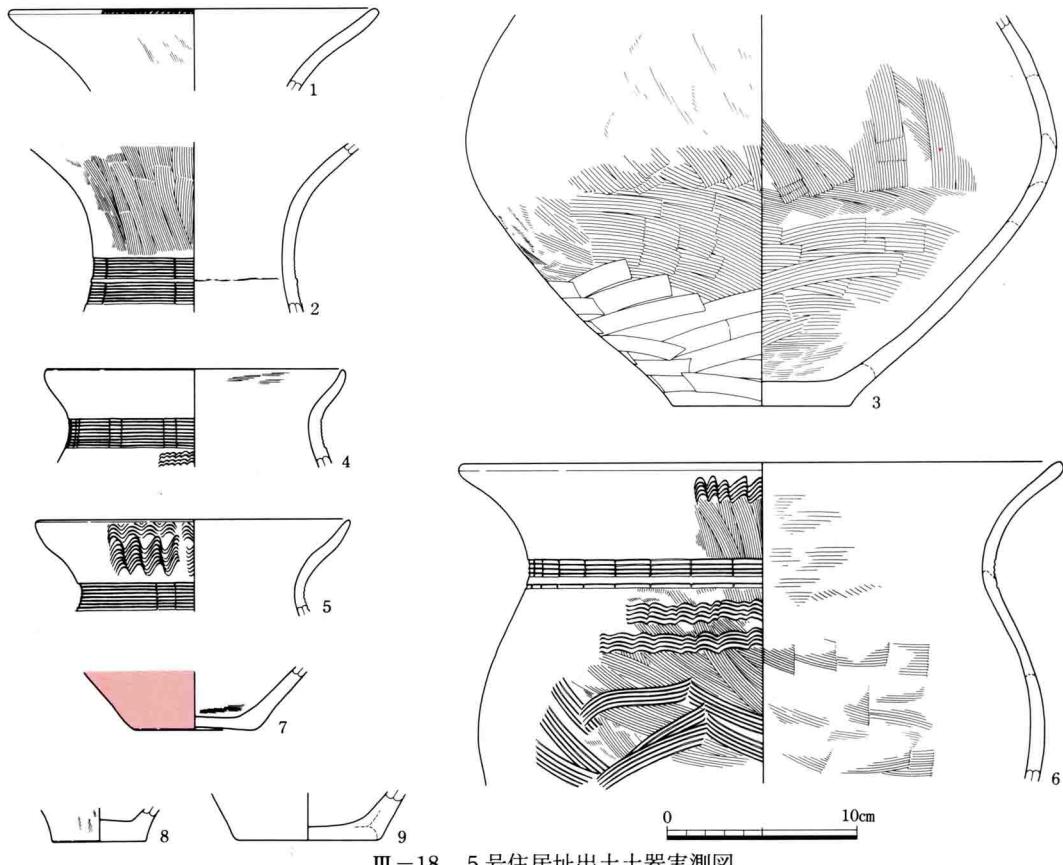


III-17 5号住居址実測図

となる。炉等の施設は検出されていない。

遺物 (III-18・19)

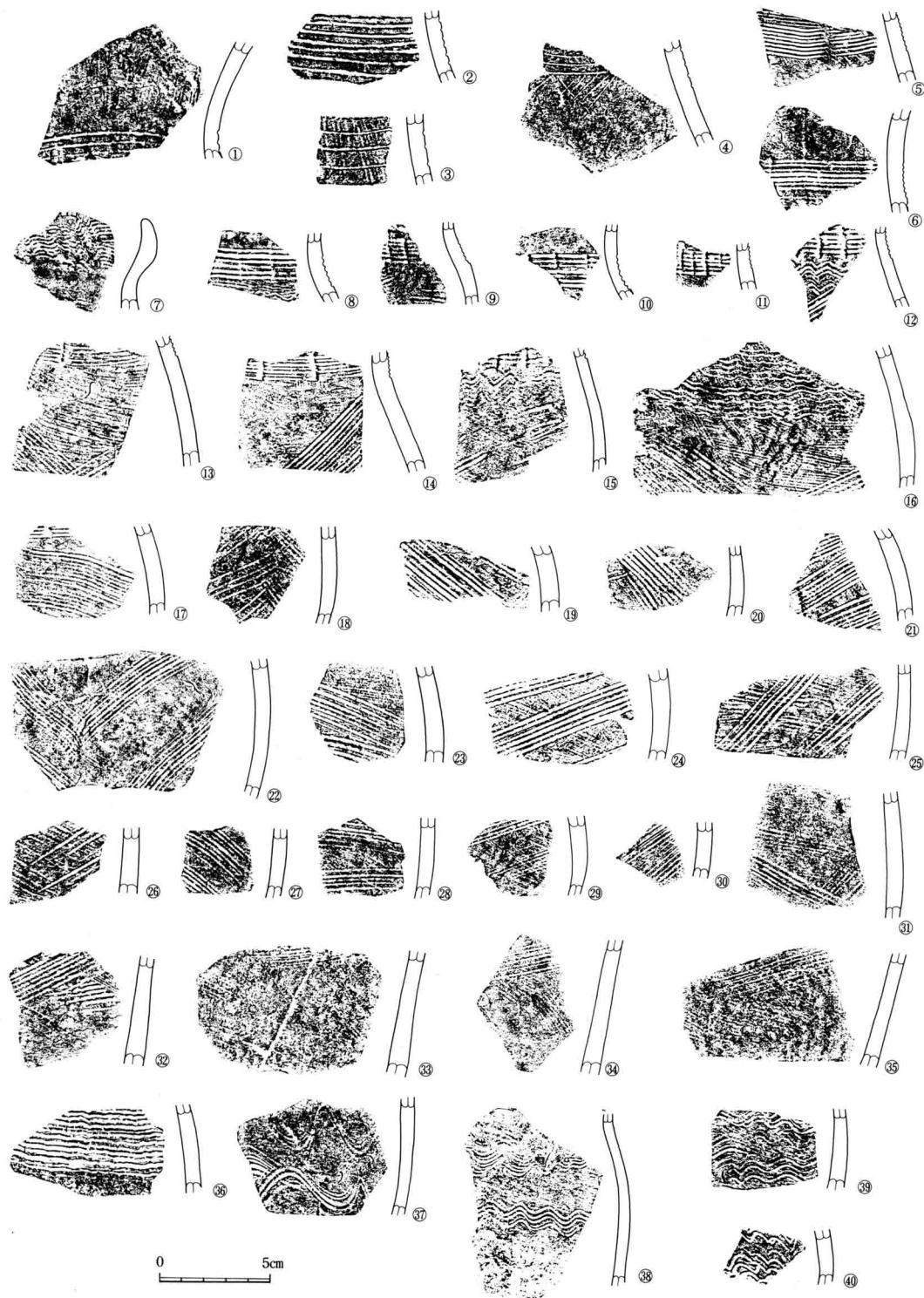
壺 (1~3・7) (1)は口縁部1/6ほどの小破片で復原口径19.6cmである。口縁部は朝顔状に外反した後に、端部にて若干内湾ぎみに立ち上がる形態をとる。内外面ともハケ整形後軽い横ヘラミガキがなされるが赤彩はされない。口唇部には面取り後L Rの繩文が施文される。(2)は口縁部下半から頸部にかけての破片である。頸部には等間隔止めの櫛描簾状文を2帯施文しており、櫛原体は7本/1.1cmである。口縁部外面は縦方向のハケ整形後軽いナデを施すが、ハケ整形痕を顕著にとどめている。内面はハケ整形後横ヘラミガキがなされるが内外面とも赤彩はされない。(3)は胴上位以上を欠損するが底径9.4cm・胴部最大径31.4cmである。胴部は下半で強く張り無花果状の形態をとるものと予想される。外面胴上半はハケ整形後軽いヘラミガキがなされ、胴下半



III-18 5号住居址出土土器実測図

はハケ整形後横から斜方向のヘラ削りがなされ、さらに部分的に縦方向の軽いヘラミガキがなされる。内面は胴下半は横方向、胴上半は縦方向のハケ整形がなされるが、上半と下半ではハケ原体が異なる。また底部は雑なナデ整形で仕上げられる。(7)は鉢とも考えられるが、内面にヘラミガキ、赤彩が認められぬことより壺底部と考える。

甕 (4~6・8・9) (4)(5)はともに口縁部1/6ほどの小破片で、(4)は口径15.8cmである。口縁部は受け口状に立ち上がり端部は丸く終る。頸部には2連止めの櫛描簾状文を施文し胴部にも一帯波状文が認められるが、口縁部は強く横ナデされるのみで無文である。内面はハケ整形後横ヘラミガキされる。(5)は口径16.4cmで(4)同様受け口状の口縁部形態を呈する。頸部に2連止めの櫛描簾状文を、口縁部には波状文を2帶上から下の順序に施文している。(6)はやや大型の甕で復原口径32.2cm・胴部最大径30.0cmと口縁部に最大径をもつ。口縁部は頸部からゆるやかなくの字状をなして外反し、胴部はさほど張らぬものと思われる。外面は斜方向のハケ整形後施文される。頸部には等間隔止め簾状文、胴上半には波状文2帯、さらにその下に縦位の羽状文を施文し、口縁部にも一帯の波状文が施文される。内面は全体に横方向のハケ整形後軽く雑なヘラミガキがな



III-19 5号住居址出土土器拓影

されるが、口縁部と胴部のハケ整形原体は異なる。(8)(9)はともに甕底部破片である。

出土土器の様相よりすれば本住居址は弥生時代後期前半吉田式期の所産ととらえられる。

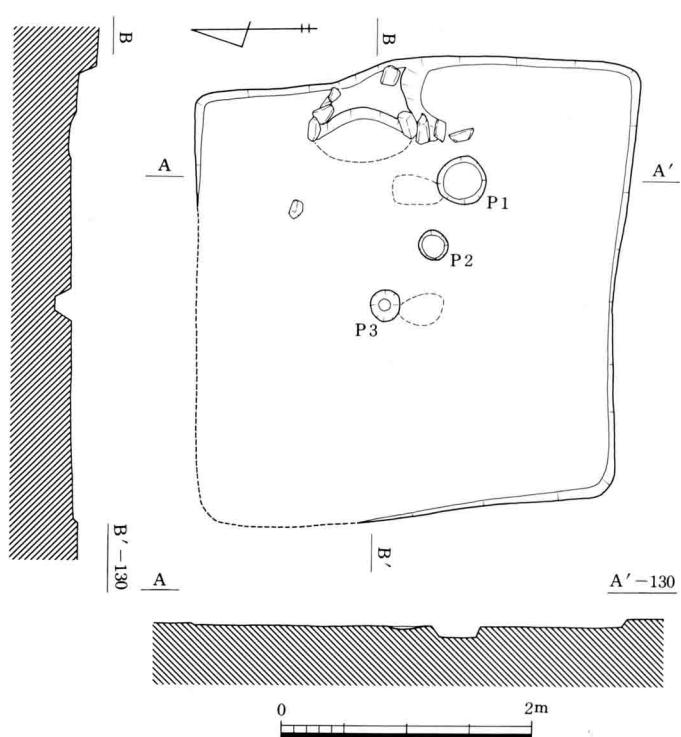
6号住居址

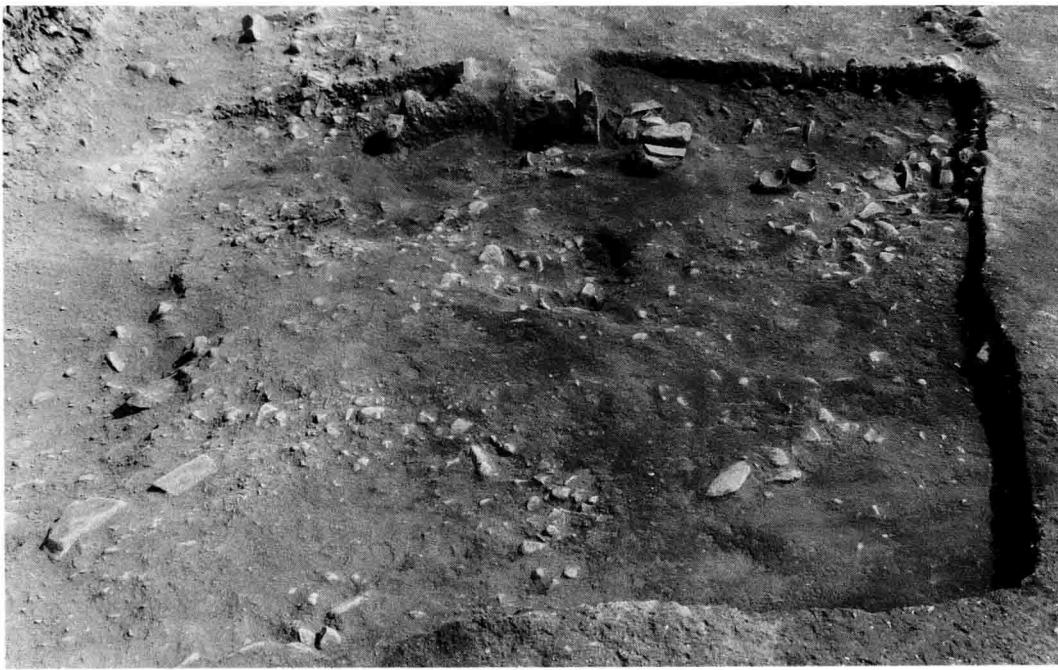
遺構（III-20～22）

7号住居址を切って構築されており、平面プランは $3.70 \times 3.50\text{m}$ ほどのやや不整な隅丸方形を呈し、主軸はほぼ東西方向にとる。壁高は東壁18cm・西壁4cm・南壁7cm・北壁2～3cmと浅く北西隅付近は明確には検出しえなかつた。カマドは東壁中央やや北寄りに位置するが、袖部の芯として用いられたと思われる角礫と、構築材としての粘土が確認されたのみでほとんど原形を保っていない。柱穴はP1～P3が検出されたが、位置も変則的であり、主柱穴配置等の詳細は不明である。柱穴の深さはP1 9cm・P2 23cm・P3 13cmである。床面は、住居址中央付近にのみ若干の貼り床が認められた他はきわめて不明瞭なものであった。またカマドの燃焼部ならびに実測図中破線で示した部分からは、焼土塊が検出されている。

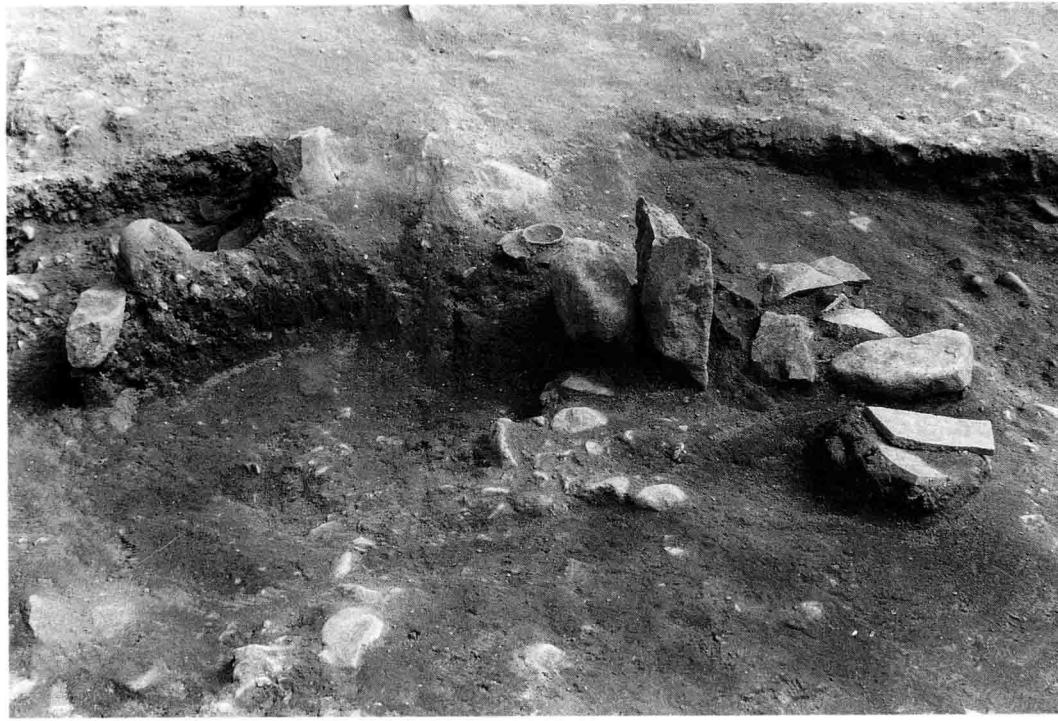
遺物（III-23・24）

壺（1～24） ほぼ全形をうかがえる資料は(1)～(4)のみで、他は口縁部破片である。(1)は口径12.4cm・底径5.0cm・器高4.0cmで底部はやや突出する。内外面ともロクロナデされ底部は回転糸切り痕をそのまま残す。(2)は口径12.4cm・底径3.3cm・器高5.2cm、(3)は口径11.8cm・底径5.0cm・器高3.8cm、(4)は口径11.9cm・底径6.0cm・器高3.3cmで底部はいずれも回転糸切りであるが、(4)は切り離し後ハケによる調整が加えられている。(19)～(24)はいずれも内面に黒色処理がなされるものである。特に(23)は内面にやや雑な放射状の暗文が施されている。

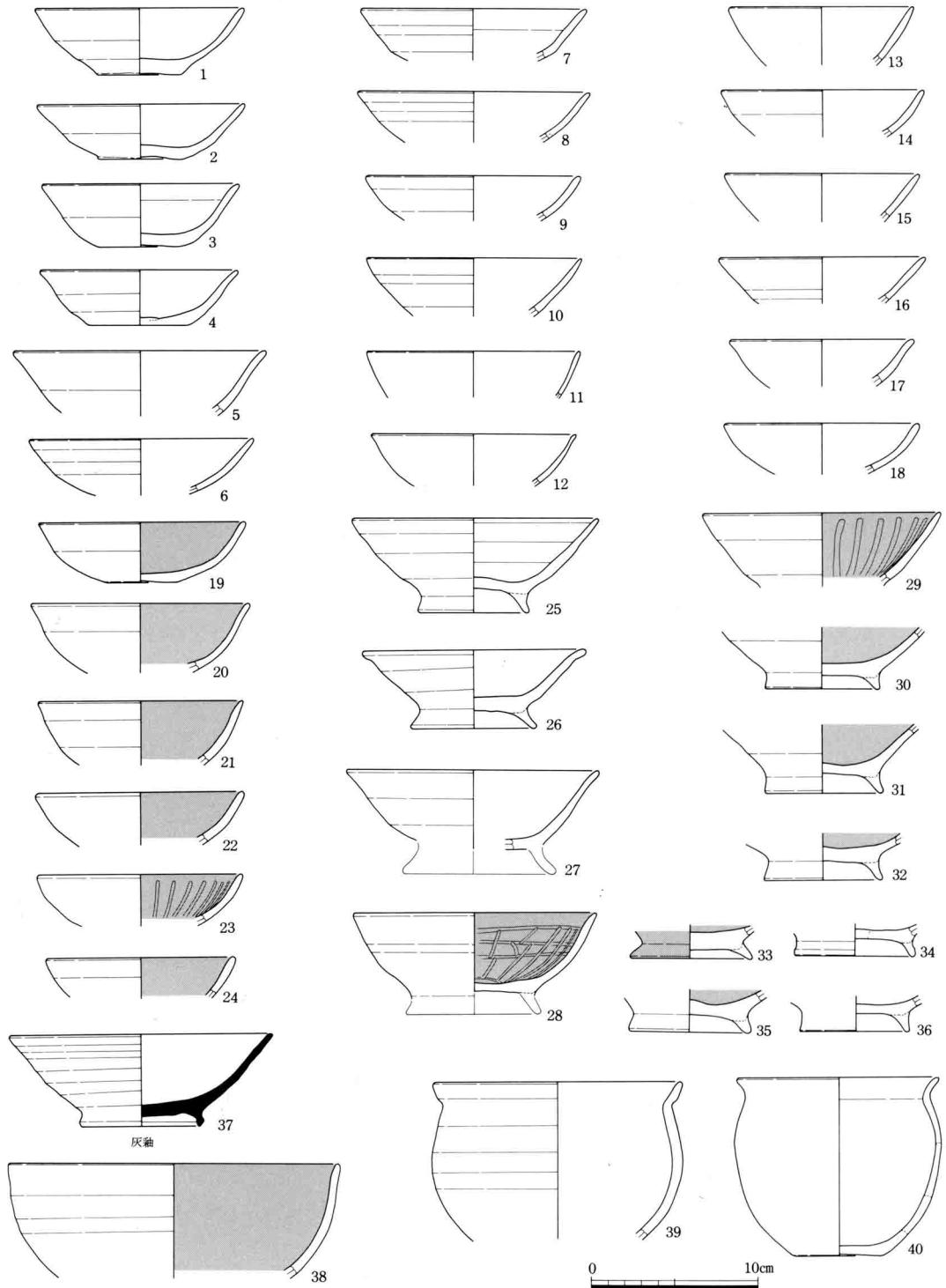




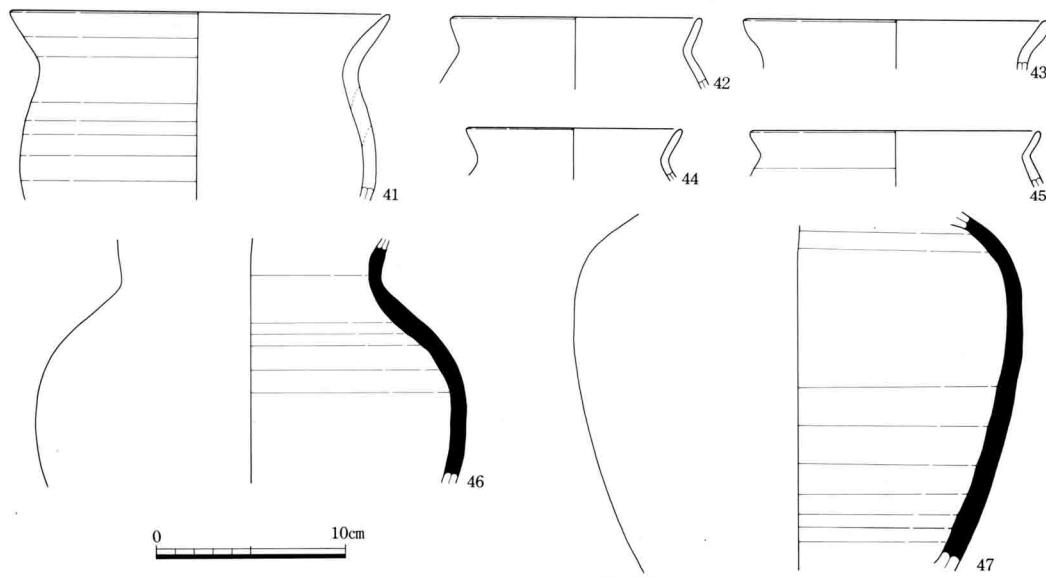
III-21 6号住居址



III-22 6号住居址カマド



III-23 6号住居址出土土器実測図①



III-24 6号住居址出土土器実測図②

高台付壺 (25~36) (25)は口径14.8cm・底径6.6cm・器高5.6cmである。内面には軽く雑なヘラミガキがなされ底部には回転糸切り痕をとどめる。(26)は口径13.4cm・底径7.4cm・器高4.7cmで、壺部は口縁端部にて若干外反し肥厚する。内外面ともロクロナデによって整形される。(27)は高台部を欠損するが口径15.0cmで底面は切り離し後いねいにナデ整形される。(28)~(33)(35)は内面黒色処理されるものである。(28)は高台部を欠損するが口径14.4cmである。壺部内面には横方向に3本の暗文を施しさらにその上に雑な放射状暗文を施している。また底面には回転糸切り痕をとどめている。

灰釉陶器(37) 高台付壺で口径15.8cm・底径7.2cm・器高5.5cmである。外面高台接合部には一帯の強い横ナデが行われ、高台は三ヶ月高台で明確な稜を有する。また底面は切り離し後回転ヘラケズリがなされる。内面見こみ部には雑な指ナデがなされ、釉は漬け掛けである。

壺(38) 口径20.0cmとやや大型で、口縁部付近は直に近く立ち上がる。外面口縁部と内面は比較的ていねいにヘラミガキされ、内面は黒色処理される。

甕(39~45) (39)は口径14.8cmで口縁部は受け口状に内湾して立ち上がる。(40)は口径12.0cm・底径5.6cm・器高10.7cmで口縁部は短く外反して終る。内外面ともロクロナデによって仕上げられ、底面には回転糸切り痕を残す。

須恵器 (46・47) (46)は短頸壺の肩部付近、(47)は長頸瓶の胴部破片かと思われる。ともに内外面に自然釉の付着が著しい。

以上出土土器の様相よりすれば、本住居址は平安時代の所産と考えられる。

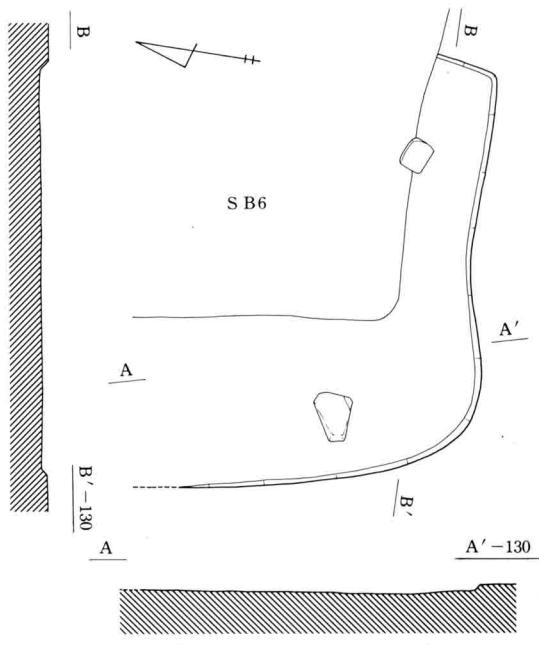
7号住居址

遺構 (III-25・26)

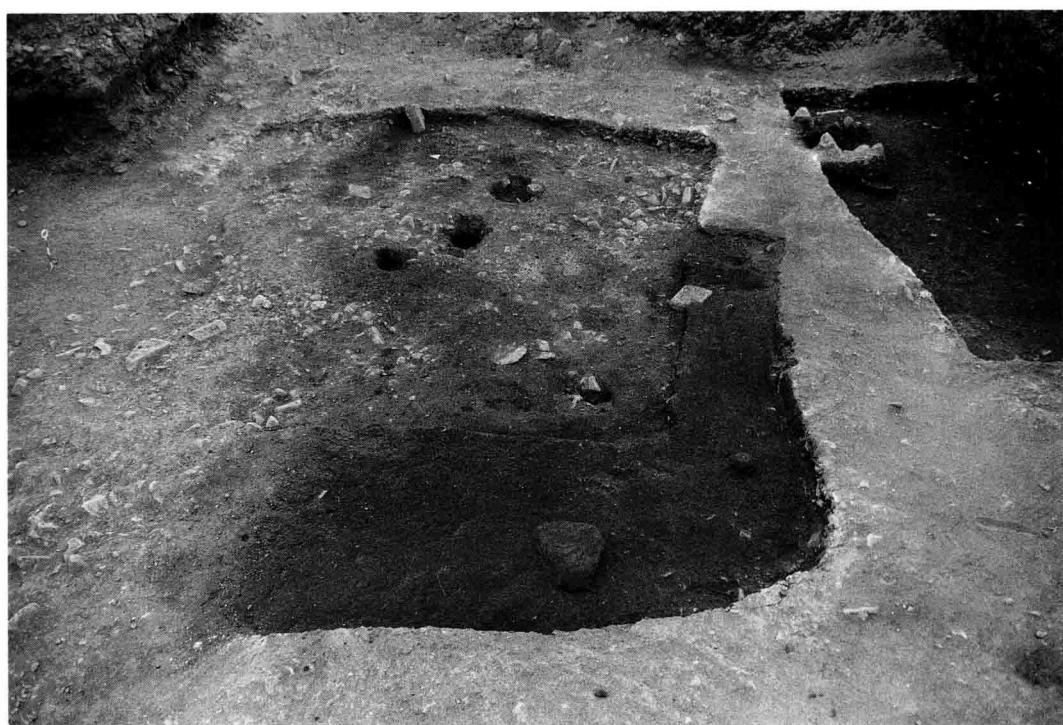
6号住居址に大半を切られ、また北側は明確に検出し得なかつたため詳細は不明であるが、一辺3.40mほどの隅丸(長)方形プランをとるものと思われる。検出面からの掘り込みは浅く4~7cmほどで、柱穴等も検出されていない。床面は全体に軟弱で判然としないが、土師器の壊等が床面に接した状態で出土している。また同様に床面に接した状況で扁平な角礫が2個検出されている。作業台的な機能をもつものであろうか。

遺物 (III-27)

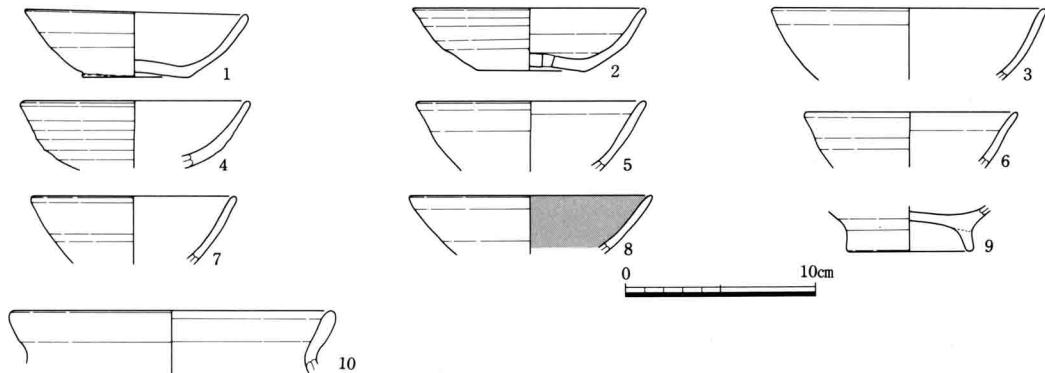
壊(1~8) いずれも土師器の壊で(1)(2)を除いては破片資料である。(1)は一部を欠



II-25 7号住居址実測図



III-26 6号・7号・8号住居址



III-27 7号住居址出土土器実測図

損するがほぼ完形で口径11.8cm・底径5.6cm・器高3.4cmである。内外面ともロクロナデされ底部には回転糸切り痕をとどめる。(2)は完形品で口径12.4cm・底径5.8cm・器高3.3cmである。(1)同様ロクロナデされ、底部には回転糸切り痕をとどめる。また底部中央やや偏ったところに径6mmほどの焼成前穿孔を一孔有するがその性格は不明である。(8)は口径12.8cmで内面は軽いヘラミガキ後黒色処理される。

高台付壺(9) 底部付近の破片で底径6.4cmである。高台はやや高く直立気味で底部には回転糸切り痕を残す。

甕(10) 口縁部破片で口径17.0cmである。頸部よりくの字状に緩やかに外反し、端部は肥厚する。内外面とも強い横ナデによって仕上げられる。

出土土器の様相よりすれば本住居址は平安時代の所産と考えられる。

8号住居址

遺構 (III-28~30)

大半が調査区域外となり詳細は不明であるが、一辺5.40mほどの方形プランを呈すると思われ主軸はN-11°-Wを測る。検出面からの掘り込みは比較的深く24cm前後である。検出した範囲内での床面はカマド付近が高く、その両壁に向って軟弱で低くなる。カマドは北壁の中央に構築されているものと思われる。形態は石芯粘土製両袖形のもので、袖部約55cm、燃焼部の内法約35cmほどの規模になる。両袖部先端には袖石が埋設され、また燃焼部には石製の支脚が埋設されその周囲は焼土でおおわれていた。煙道は傾斜を有しつつ若干突出した部分のみを確認した。

遺物 (III-31)

甕(1) 口径12.2cm・器高10.0cm。胴部は球形を呈し丸底で、口縁部は頸部より短くくの字状に外反して終る。外面は底部付近を中心にヘラケズリされた後、全体的にヘラミガキによって整形されると思われるが、器面の摩耗が著しく詳細は不明である。内面も全体的にヘラミガキ整形さ



III-28 8号住居址

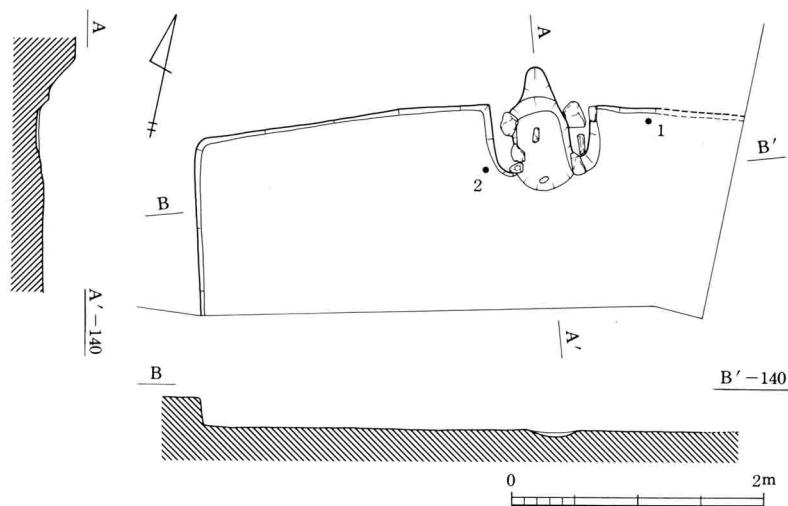


III-29 8号住居址カマド

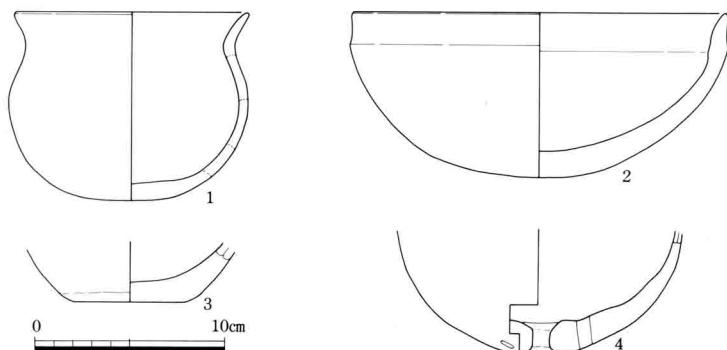
れている。

鉢(2) 口径19.6cm・
器高8.7cmで約1/2ほど
残存する。底部は丸底
で体部は底部より内湾
ぎみに立ち上がり、口
縁部は頸部に稜をなし
て短く直立する形態を
とる。器壁は全体に厚
く粗雑な感じのする土
器である。体部外面は
全体に横方向のヘラケ
ズリ後軽いヘラミガキ
がなされ、口縁部は内
外面とともに強く横ナデ
される。体部内面も全
体にヘラミガキにより
仕上げられている。

甌(4) 底部付近のみ
残存するが、4孔の焼
成前穿孔がなされてい



III-30 8号住居址実測図



III-31 8号住居址出土土器実測図

る。外面はヘラケズリ後ついにヘラミガキされ、内面も雑なヘラミガキがなされている。

甌(3) 底部破片で外面はヘラケズリ後ナデ整形、内面はナデ整形されている。底径6.0cm。

(2)はカマド左袖部の外側で、(1)はカマドの東側でそれぞれ床面に接した状態で出土している。

出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代後期の所産と考えられる。

9号住居址

遺構 (III-32)

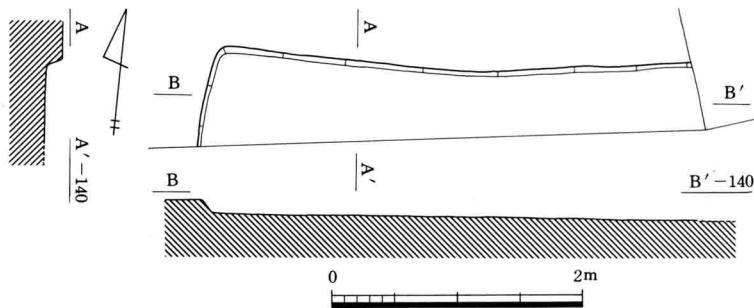
住居址北側の一部を検出したのみであり、大半は調査区域外である。また8号住居址を切って構築されている。検出面からの掘り込みは10cm前後と浅く、床面は軟弱で判然としない。詳細は不明と言わざるを得ない。

遺物 (III-33)

壊 (1～4) いずれも土師器壊の口縁部破片である。(1)は口径14.4cm、(2)は13.8cmで内外面

ともロクロナデによって整形される。(3)は口径11.4cm、(4)は12.6cmでともに内面は雑なヘラミガキ後黒色処理される。

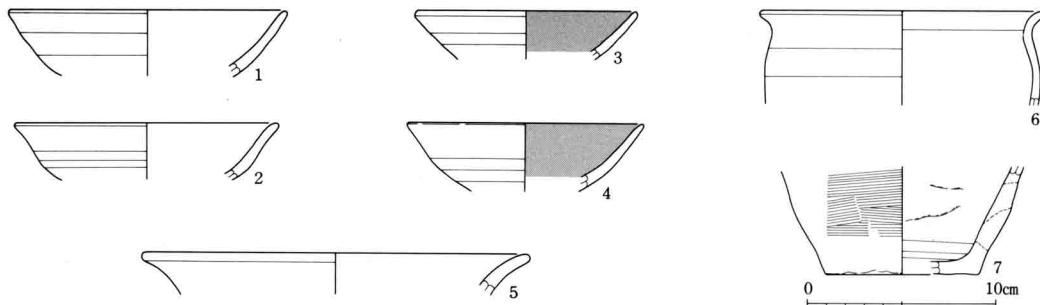
甕(5～7) (5)は口径20.2cmほどで口縁部は内外面とも横ナデされる。



III-32 9号住居址実測図

(6)は小型甕の口縁部破片で、口縁部は頸部から短く外反して終り、口径14.8cmである。内外面ともロクロナデによって整形される。(7)は底部付近の破片で底径8.2cmほどである。胴部外面は全体にカキメを残し、内面は比較的ていねいにナデ整形される。また底部は雑なヘラケズリによって仕上げられる。

以上出土土器の様相から本住居址は平安時代の所産と考えられる。



III-33 9号住居址出土土器実測図

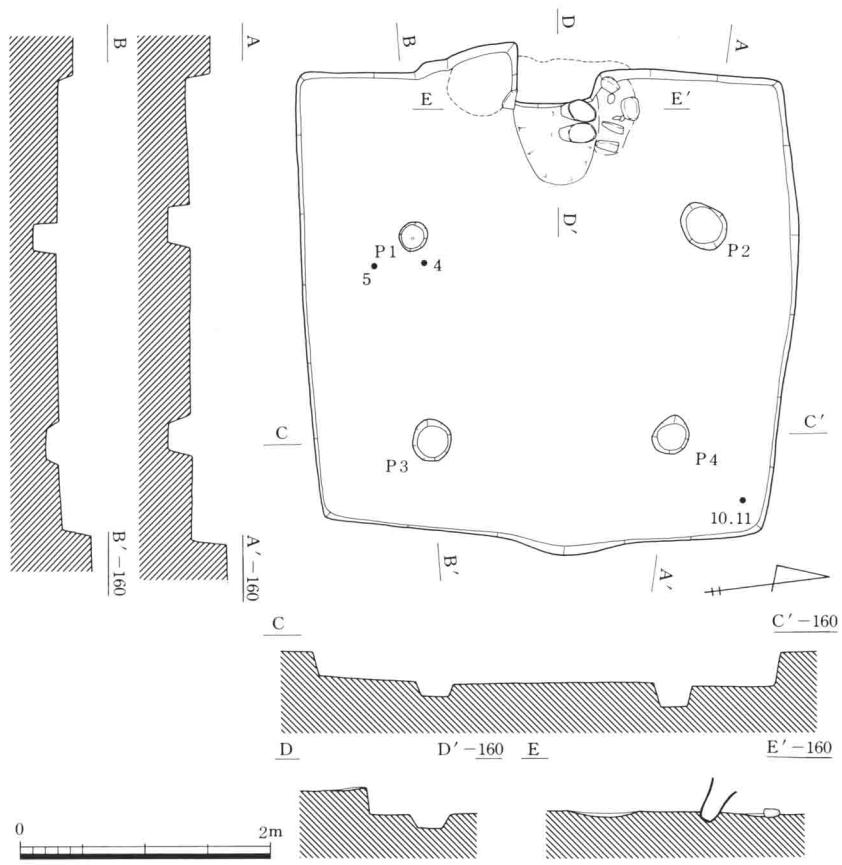
10号住居址

遺構 (III-34～37)

26号住居址の上に構築されており、3.85×3.90mのやや不整な方形プランを呈し、主軸はN-88°-Wである。検出面からの掘り込みは比較的深く、壁高は西壁21～23cm・東壁25～28cm・北壁27cm・南壁20cmである。主柱穴はP1～P4の4本方形配列で、深さはP1 20cm・P2 18cm・P3 10cm・P4 18cmである。カマドは西壁ほぼ中央に位置し、内部より甕2個体が直立した状態で検出されている。カマドはほとんど原形をとどめておらず、かろうじて右袖部の一部と燃焼部の掘り込みが確認されたのみである。またカマドの南側（実測図中破線で示した部分）に、焼土塊の充満したピット様の掘り込みが検出されている。その性格は不明ではあるが、あるいは他の遺構が重複している可能性も考えられる。床面はカマド周辺ならびに住居址中央付近を中心に貼り床



III-34 10号住居址



III-35 10号住居址実測図



III-36 10号住居址カマド

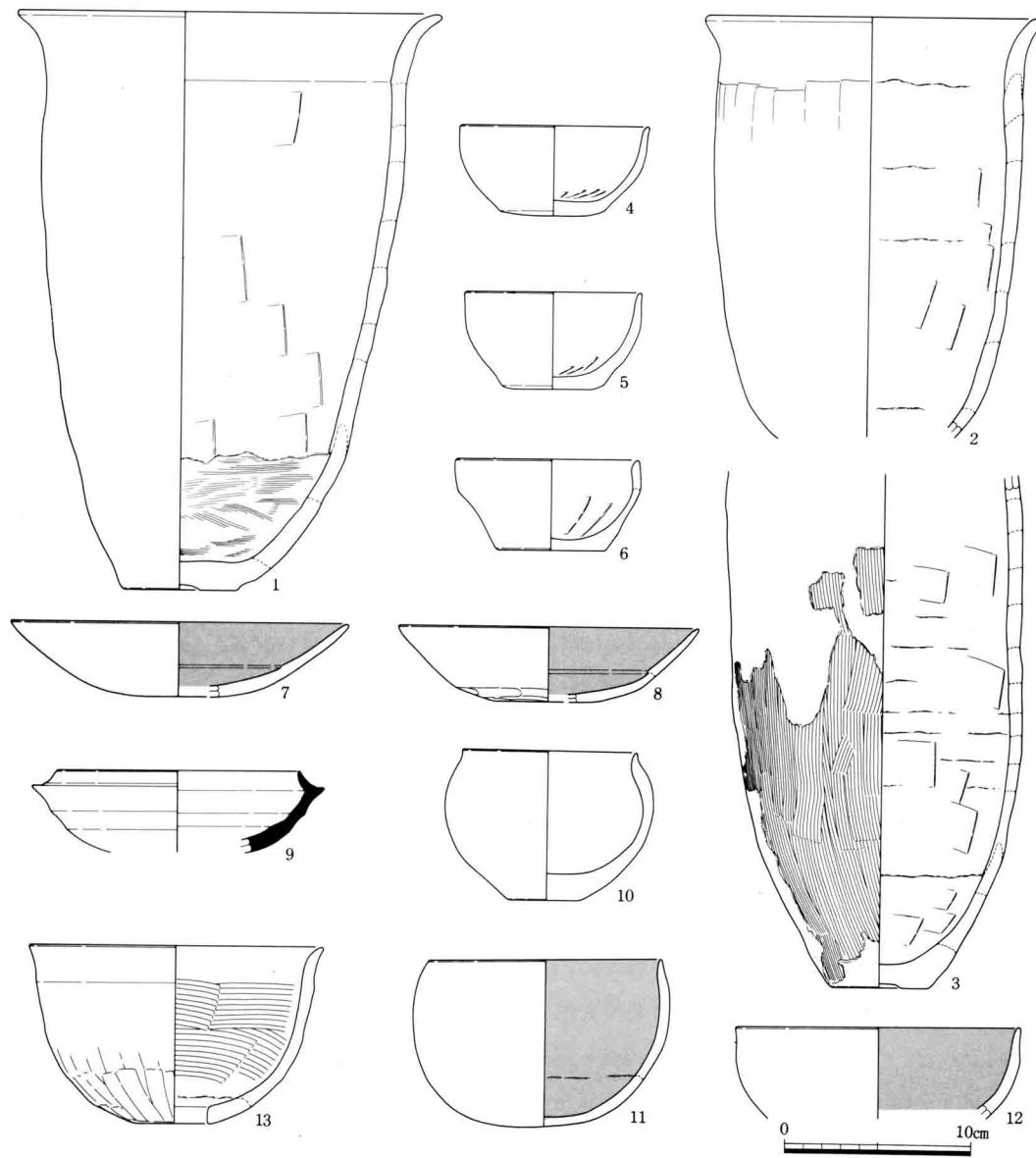
がなされるが、壁際は不明瞭なものとなる。P1の周辺には炭化材と若干の焼土塊ならびに土師器の壊が、また住居址北東隅より完形の土師器鉢がいずれも床面に接した状態で出土している。

遺物（III-38）

甕（1～3）（1）は胴中位以下はほぼ完存するが、胴上位ならびに口縁部は1/4ほどが残存するにすぎない。復原口径22.8cm・底径6.4cm・器高31.2cmで口縁部に最大径を有する。口縁部は短く外反し頸部内面に緩や



III-37 10号住居址土器出土状況



III-38 10号住居址出土土器実測図

かな稜を形成する。また底部はドーナツ状のくぼみ底を呈する。外面の整形は全体に雑なナデ整形がなされ、口縁部は内外面とも強いヨコナデがなされる。内面は胴下半に成形時の接合痕を顕著に残し、この接合痕を境に上下で整形が異なる。接合痕より下は底部周辺まで横から斜方向の細かいハケ整形がなされ、その後ナデられる。また底面も比較的ていねいにナデ整形される。接合痕より上は頸部付近まで全体に横方向のヘラによる平滑化がなされ、その後ナデ整形される。(2)は底部を欠損し、口縁部から胴部も1/3が欠損する。口径は18.0cmで口縁部は短く軽く外反し、口縁部に最大径をもつ。外面は頸部まで全体に縦方向のヘラケズリがなされ、その後頸部付近を

中心に軽いヘラミガキがなされる。口縁部は内外面とも強い横ナデがなされる。胴部内面は横方向のヘラによる平滑化後軽くナデ整形される。(3)は頸部以上を欠損するが胴部以下はほぼ完存する。底径5.0cm。胴部はさほど張ることなく直線的に底部に収約する形態を呈し、底部はドーナツ状のくぼみ底を呈する。外面は全体に縦方向のハケ整形を行った後、さらにその上に粘土を塗布している。内面胴下半には(1)同様成形時の接合痕を顕著に残し、また胴中位～上位にかけても粘土紐接合痕が顕著に認められる。整形は全体に横方向のヘラによる平滑化後ナデ整形される。

坏(4～8) (4)～(6)は器形・法量・整形等非常に似通った土器である。形態はいずれも体部上位にて口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部にて若干外反する。体部外面下半は横方向のヘラケズリ後軽いナデ整形がなされ、口縁部は内外面とも強い横ナデがなされる。内面底部付近はヘラによる平滑化後ナデ整形される。底部はいずれもヘラケズリ後ナデで仕上げられる。(4)の底部には木葉痕が認められる。(4)は口径10.2cm・底径5.7cm・器高4.9cm、(5)は口径9.6cm・底径5.4cm・器高5.2cm、(6)は口径9.9cm・底径5.8cm・器高4.9cmである。(7)(8)はともに内稜の坏である。(7)は口径18.4cm・器高4.0cmで外面は全体にていねいなヘラミガキがなされ、内面はヘラミガキ後黒色処理される。(8)は口径16.2cm・器高4.0cmで外面は底部を中心に横ヘラケズリを施し、その後全体に軽いヘラミガキがなされる。内面は(7)同様ヘラミガキ後黒色処理される。

須恵器坏(9) 坏部1/4ほどの破片であり復原口径は13.2cmである。立ち上がりは低く内傾する。受部はやや上向きに外方へのび、受部の上面にはヘラによる一条の凹線を施している。また体部下半の底部付近には雑なヘラケズリが認められる。

坏(10～12) (10)は口径9.4cm・底径4.0cm・器高8.0cmの完形品である。球形の体部から口縁部が短く強く外反する形態をとる。体部外面は全体にていねいなヘラミガキで仕上げられ、内面にも軽いヘラミガキが施される。口縁部は内外面とも強い横ナデがなされる。底部は軽いヘラミガキで仕上げられるが木葉痕をとどめている。(11)は半球形を呈し口縁部を若干欠損するがほぼ完形品である。口径12.6cm・最大径13.9cm・器高9.0cmである。内面体部下半に接合痕を残す。体部外面は全体にヘラケズリ後ていねいなヘラミガキがなされ、内面もヘラミガキ後黒色処理される。

甌(13) 全体の1/3ほどが残存しており、復原口径16.0cm・器高9.6cmである。体部は半球形を呈し口縁部は端部にて短く外反する。底部に径3.2cmほどの焼成前穿孔を一孔有する。体部外面は雑な縦方向のヘラケズリ後軽くナデられ、口縁部は内外面とも強く横ナデされる。内面は横から斜方向の粗いハケ成形がなされ、その後全体に軽いミガキが加えられる。

甌(1)(3)はカマド内に直立した状態で、坏(4)(5)はP1 東方の床面に接した状態で、(10)は(11)の中に入った状態で住居址北東隅の床面に接して出土した。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代後期の所産と考えられる。

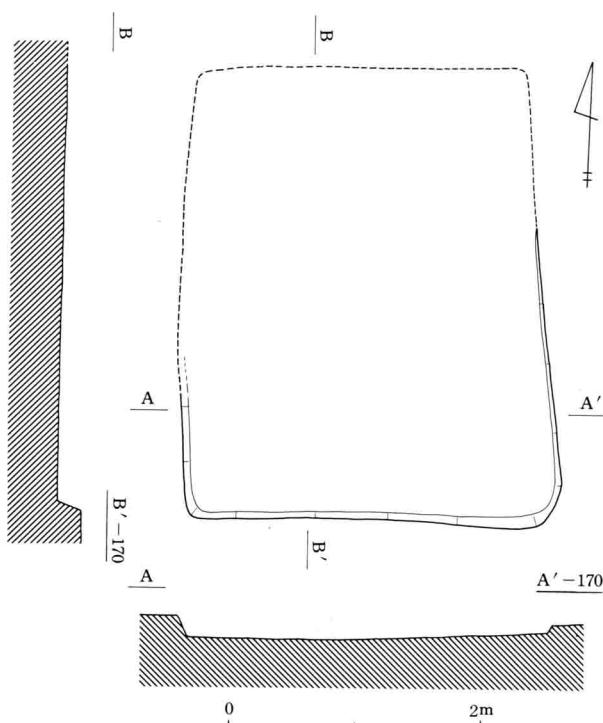
11号住居址

遺構（III-39・66・69）

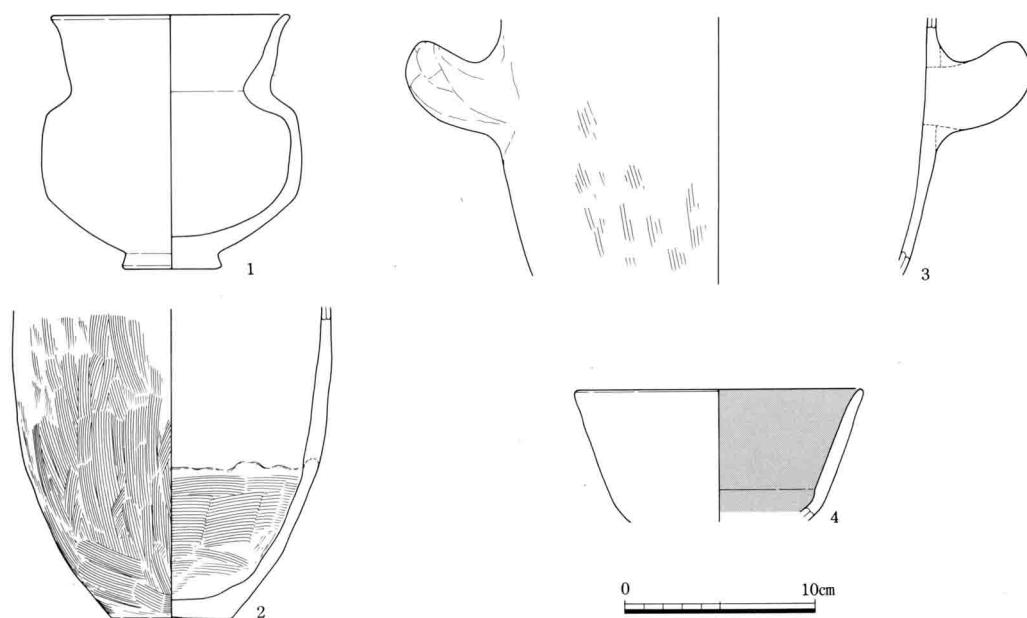
12号・22号住居址に切られ、住居址南側の約半分を検出したにすぎない。形態は、(3.60)×3.00mほどの隅丸長方形を呈するものと思われる。主軸はほぼ南北方向にとる。壁高は南壁20cm・東壁7cm・西壁17cmである。床面は全体に軟弱で判然とせず、柱穴・炉等の諸施設も検出されなかった。

遺物（III-40）

小型壺(1) 口径12.4cm・底径4.8cm 器高13.4cmで口縁部と胴部を1/2ほど欠損する。口縁部は直立ぎみに外開し短部にて短く外反して終る。胴部は肩の強く張る器形を呈し、底部は突出する。内外面ならびに底部に至るまで全



III-39 11号住居址実測図



III-40 11号住居址出土土器実測図

体にていねいにヘラミガキ整形されている。

甕(2) 長胴甕の胴下半で底径は6.4cm。外面は全体に縦方向のハケ整形を行ったのち、底部周辺に横方向のヘラケズリ的な強いハケ整形を行い、底面もハケによって最終調整がなされている。内面下半は横方向のハケ整形痕を顕著に残すが、接合痕以上は横方向のヘラによる平滑化後でいねいに横ナデされている。

甕(3) 把手部分の破片である。あらかじめ完成した把手に粘土帯を接合して胴部を成形しており、その接合痕が明瞭に看取できる。外面はハケ整形後縦方向に、内面は横方向にヘラミガキ整形されている。

壺(4) 口径15.2cmで壺部はやや深い。内面下半には段を有する。外面口縁部と内面はていねいにヘラミガキされ、内面は黒色処理される。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代後期の所産と考えられる。

12号住居址

遺構 (III-41・42・81)

11号住居址を切って構築され、北側は26号住居址に切られる。平面プランは4.90×4.30mほどの隅丸方形を呈し、主軸はほぼ南北方向にとる。検出面からの掘り込みは比較的深く、壁高は北

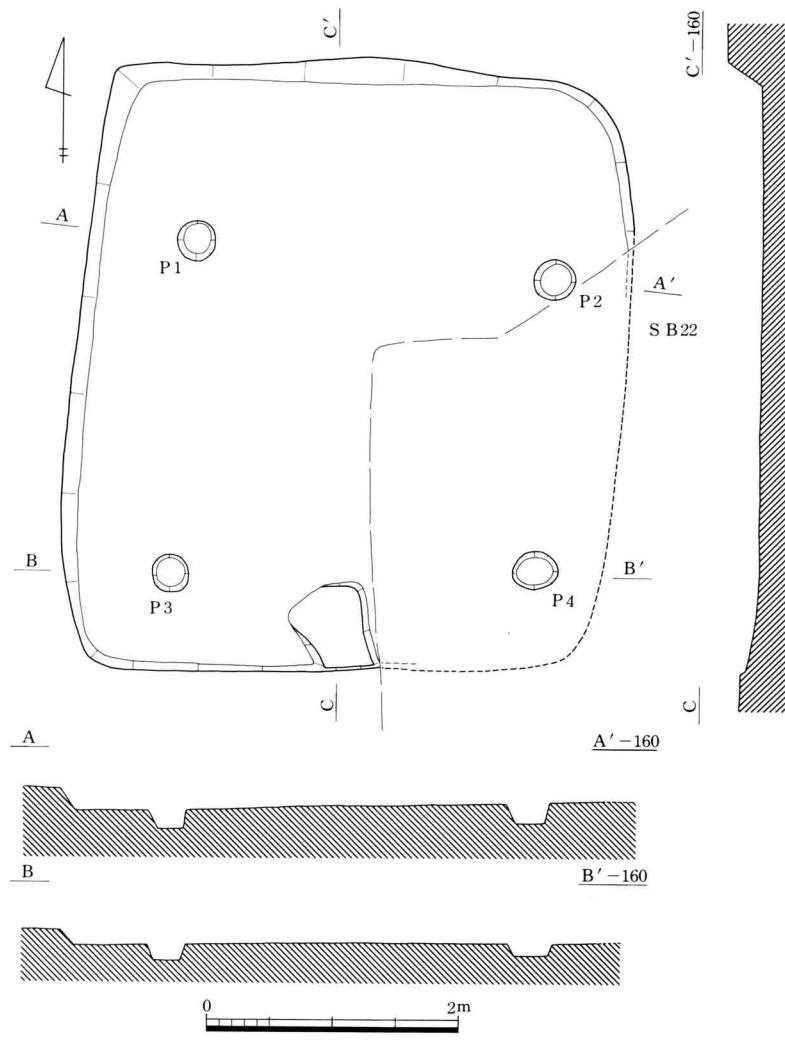


III-41 12号住居址

壁28cm・南壁15cm・東壁20cm・西壁24~28cmである。主柱穴はP1~P4が検出されており、4本方形配列である。柱穴の深さはP1 17cm・P2 17cm・P3 14cm・P4 10cmである。床面は全体に軟弱なもので判然とはしなかった。南壁中央付近に焼土塊と人頭大の自然礫が集中して検出されている。本住居址に伴うものか否か、性格等詳細は不明である。

遺物

弥生式土器・土師器須恵器等の小破片が出士しているのみで、時期決定の根拠となる明確な資料は出土していない。



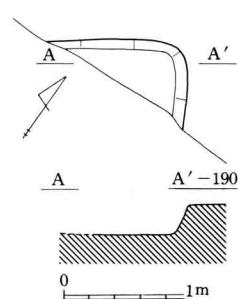
14号住居址

遺構 (III-43・46)

調査区南西端から検出されたもので、住居址北隅の一部のみで大部分は調査区域外となり、規模・主軸等の詳細は不明である。検出面からの掘り込みは24cmほどである。

遺物

土師器もしくは弥生式土器の小砂片が出土しているのみで、時期決定の根拠となる明確な資料はない。



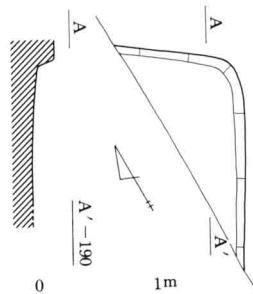
15号住居址

遺構（III-44・46）

調査区南西端から検出されたもので、住居址北東隅の一部のみで大部分は調査区域外となり、規模・主軸等の詳細は不明である。検出面からの掘り込みは14cm前後である。

遺物

弥生式土器の小破片が出土しているが、時期決定の根拠となる明確な資料はない。



III-44
15号住居址実測図

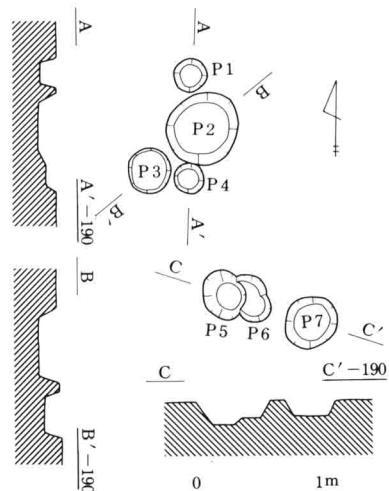
第16号住居址

遺構（III-45・46）

柱穴群の周囲に床面と考えられる堅緻な面が認められ、またその上面より炭化物・焼土等がかなりの量検出されたため住居址と判断して調査を進めたが、プラン等は明確に把握し得なかった。P1～P7の柱穴が確認されているが、本住居址と直接関連するものか否かは不明である。深さはP1 12cm・P2 15cm・P3 13cm・P4 8cm・P5 19cm・P6 14cm・P7 12cmである。

遺物

出土遺物は小破片のみで、実測可能なものは存在せぬが、弥生時代後期吉田式期の住居址である可能性が高い。



III-45
16号住居址実測図



III-46 14号・15号・16号住居址

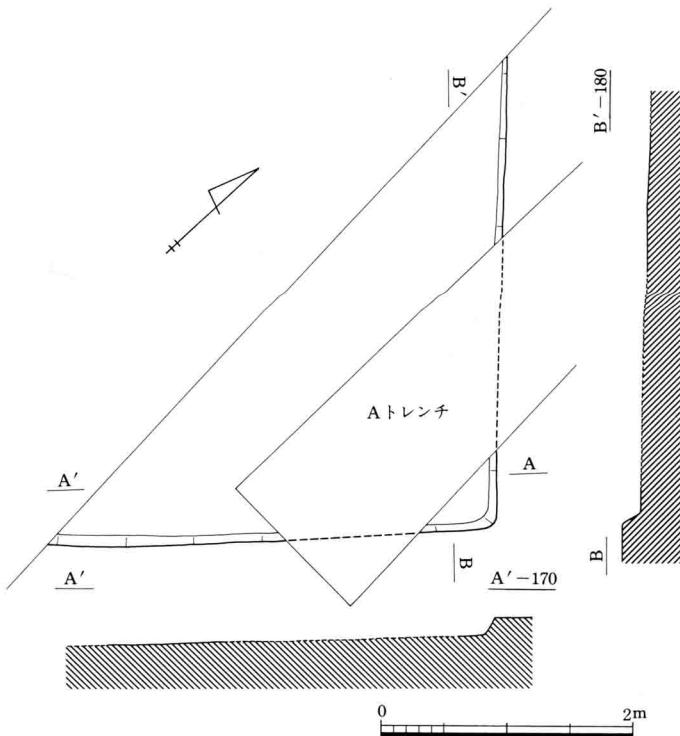
17号住居址

遺構 (III-47・49)

住居址東隅が検出されたが半分以上が調査区域外となり、また一部に試掘坑による攪乱を受けている。平面プランは隅丸長方形を呈すると思われるが、規模は不明である。検出面からの掘り込みは15cm前後と浅く、床面は全体に軟弱で判然としない。

遺物

時期決定の根拠となる明確な資料は出土していないが分布調査の資料から弥生時代後期箱清水式期と思われる。



III-47 17号住居址実測図

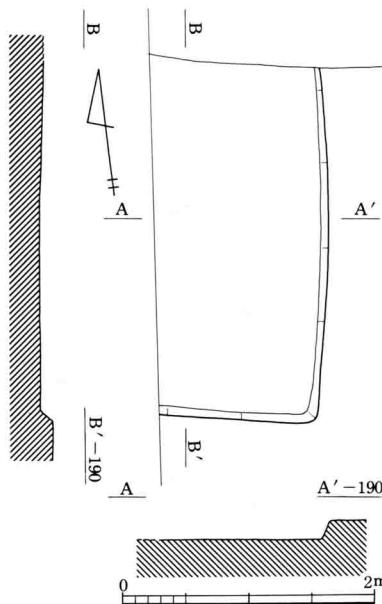
18号住居址

遺構 (III-48・50)

大半が調査区域外となり、また北側は暗渠遺構によって攪乱を受けるため規模等は不明である。平面プランは隅丸長方形を呈すと思われ、主軸はほぼ南北もしくは東西方向にとると思われる。検出面からの掘り込みは10~16cmで柱穴等も検出されなかった。

遺物

時期決定の根拠となる明確な資料は出土していないが平安時代の所産と推定される。



III-48 18号住居址実測図

19号住居址

遺構 (III-51・54)

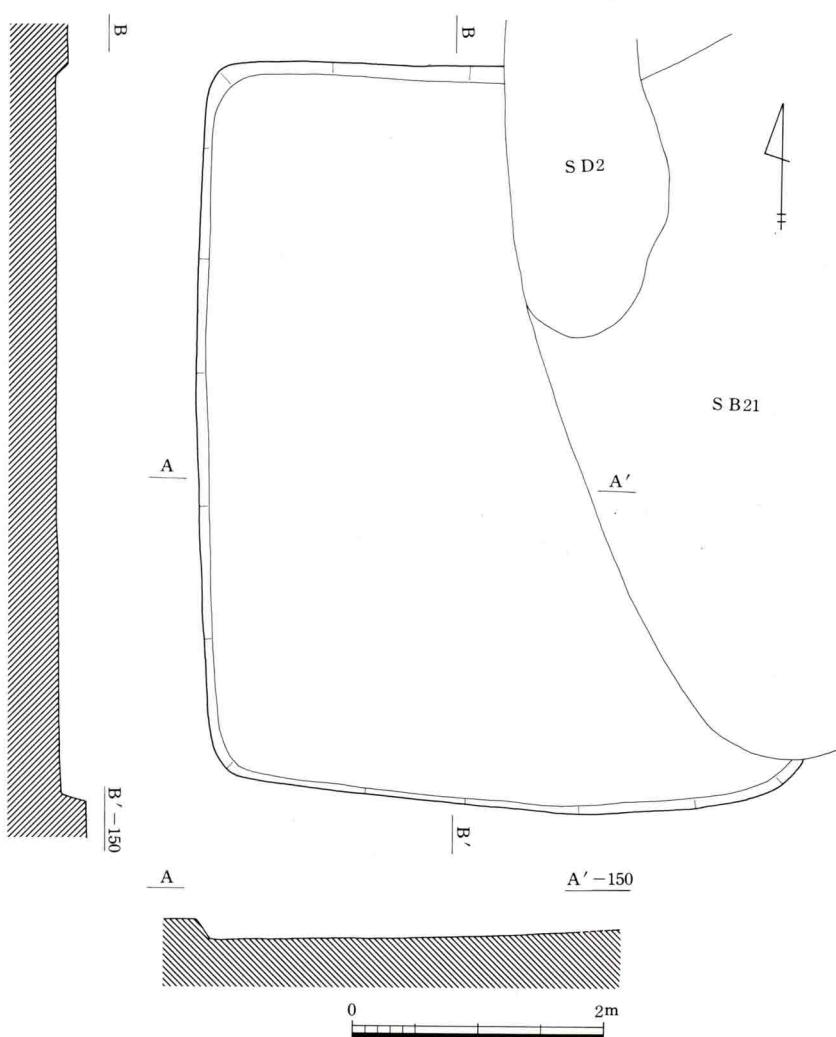
調査区ほぼ中央に位置し、21号住居址・2号溝址に切られる。平面プランは $5.90 \times (4.70) m$ ほどの隅丸長方形を呈し、主軸はほぼ南北方向にとる。壁高は北壁10cm・南壁20



III-49 17号住居址・暗渠排水遺構



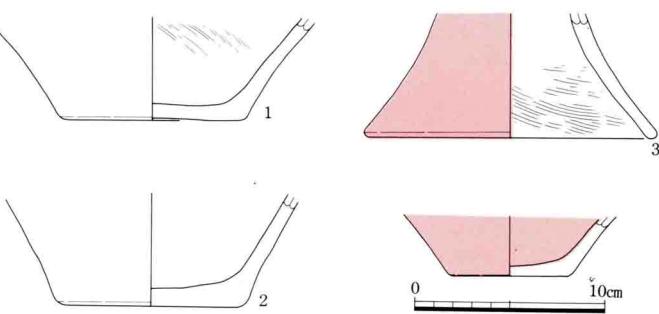
III-50 18号住居址



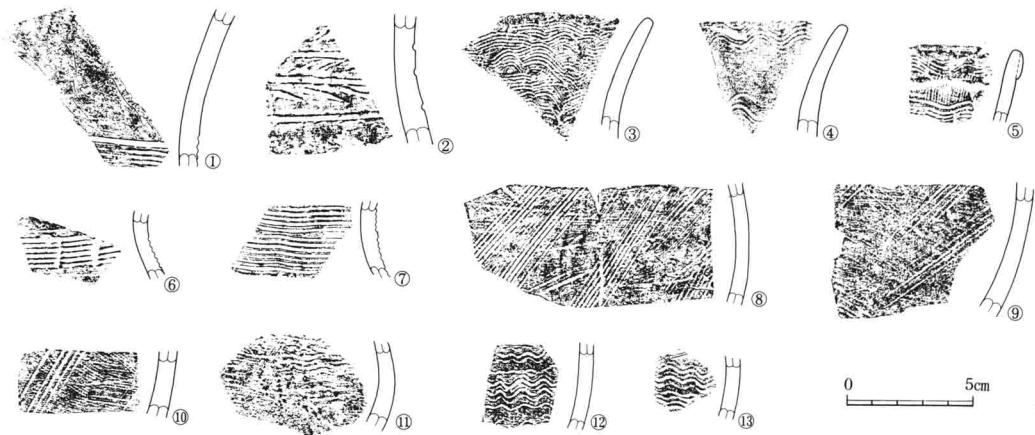
III-51 19号住居址実測図

cm・西壁15cmほどである。炉・柱穴等の諸施設は検出されなかった。床面は判然とせず、自然礫の突出が著しい。

遺物（III-52・53）
後期の弥生式土器が出土している。(1)は壺、(2)は甕の底部破片で(3)は高杯、(4)は鉢と思われる。資料も断片的でありまた住居址の構造も詳細は不明であり、時期は特定しかねるが、出土土器からは弥生時代後期の所産と



III-52 19号住居址出土土器実測図



III-53 19号住居址出土土器拓影



III-54 19号・21号・4号住居址

考えられる。

20号住居址

遺構（III-55・56）

北側は暗渠遺構による攪乱を受け規模等詳細は不明である。平面プランは隅丸長方形を呈すと思われ、規模は短軸3.0mほどである。主軸はS-38°-Eである。検出面からの掘り込みは南壁

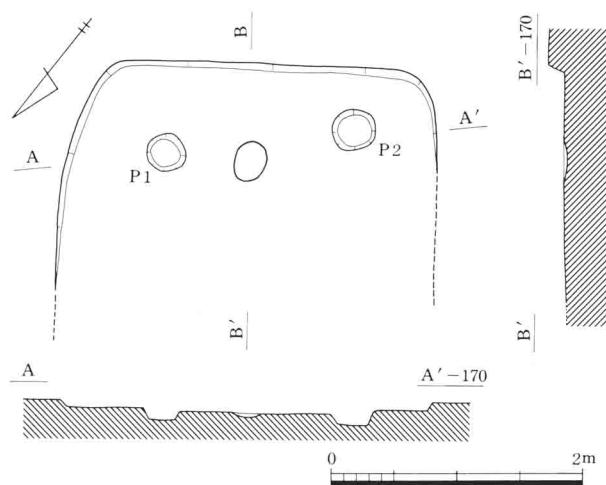


III-55 20号住居址・暗渠排水遺構

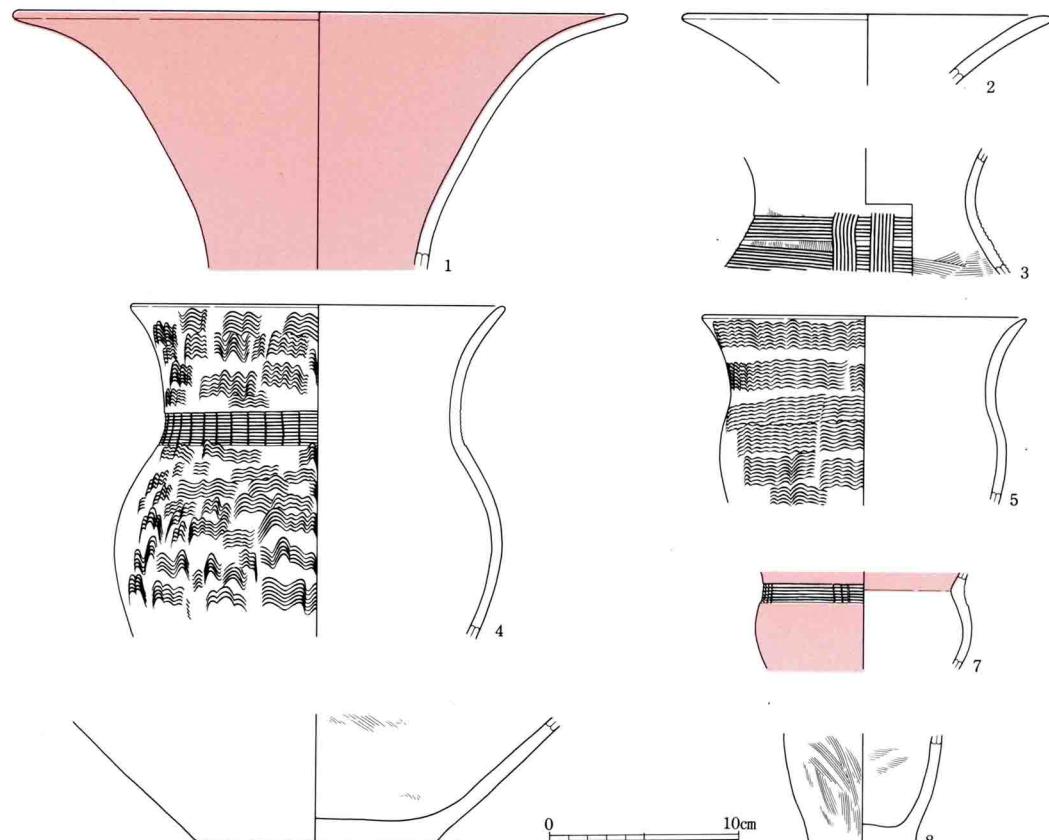
でも10cmほどと浅い。主柱穴としてはP1とP2が検出されており、4本長方形配列が予想される。柱穴の深さはP1 10cm・P2 12cmほどである。P1・P2間中央やや内寄りのところに地床炉が検出されている。径30cmほどのもので、浅く掘りくぼめられた内部には焼土や灰層が確認されている。床面はこの地床炉周辺にのみ貼り床が認められ、壁際ならびに北側にいくにつれて不明瞭なものとなる。

遺物 (III-57・58)

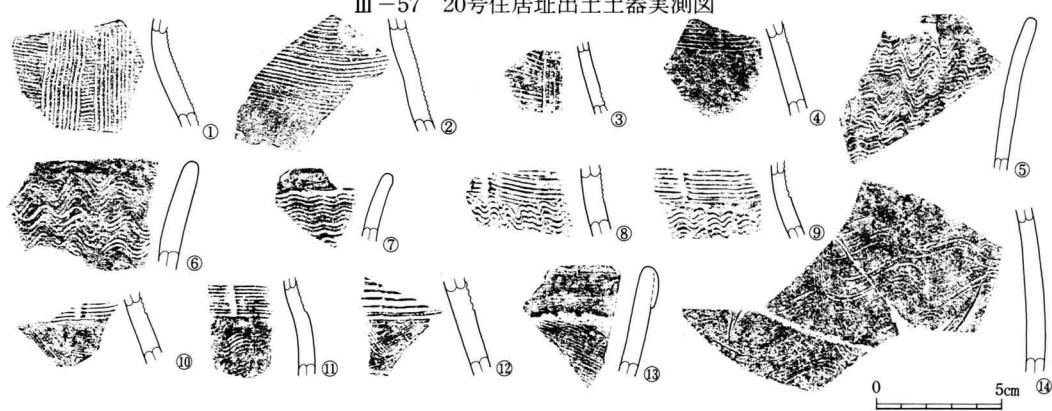
壺 (1~3・6) (1)は口縁部1/2ほどの破片で復原口径32.6cmである。朝顔状に大きく外反し端部は丸く終る。外面端部付近は横方向、それ以下は縦方向のヘラミガキがなされ、内面は全体に横方向のヘラミガキがなされ内外面ともに赤彩される。(2)は小型品の口縁部破片で口径19.8cm。頸部より直線的に外開して終る口縁部形態が予想される。内外面ともに比較的ていねいなヘラミガキで整形されるが、赤彩はされていない。(3)は頸部破片で1/2強残存する。頸部の屈曲より



III-56 20号住居址実測図



III-57 20号住居址出土土器実測図



III-58 20号住居址出土土器拓影

すれば胴の張りは強いものと予想される。文様は櫛描T字文が施文されるが確認できる範囲では2帯以上の直線文を上から下の順序に施文し、その後2ヶ一対の縦方向の直線文を施文している。外面頸部は文様施文後に縦方向の細かいヘラミガキ整形を行い、内面は横方向のハケ整形後横ヘラミガキで仕上げる。(6)は底部付近の破片で底径は12.6cmである。外面は縦方向の細いヘラミガキ整形、内面はハケ整形後ていねいなナデ整形がなされる。また底部はヘラケズリ後軽いヘラミ

ガキで仕上げられる。

甕（4・5・8）(4)は口径19.9cm・頸部径15.7cm・胴部最大径20.5cm。口縁部は頸部よりくの字状に緩やかに外反し、最大径は胴部にもつ。文様は頸部に等間隔止め簾状文を最初に施文しその後口縁部と胴部に波状文を施文する。口縁部は下から上へ、胴部は上から下の順序に基本的には施文しているが、部分的に後の描き足し等が有り、明確な規則性は認められない。また波状文は波長、振幅ともに非常に乱れたものである。全体に器面の摩耗が著しく詳細は不明である。内面は全体にハケ整形後横方向のヘラミガキで仕上げられる。(5)は胴中位以上の破片で1/4ほど残存する。復原口径17.4cm・頸部径14.2cm・胴部最大径15.4cmで口縁部に最大径を有する。口縁部は頸部よりくの字状に緩やかに外反し、端部はやや尖り気味に終る。文様は頸部簾状文を欠き、上から下の順序に波状文を施文する。波状文は6帯まで確認できるがいずれも7cmごとほどに描き継ぎを行っており、描き継ぎ箇所は各帯ともほぼ同一である。内面は全体に横方向のていねいなヘラミガキ整形で仕上げられている。(8)は小型甕の底部付近で底径5.7cmである。内外面ともハケ整形後ナデられヘラミガキはなされていない。底部はナデて仕上げられる。

高坏(7) 形態の小型の台付甕的な形態が予想されるが、赤彩されることより高坏と理解する。口縁部は内面頸部に稜をなして外反する。外面は頸部に3連止めの簾状文を施文したのち、口縁部と胴部に横方向のヘラミガキを行い赤彩する。内面も全体にヘラミガキが加えられ、口縁部のみ赤彩される。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。

21号住居址

調査区中央に位置し4号・19号住居址を切って構築され、2号溝址に切られる。平面プランは5.70×6.55mのやや横長の隅丸長方形を呈し、主軸はN-27°-Wである。4号・19号住居址の調査中に新たな床面の検出により確認された住居址であり、壁は北壁と南壁の一部が検出されたにすぎない。壁高はともに12cm前後である。主柱穴はP1～P4の4本方形配列と考えられ、P5～P7は支柱かと思われる。柱穴の深さはP1 16cm・P2 14cm・P3 22cm・P4 10cm・P5 14cm・P6 10cm・P7 11cmである。床面は住居址中央付近を中心に貼り床が認められたがさほど堅緻ではなく、周辺にいくに従い不明瞭なものとなる。住居址中央北寄りの部分に地床炉が検出されている。径30cmほどのもので、北側に棒状の河原石を埋置して炉縁石としている。炉内部には焼土と炭化物が顕著に認められた。P3・P5から壁際の部分にかけては、床面上より土庄につぶされた状態で、壺・甕等が出土している。

遺物（III-63・64）

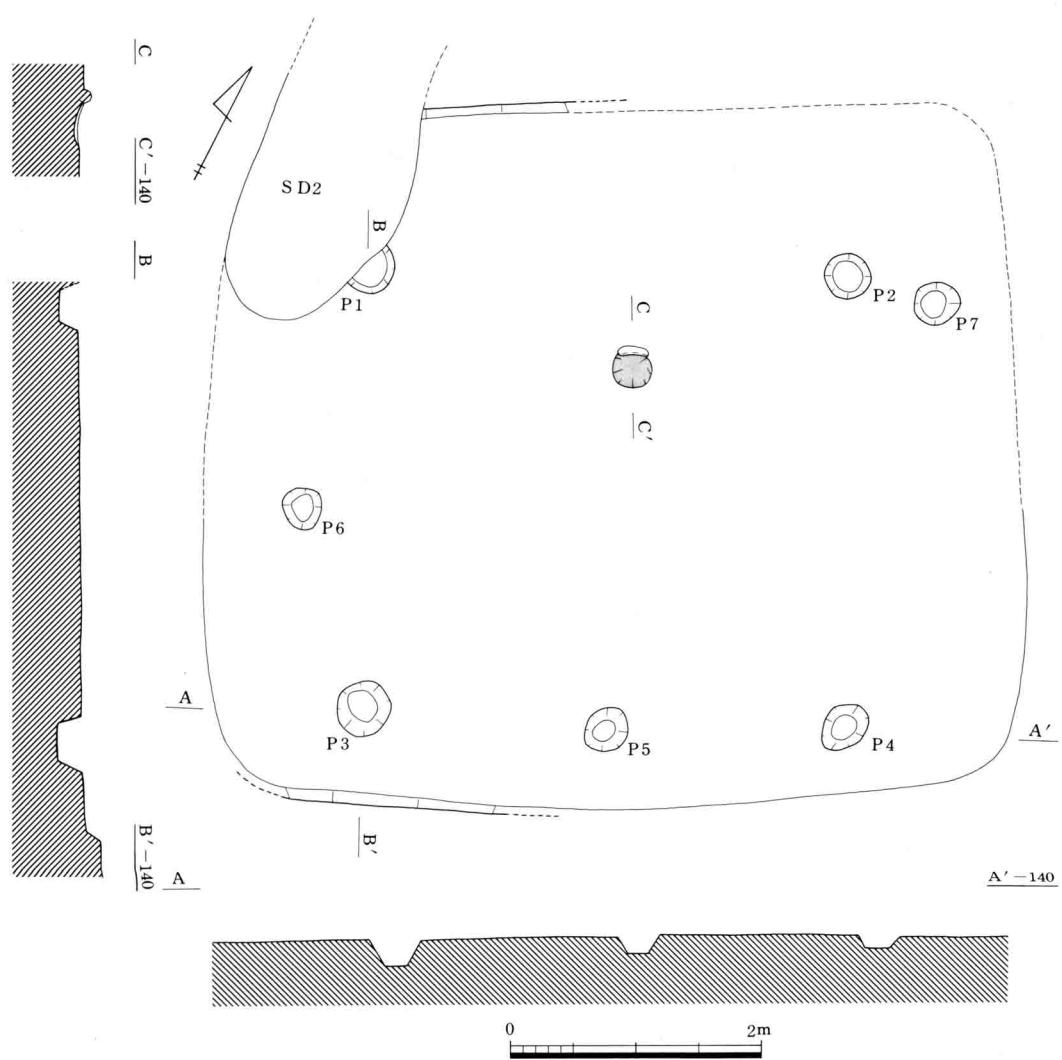
壺（1～5）(1)は口縁部と底部を欠損し、胴部も1/3ほどが残存するのみである。胴部最大径48.2cm・残存高41.2cmの大型の壺で、胴部は球形を呈し、口縁部は頸部内面に稜をなしてくの字

状に外反する形態が予想される。外面の整形は、胴上半は縦から斜方向、胴中位以下は主として斜方向のハケ整形後全体にやや雑なヘラミガキがなされるが、ハケ整形痕を比較的顕著に残している。内面は胴中位以下に横から斜方向のハケ整形を施した後、胴上位を指頭にて上方にかきあげるようなナデ整形を施している。(2)～(5)は有段口縁をなす壺である。(2)(3)は1/6ほどの小破片で、口径はともに17.0cmほどである。いったん外反して終る擬口縁上に新たに粘土帯を継ぎ足して有段口縁を形成しており、整形はハケ整形後強い横ナデによって仕上げられている。(4)は口径16.0cm・胴部最大径26.4cmで1/4ほど残存している。有段口縁部の成形は(2)(3)と同様と考えられるが、端部は尖り気味に終る。胴部外面は全体にヘラミガキ整形され、口縁部も強い横ナデの後軽いヘラミガキがなされている。内面の整形は器面の摩耗が著しく詳細不明であるが、口縁部は横ハケ整形後軽く磨かれているようである。(5)は口縁部を若干欠損するが図示した部分はほぼ完存し、口径18.0cm・胴部最大径29.2cmほどである。口縁部は頸部内面に鋭い稜をなして直立ぎみに立ち上がり、有段部にて内面に緩やかな稜を形成して外反する形態を呈し、胴部は球形胴が予想される。外面の整形は全体に縦から斜方向のハケ整形後、口縁部は横、頸部は縦、胴部は斜方向にていねいなヘラミガキを行っている。内面口頸部は横ハケ後横ヘラミガキされ、胴部はナデ整形後肩部付近を中心に横方向のヘラケズリがなされる。

甕（8～12）(8)は口縁部と胴部を1/3ほど欠損する。口径19.8cm・胴部最大径27.6cm・底径6.7cm・器高32.7cmである。口縁部は頸部からくの字状に短く強く外反し、端部は丸く終る。胴中位に最大径を有し、底部はやや突出する。外面胴上半は口縁部に強い横ナデを施したのち左回りに右下がりのハケ整形を行い、胴下半は基本的には右回りに右上がりのハケ整形を行っている。内面は底部付近に放射状のハケ整形を右回りに行った後、胴下半に右下がりのハケ整形を行い、胴上位は全体に横から斜方向のハケ整形で仕上げる。胴中位付近のみハケ整形後ナデ整形される。頸部内面には粘土接合痕が顕著に認められ、口縁部は内外面とも強い横ナデで仕上げられる。(9)は口径18.2cm・胴部最大径27.0cm・底径7.5cm・器高28.5cmで最大径は胴中位に有する。口縁部は頸部内面に鋭い稜をなしてくの字状に短く強く外反し、端部は尖り気味に終る。胴部は球形を呈し、底部はさほど突出しない。外面胴部は底部周辺に至るまで全体に斜方向のハケ整形がなされ、その後胴下半を中心横方向の荒いヘラケズリがなされる。底部はヘラケズリ後軽くナデ整形される。内面は底部付近に放射状のハケ整形を行った後、全体に斜方向のヘラケズリで仕上げられる。口縁部は内外面とも強い横ナデがなされるのみである。(10)は口径14.0cm・胴部最大径19.4cm・底径6.8cm・器高20.0cmで胴部は球形を呈し、胴中位に最大径を有する。口縁部は頸部内面に鋭い稜を形成して、くの字状に短く直線的に外開する形態を呈する。外面胴部は縦から斜方向の細かいハケ整形後全体にていねいにナデ整形され、口縁部は内外面とも強く横ナデされるのみである。底部は全体にナデ整形されるが粒圧痕を多数とどめている。内面胴上半には粘土帶接合痕を顕著に残すが、整形は全体にヘラケズリにて仕上げられる。



III-59 21号住居址



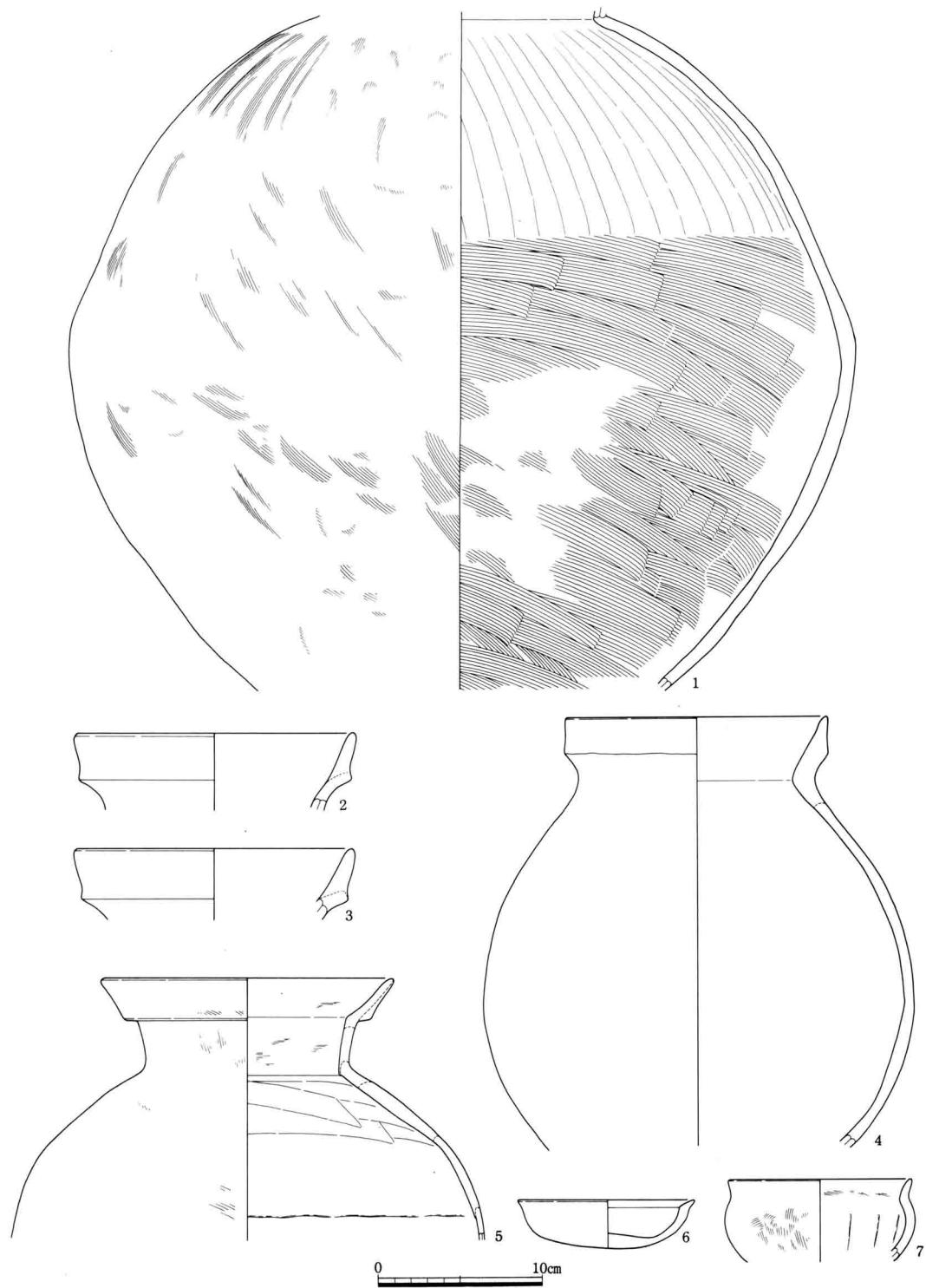
III-60 21号住居址実測図



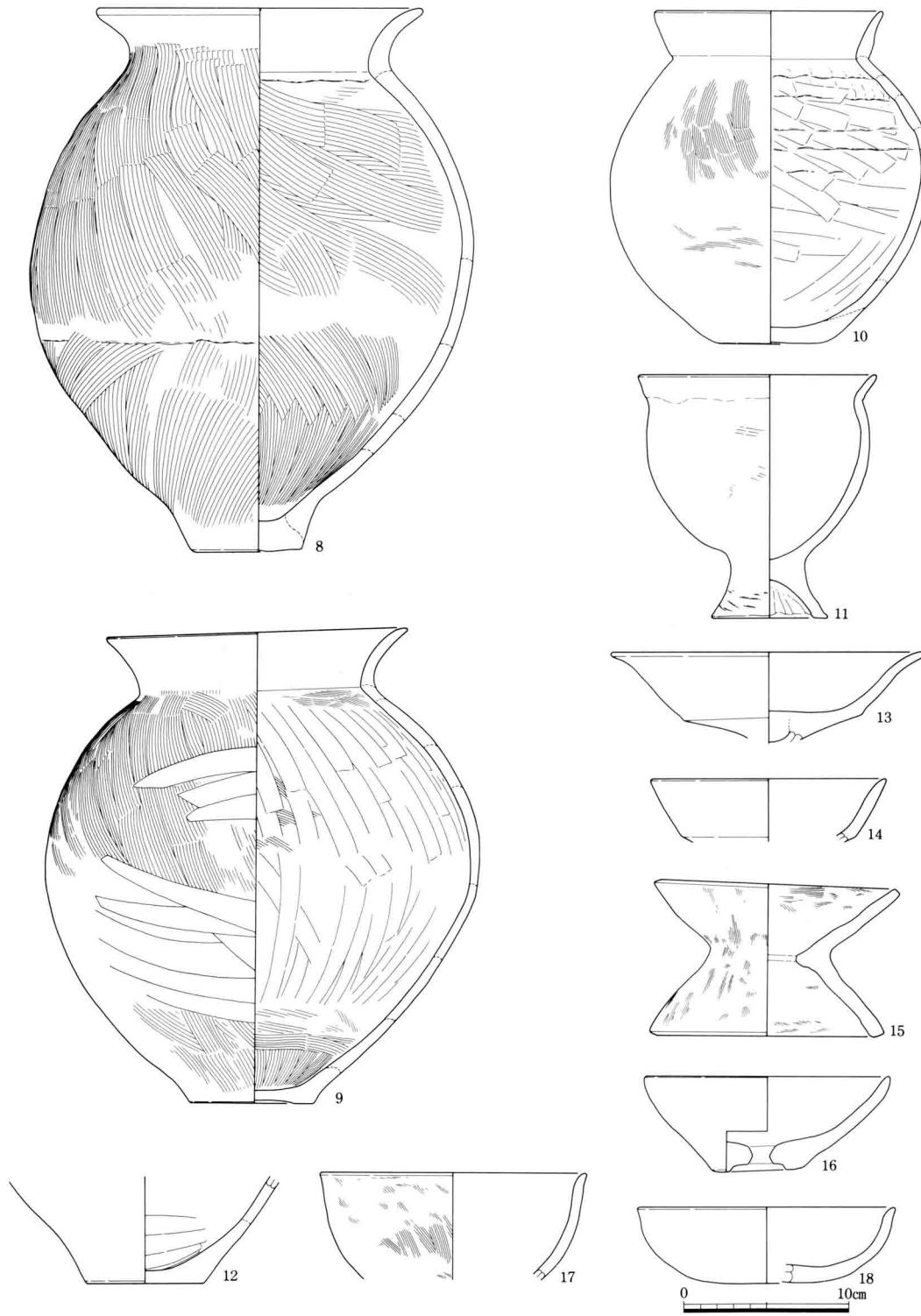
III-61 21号住居址土器出土状態



III-62 21号住居址土器出土状態



III-63 21号住居址出土土器実測図①



III-64 21号住居址出土土器実測図②

(11)は小型の台付甕で口径14.5cm・胴部最大径13.5cm・脚端部径7.1cm・器高14.7cmである。口縁部はくの字状に短く外反して終り、胴部は上位に最大径を有する。脚部は短くハの字状に開くが脚端は面をなす。外面は全体にヘラケズリによって仕上げられ、特に脚部には整形痕を顕著にとどめる。内面の整形は器面の摩耗が著しく詳細不明であるが、口縁部は内外面とも横ナデによって仕上げられているようである。

高坏 (13・14) (13)は坏部2/3ほどが残存しており口径19.0cmである。坏部下半にて屈曲し口縁部が外反する形態をとるが、屈曲部外面には鋭い稜を形成する。外面はナデ整形後軽いヘラミガキ、内面は全体に比較的ていねいなヘラミガキがなされる。(14)は1/4ほどの破片で口径14.4cmである。坏部下半にて屈曲したのち、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。内外面ともていねいな横ヘラミガキによって仕上げられている。

器台形土器(15) 非常に粗雑な作りの土器で受け部径15.0cm・脚端部径14.3cm・器高9.2cmである。受け部も脚部も直線的に外開する形態を呈し、端部はともに面とりされる。外面は全体に縦方向のハケ整形後雑なナデ整形がなされ、受け部内面はハケ整形後雑なミガキが加えられる。脚部内面もハケ整形後雑なナデ整形がなされるが、一部に布目状の圧痕をとどめている。

坏 (6・7・16~18) (6)は完形で口径10.8cm・器高3.0cmである。口縁部は内面に鋭い稜を形成して外反し、底部は丸底である。内外面とも器面の摩耗が著しく詳細不明だが、ていねいなナデもしくはヘラミガキで仕上げられていると思われる。(7)は口径11.2cmで体部はやや張る。口縁部は短く直立ぎみに外反して終る。外面はハケ整形後雑に磨かれ、内面はヘラによる平滑化後でいねいに横ヘラミガキされる。(16)は底部に焼成後の穿孔を一孔有する。口径14.8cm・底径5.4cm・器高5.7cm。外面は全体にナデ整形され、内面は雑なヘラケズリがなされる。(17)は体部が深く塊とした方がよいかもしれない。口径16.1cmで口縁部は端部にて若干外反する。外面はハケ整形後ナデ、内面は軽いヘラミガキがなされる。(18)は口径15.8cmで外面はヘラケズリ後横ヘラミガキ、内面はていねいなヘラミガキで仕上げられている。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代中期の所産と考えられる。

22号住居址

遺構 (III-65~67・69・81)

11号・23号住居址を切って構築される。遺構検出段階では本住居址は確認し得ず、11号住居址調査中に本住居址のカマドが検出され住居址の存在が確認されるに至った。そのため南西壁は推定によるところが大きい。平面プランは(4.30)×3.90mほどのやや不整な隅丸方形を呈するものと思われ、主軸はN-125°-Wである。検出面からの掘り込みは比較的深く25cm前後である。主柱穴はP1~P4の4本方形配列と考えられる。柱穴の深さはP1 6cm・P2 6cm・P3 5cm・P4 12cm・P5 11cmと浅い。カマドは西南壁中央付近に設けられている。前述のごとく当初は11号

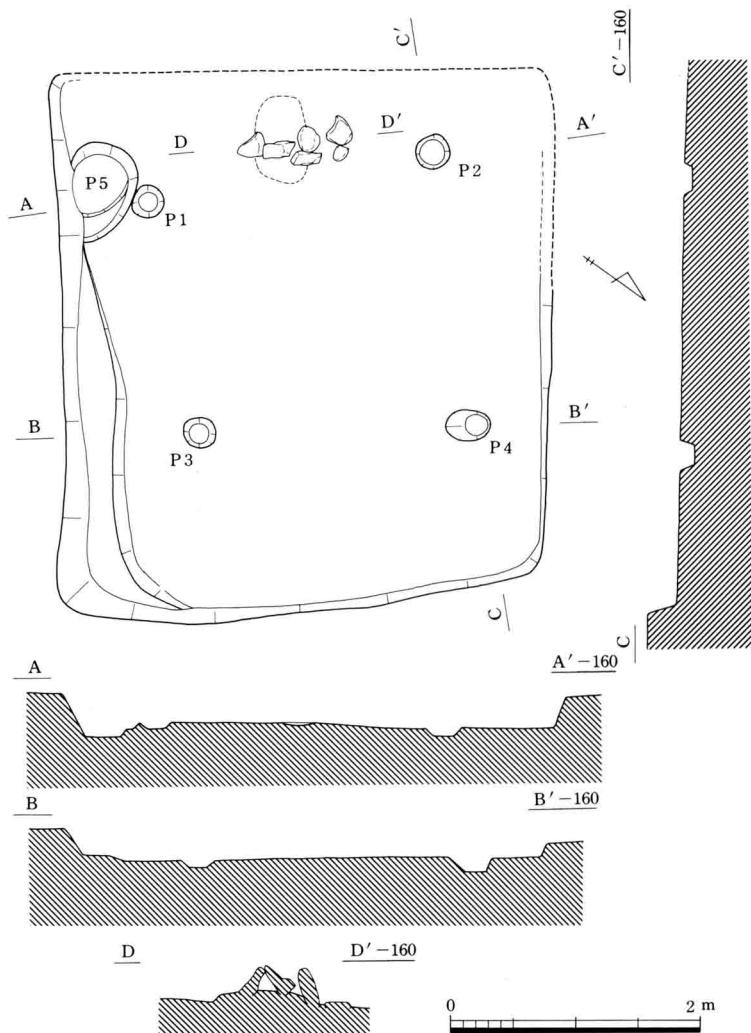
住居址のカマドと考え調査を進めたために、煙道袖部等は破壊してしまったが残った袖石等からは粘土製の両袖カマドと推定される。床面は住居址中央付近に若干の貼り床が確認されたがさほど堅緻なものではない。カマド付近から壺類が完形の状態で出土している。

遺物 (III-68)

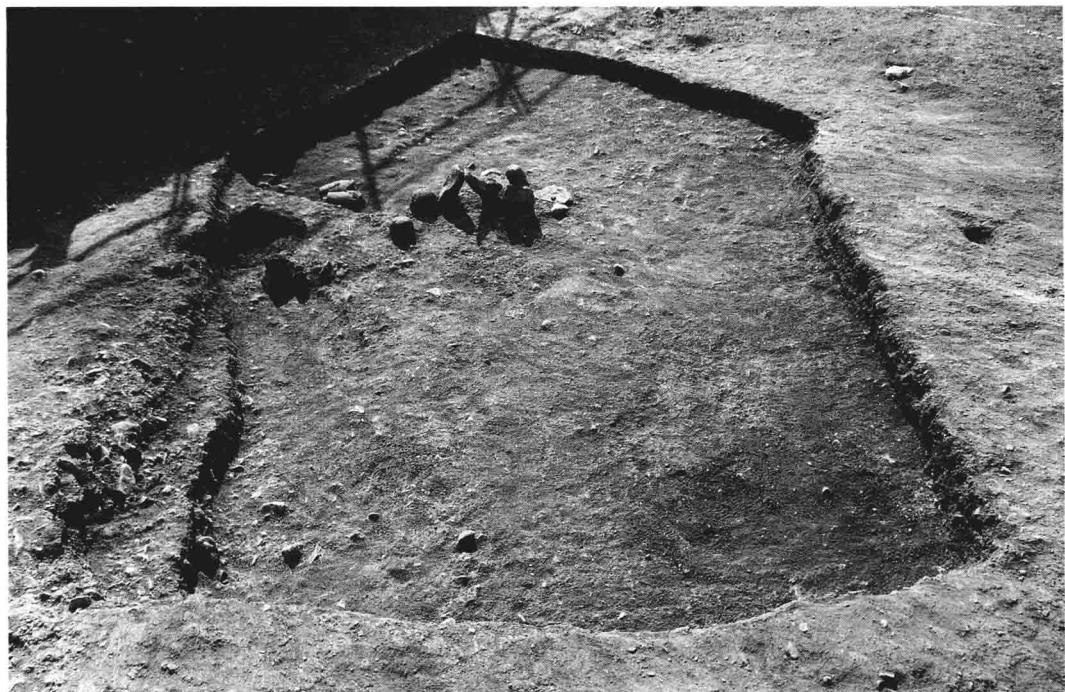
壺 (1~7) (1)は完形品で口径14.9cm・器高6.2cmであり、底部は丸底をなし壺部は半球形を呈する。外面はヘラケズリ後ヘラミガキされ、内面も全体にていねいな横ヘラミガキで仕上げられる。(2)は口径15.5cm・器高4.5cmで形態・整形等は(1)と同様であるが壺部はやや浅い。(3)はさらに壺部の

浅い形態を呈し、口径13.4cm・器高3.8cmである。外面体部は不定方向のヘラケズリ後やや雑なヘラミガキがなされ、口縁部は横ナデ後軽く横ヘラミガキされる。内面も全体に軽いヘラミガキで仕上げられる。(4)~(7)はいずれも内面黒色処理されるものである。(4)は口径13.6cm・器高5.0cmで半球形を呈し、外面はヘラケズリ後ヘラミガキされる。(5)は口縁部を一部欠損するがほぼ完形品で、口径13.0cm・器高5.5cmである。外面底部から体部下間にヘラケズリを行った後、内外面とも非常にていねいなヘラミガキで仕上げている。

甕 (12・13) (12)は長胴甕の底部破片で底径6.6cmである。外面はヘラケズリ後ナデ整形されるが粘土接合痕を顕著に残し、内面もナデ整形されるのみである。(13)は小型甕で口径13.0cm・器高12.2cmで底部は丸底をなし不安定である。外面体部は全体に縦方向のヘラケズリ後軽いヘラミガ



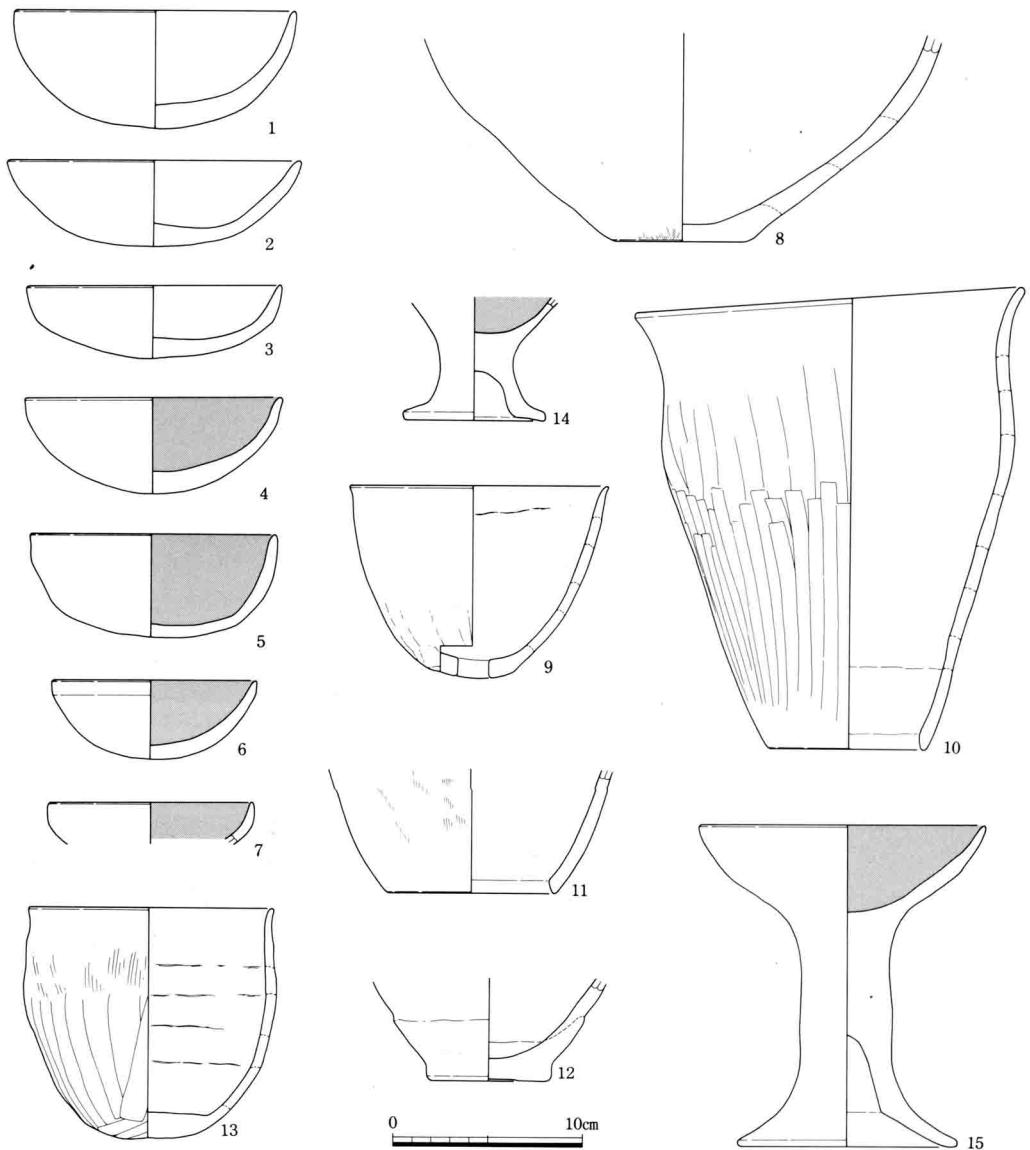
III-65 22号住居址実測図



III-66 22号・11号住居址



III-67 22号住居址カマド



III-68 22号住居址出土土器実測図

キで仕上げられ、口縁部は強く横ナデされる。内面はヘラによる平滑化後ナデ整形されるが、粘土接合痕を顕著に残している。

甌（9～11）（9）は小型品で口径13.6cm・器高10.2cm。口縁部の一部を欠損するがほぼ完形品である。底部には径1.6cmほどの焼成前穿孔を一孔有する。体部は全体に縦方向のヘラケズリ後軽いヘラミガキによって仕上げられ、口縁部は横ナデされる。内面も横ナデ後全体に軽いヘラミガキがなされるが、口縁部付近には粘土接合痕を残す。（10）は大型品で口径20.6cm・底径8.2cm・器高23.8cmである。口縁部は緩やかに外反し、胴部は肩部以下直線的に底部へ収約する器形を呈す

る。胴部外面は縦方向のヘラナデ的な細かいヘラケズリを施した後、部分的に軽くヘラミガキされ、口縁部は強く横ナデされる。内面は全体に横方向のていねいなヘラミガキによって仕上げられる。(11)は底部破片で底径8.9cmである。外面はヘラケズリ後ていねいにヘラミガキされ、内面もていねいな横ヘラミガキがなされる。

高坏 (14・15) (14)は小型で、脚端部径は7.6cmである。脚端部にて鋭く外折する形態をとり内面には鋭い稜を形成する。脚部外面は縦方向のヘラケズリ後ヘラミガキされ、内面もていねいにヘラミガキされる。坏部内面は横ヘラミガキ後黒色処理される。(15)は口径15.3cm・脚端部径11.7cm・器高17.1cmで円柱状の長い脚部を有する。脚上半は中実で端部にて鋭く外折する形態を呈する。坏部から脚外面はヘラケズリ後ヘラミガキされ、坏部内面はヘラミガキ後黒色処理される。(12)(15)はカマド内より、(1)(5)はカマド右側の床面上より、(3)(9)(13)はそれぞれ床面上より出土したものである。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は古墳時代後期の所産と考えられる。

23号住居址

遺構 (III-69・70・81)

22号・26号住居址に切られる。平面プランは5.10×4.00mのやや不整な隅丸長方形を呈し、主軸はN-52°-Wである。壁高は北壁13cm・南壁9cm・東壁12~15cm・西壁15cmであり、検出面か

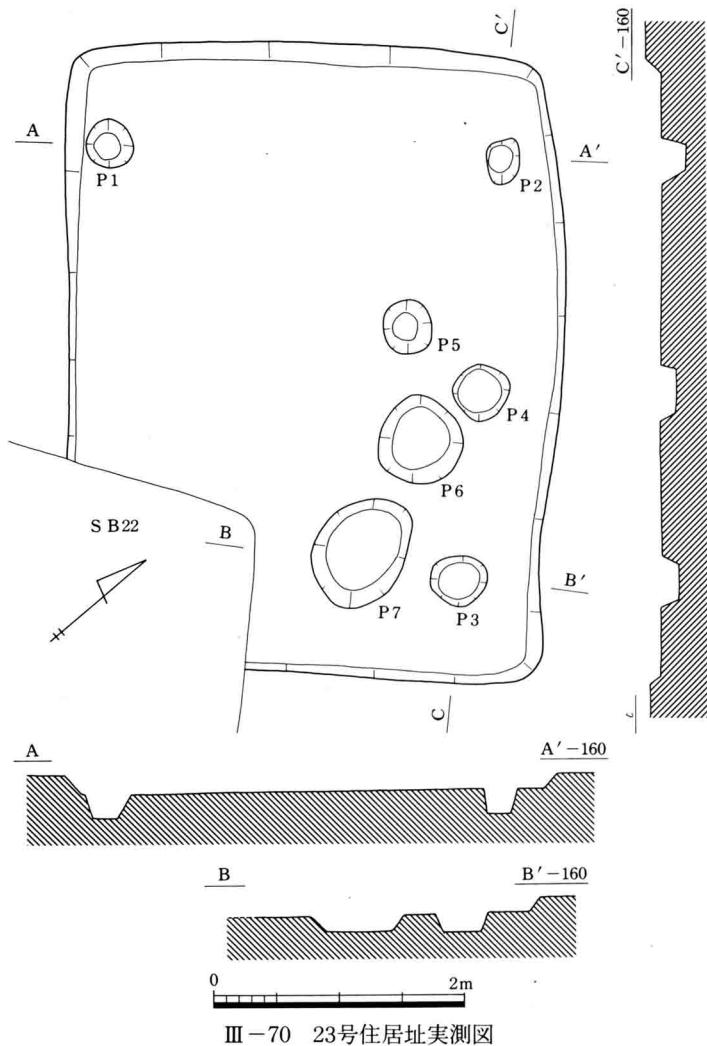


III-69 23号・22号・11号住居址

らの掘り込みはやや浅い。主柱穴にはP1～P3の3本が該当すると思われ、4本長方形配列が予想される。P5～P7特にP6・P7はやや大きめのピットであり、本住居址に伴うものか否か不明である。深さはP1 20cm・P2 20cm・P3 15cm・P4 13cm・P5 14cm・P6 12cm・P7 11cmである。床面は比較的平坦であるが軟弱である。P5周辺に挙大～人頭大の自然石が集中して検出されている。

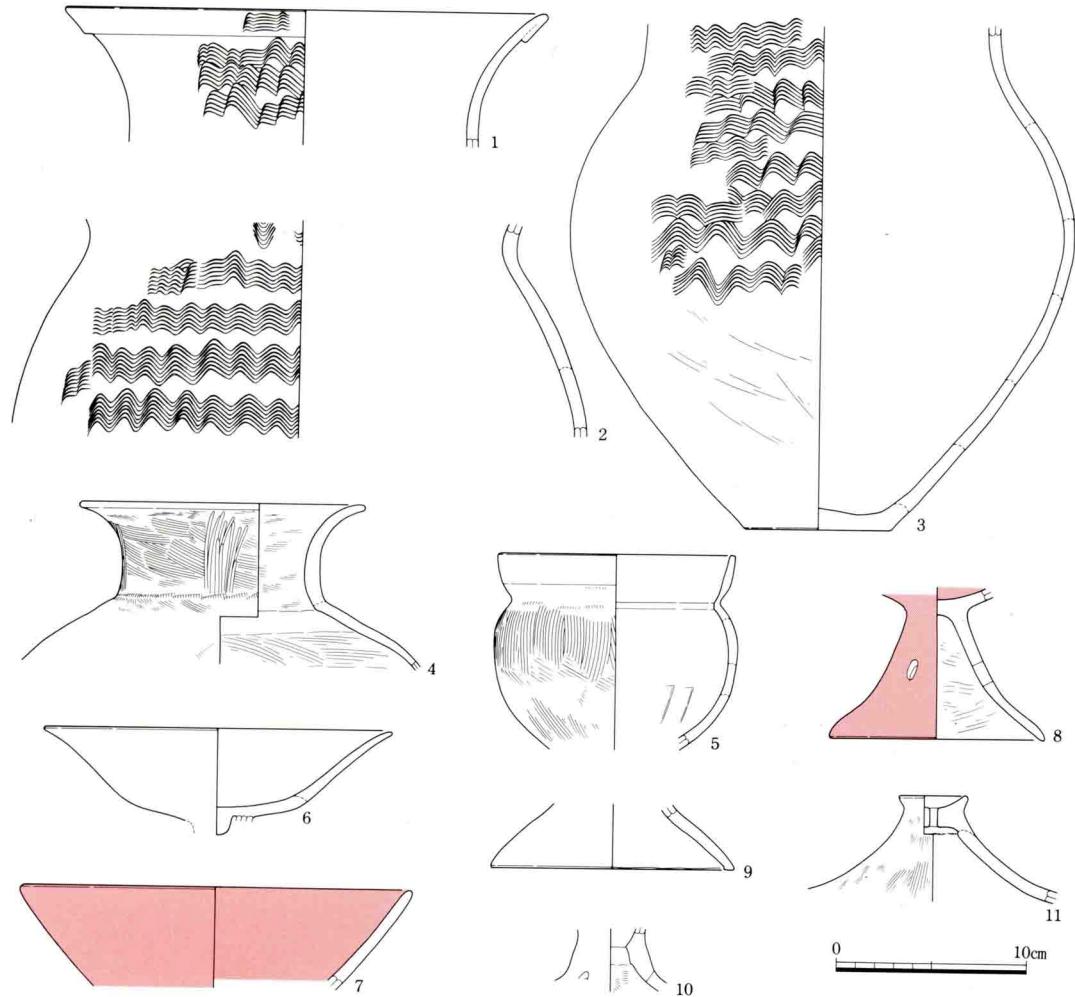
遺物

甕（1～3・5）(1)は1/6ほどの口縁部破片で口径25.8cmである。口縁部は端部に粘土帯を接合することにより折り返し状をなしている。口縁部外面は上から下の順序に波状文を施文し、折り返し部にも一帯施文している。内面

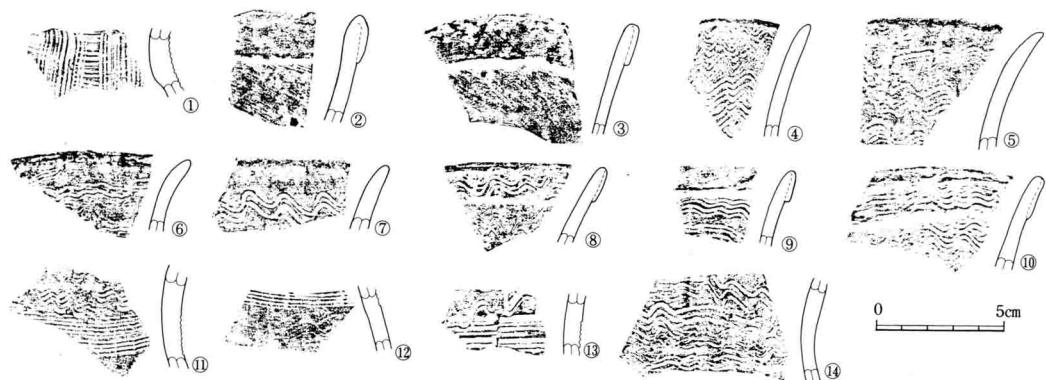


III-70 23号住居址実測図

は横ヘラミガキによって仕上げられる。(2)は胴上半の破片で肩部の形状からは胴部の張りは強いものと思われる。外面には5帯の波状文が確認できるが、頸部簾状文は施文されぬものと思われる。内面は全体に軽いヘラミガキがなされる。(3)は頸部以上を欠損するが胴部最大径26.8cm・底径7.8cm・残存高26.7cmである。文様は頸部簾状文を欠くが、最初頸部に一帯の波状文を施文しその後口縁部は下から上に、胴部は上から下の順序に波状文を施文するものと思われる。ただし後の描き継ぎ箇所も多く、施文もかなり乱れたものである。胴部下半は斜方向のハケ整形後ヘラミガキされ、底部もヘラケズリ後ヘラミガキによって仕上げられている。内面は胴部下半を中心に横方向のハケ整形がなされ、その後全体に軽いヘラミガキがなされる。(5)は小型の甕で口径12.6cm・胴部最大径12.8cmである。胴部は球形を呈し、口縁部は頸部にて強くくびれた後内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は面とりされる。胴部外面は中位に斜方向のハケ整形を行ったのち肩部から



III-71 23号住居址出土土器実測図



III-72 23号住居址出土土器拓影

上半に縦方向のハケ整形を行い、その後口縁部に強い横ナデを施す。胴部内面はヘラによる平滑化後ナデ整形される。

壺(4) 口縁部から胴上半にかけての資料で図示した部分の1/2ほどが残存する。口径15.2cmである。口縁部は頸部より直立ぎみに立ち上がった後端部にて強く外反する形態をとり、胴部は球形に近く張る形態が予想される。口縁部外面は全体に横から斜方向のハケ整形がなされるが、一周に4ヶ所意識的に縦方向のヘラミガキを行い装飾的な効果をもたらしている。また胴部上半のハケ整形を頸部下端にて意識的に止めているのも同様に装飾効果を考えたものと思われる。胴部外面はハケ整形後雑なヘラミガキがなされる。内面口縁部は横ハケ後ナデ整形され、胴部は指頭による押圧調整後強い横ナデがなされ、さらにその後ヘラケズリ的な横ハケが施される。

高坏（6～9） (6)は口径18.5cmで胴下半にて緩やかに屈曲して口縁部が外反する形態を呈する。内外面ともハケ整形後ていねいなヘラミガキにて仕上げられる。(7)は1/4ほどの破片で口径21.0cmである。口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、内外面ともヘラミガキされ赤彩される。鉢であるかもしれない。(8)は脚部破片で脚端部径11.4cmである。脚部はハの字状に大きく外開するが端部にて若干内湾ぎみとなる。円形の透かし孔を3孔有し、外面はヘラミガキ後赤彩される。内面は雑なハケ整形後ナデ整形される。(9)は脚端部径12.8cmで脚部は大きく外開し端部は面とりされる。(9)は器台である可能性もある。

器台(10) 脚部上半の破片で円形の透かし孔を3孔有し、外面はていねいな縦ヘラミガキがなされる。

蓋(11) 笠形に大きく開く形態をとり、つまみ部には径4mmほどの焼成前穿孔を一孔有する。外面は縦方向のハケ整形後雑なヘラミガキがなされ、内面は横方向の比較的ていねいなヘラミガキで仕上げられる。

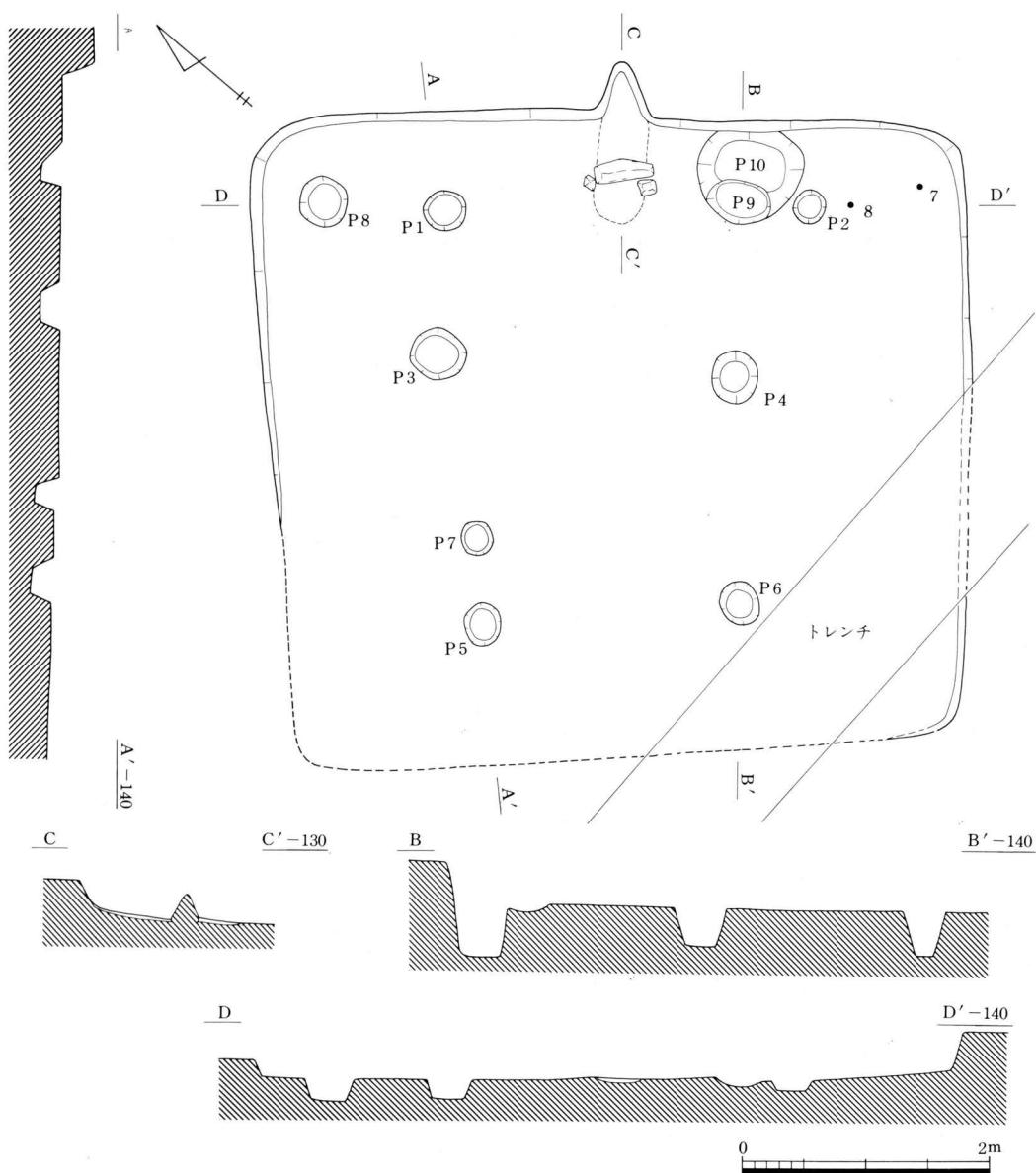
以上出土土器の様相について述べてきた。これらの資料は(1)～(3)・(7)・(11)といった弥生後期の箱清水式土器もしくはその系譜上にあるものと、(4)～(6)・(8)～(10)の古式土師器とに2分し得る。両者が共伴関係にあるのか否かは遺構検出の困難さから、調査時点においては明確に把握し得なかった。また本住居址付近は遺構の切り合い関係も複雑であり他遺構からの混入の可能性も特に古式土師器に関しては高い。ここではこれらの資料の一括性は極めて不確実なものであることを指摘しておくにとどめる。以上の理由により本住居址の所属時期については、弥生時代後期～古墳時代前期といった大きな時間幅の中でとらえておきたい。

24号住居址

遺構（III-73～75）

3号住居址を切って構築されるが、当初遺構検出段階では確認できず3号住居址調査中にその存在が判明したもので、西南壁ならびにカマド部分は破壊してしまった。また一部に試掘坑によ

る攪乱を受けている。平面プランは $(5.30) \times 5.80$ mほどのやや横長の隅丸方形を呈し、主軸はN -48° Eである。壁高は北東壁27~34cm・北西壁16cm・南東壁33cmほどで、検査面からの掘り込みは比較的深い。カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。前述の理由により袖部は確認できなかったが、袖石の存在より粘土製の両袖カマドであったことが推定され、煙道も長さ40cmほどまで確認されている。主柱穴はP1~P6本長方形配列と思われ、P7・P8は支柱と考えられる。深さはP1 17cm・P2 17cm・P3 9cm・P4 32cm・P5 20cm・P6 34cm・P7 20cm・P8 17cm・P



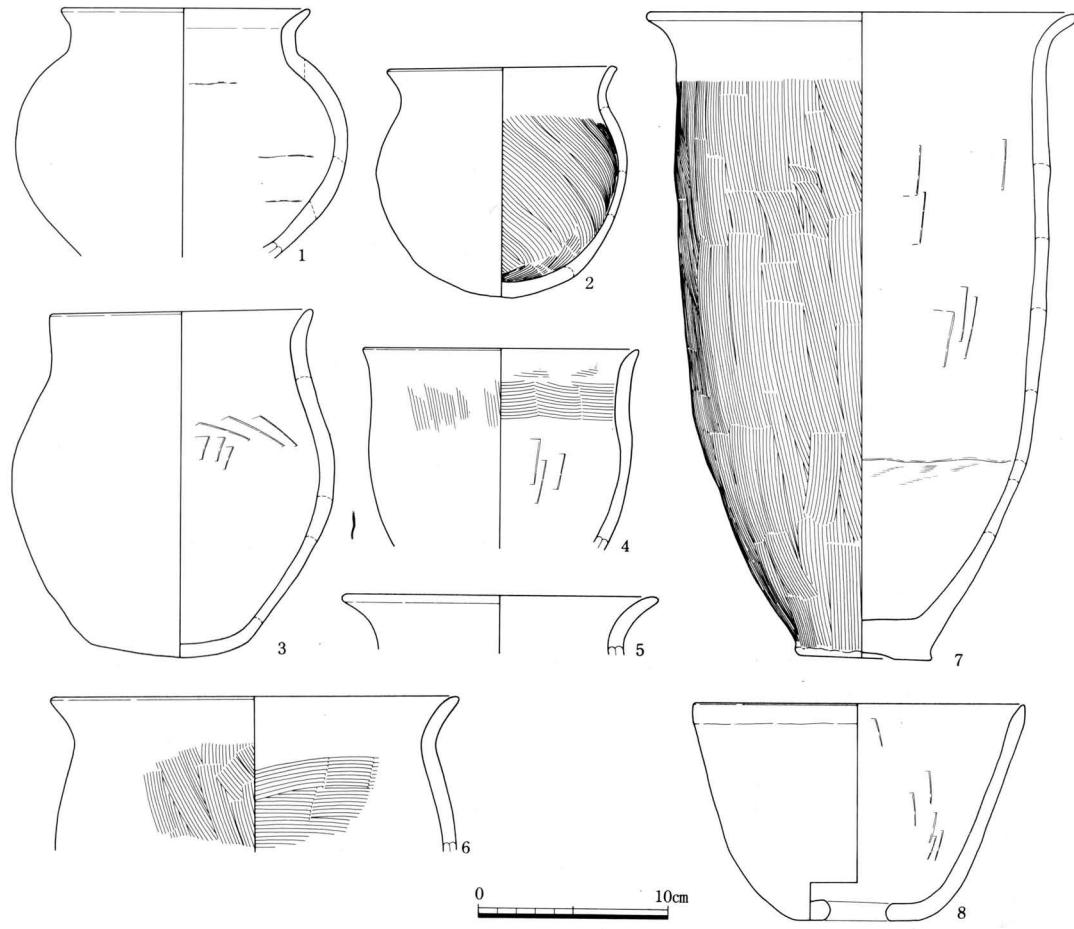
III-73 24号住居址実測図



III-74 24号住居址カマド



III-75 24号住居址土器出土状態



III-76 24号住居址出土土器実測図

10cmである。P 10は貯蔵穴と考えられ、径90cm・深さ44cmの規模を有する。床面は全体に軟弱で不明瞭であったが、カマド及び貯蔵穴周辺よりかなりの量の土器が出土している。

遺物（III-76）

短頸壺(1) 底部と胴部1/3ほどを欠損し口径13.0cm・胴部最大径17.8cmである。口縁部は頸部にて内傾ぎみに短く直立したのち外反し、端部は尖りぎみに終る。胴部は偏球形を呈し胴中位に最大径を有する。外面は全体に横方向のヘラケズリ後軽いヘラミガキによって仕上げられ、内面も全体にヘラミガキがなされる。

甕（2～7） (2)は口縁部と胴部の一部を欠損するがほぼ完形の小型甕で、口径12.2cm・胴部最大径13.3cm・器高12.1cmである。胴部は球形で口縁部は短く外反する。口縁端部は面とり後横ナデされ、若干外方に肥厚する。外面の整形は胴中位から底部にかけてヘラケズリされた後全体にていねいなナデ整形がなされ、内面は斜方向のハケ整形によって仕上げられる。胎土は灰白色の比較的精選された粘土が使用されており明らかに他地域からの搬入品と考えられる。(3)は口径

14.1cm・胴部最大径17.3cm・器高19.5cmで、口縁部は直立ぎみに短く外反し、底部は丸底をなす。外面は全体にヘラケズリによって整形された後、口縁部に至るまで軽い横ヘラミガキがなされる。内面はヘラによる平滑化後ナデ整形される。(4)は小型品で口径14.6cm。口縁部は端部にて短く外反し、端部は尖りぎみに終る。外面は器面の摩耗著しく詳細不明だが、一部に縦方向のハケ整形痕が認められる。内面口縁部は横ハケ整形、胴部はヘラによる平滑化後ていねいにナデ整形される。(6)は口縁部付近の破片であるがやや胴張りの器形が予想される。口径21.8cm。口縁部は内外面とも強く横ナデされ、胴部外面は縦方向、内面は横方向のハケ整形がなされる。(7)は胴部を若干欠損するが完形で口径22.8cm、胴部最大径20.0cm・底径7.2cm・器高34.1cmである。口縁部は短く強く外反し、以下胴部は直線的に底部へ収約してゆく。底部は若干突出しドーナツ状のくぼみ底を呈する。外面胴部は全体に縦方向のハケ整形を行いその後口縁部を強く横ナデする。内面胴部下半には接合痕を顕著に残すが、内面は全体にヘラによる平滑化後ていねいなナデ整形がなされている。

甌(8) 口径17.6cm・底径6.6cm・器高11.5cmで底部に径3.0cmほどの焼成前穿孔を一孔有する。体部は底部より直線的に外開する形態をとり、口縁端部は強く横ナデされることにより尖り氣味に終る。外面はヘラケズリ後ナデ整形され、内面はヘラによる平滑化後ナデられる。

(7)と(8)は住居址東南隅より床面に接した状態で出土している。

以上出土土器の様相よりすれば、本住居址は古墳時代後期の所産と考えられる。

25号住居址

遺構（III-77・78）

4号土壙に切られ、また一部に試掘坑による攪乱を受けている。平面プランは4.00×3.90mほ

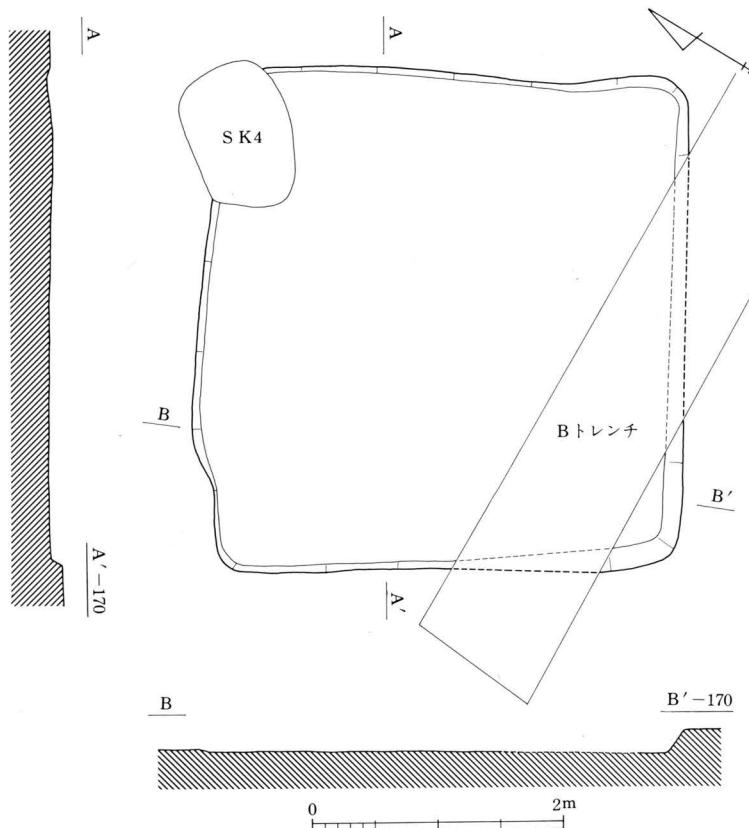


III-77 25号住居址

どのやや不整な隅丸方形を呈し、主軸はN-60°-Eである。検出面からの掘り込みは全体に浅く、壁高は北壁3~5cm・南壁20cm・東壁3~5cm・西壁10cmである。床面は全体に軟弱で判然とせず、柱穴等も検出されていない。

遺物 (III-79)

甕 (1・2) 胎土等からともに同一個体と考えられ、また拓影にて示した頸部破片も同様である。口縁部は約1/6、胴部から底部は約1/3が残存している。復原口径31.4cm・胴部最大径37.8cm・底径10.4cmと胴部に最大



III-78 25号住居址実測図

径を有する大型品であり、胴上半までの残存高は38.1cmを測る。口縁部は頸部から短くくの字状に外反する形態が予想され、端部付近にて若干内湾ぎみに立ち上がる形態をとる。胴部は胴上位が強く張ってこの部分に最大径を有し、以下底部へ向けて直線的に収約する形態を呈する。胴部外面の整形は、胴上位は横方向、下半は斜方向のハケ整形がなされ、下半はその後縦方向の軽く雑なヘラミガキがなされる。内面は胴下位→胴中位→胴上位の順序に3段階にわたって斜めから縦方向にかきあげるようにハケ整形がなされるが、ヘラミガキは全くなされていない。口縁部内面は横ハケ後軽い横ヘラミガキがなされ、また底部はヘラケズリによって仕上げられている。文様は頸部に櫛描簾状文を施文したのち口縁部と胴部に波状文を施文していると思われる。口縁部には3帯の波状文が認められ下から上の順序に、また胴部には4帯の波状文が認められ上から下の順序にそれぞれ施文している。櫛原体は9本/1.7cmである。

以上出土土器の様相よりすれば本住居址は弥生時代後期箱清水式期の所産と考えられる。